

群馬県歴史の道調査報告書第十五集

歴史の道調査報告書

吾妻の諸街道

群馬県教育委員会

吾妻の諸街道

## 序

群馬県は古代より、常にわが国的主要幹線道を擁し、交通史上重要な役割を果してまいりました。

つまり、古代における東山道、中世の鎌倉街道、近世の中山道を始めとする諸街道であり、これらは、群馬県に新しい文化をもたらせ、あるいは県内の文化を他国へも波及させ、群馬県に各時代の文化の華をさかせ、今日の文化県群馬の基礎を築きました。

これら群馬の歴史の道調査は、昭和五十三年度から文化庁より国庫補助を得て五か年計画で実施し、すでに十三街道の調査を完了し、その成果を報告書にまとめてまいりました。本年度は調査の最終年度として、古代・中世の幹線路である東山道・鎌倉街道、そして、近世の湯治・参詣道としての吾妻の諸街道・日光への脇往還の四街道の調査を実施しました。

各街道の調査は、種々の困難性が伴いましたが、調査員の方々の献身的な御努力により、本年度の調査も完了し、ここにその成果を集約した本報告書を刊行することができました。

この報告書が県民のみなさまに広く読まれ親しまれるとともに、今後の歴史の道の保存整備資料として、各地で活用していくだきたいと思っております。

末筆ではありますが、御多忙の中を調査してくださいました調査員の方々、また、調査に御協力いただいた方々、並びに関係市町村教育委員会に心より感謝申し上げます。

昭和五十八年三月三十日

群馬県教育委員会教育長 横山 嶽

明治三年 戸鹿野新町絵図  
(高札場付近)



原町の大桜

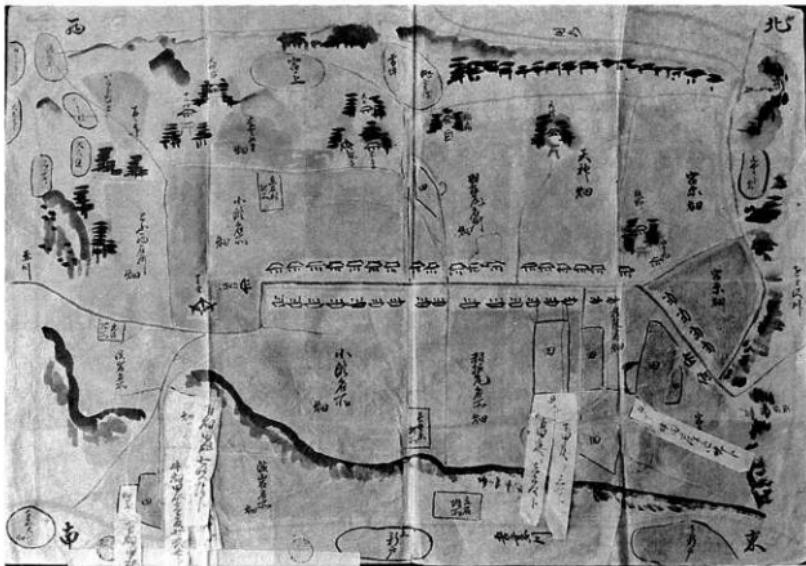


行沢の旧道

六合村役場北隣 馬頭観音



道陸神跡



羽根尾宿の図

西久保 大前に向う旧道  
(沼田——真田道)



桜岩地蔵堂（道しるべ観音）



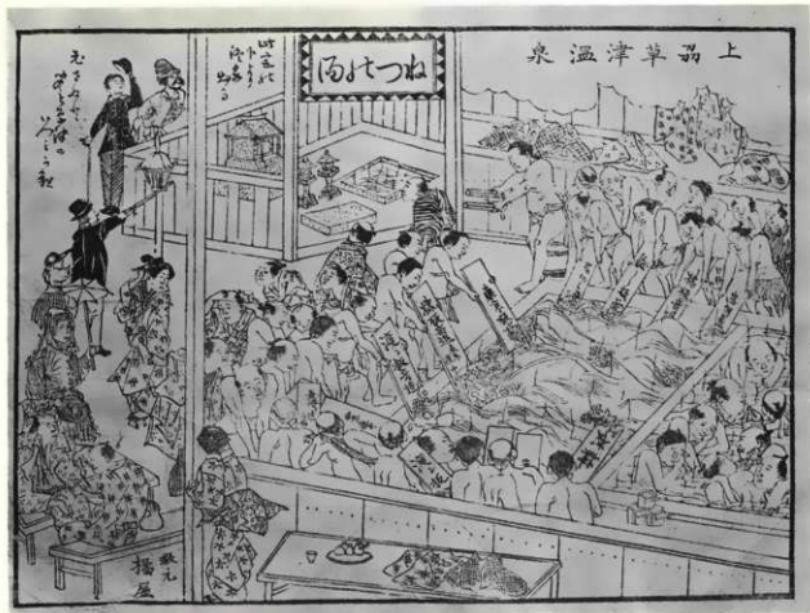
大笠の道標



草津道 伊勢宇橋の碑



新巻の道標



草津温泉 ねつの湯の図

目 次

	群馬県教育委員会 教育長 横山 嶽
	序
歴史の道調査実施要項	
I 吾妻の諸街道の概観	
一、吾妻の諸街道の概観	
(一) 沼田—真田道	4
(二) 草津道	5
(三) 三国裏街道	6
二、吾妻の関所と橋	7
三、草津の湯を訪れた人々	8
四、吾妻三十三番札所	9
II 道の確定	
一、道の確定	
(一) 沼田—真田道	11
(二) 草津道	17
(三) 三国裏街道	24
(四) 四万道	29
二、沿線地図	32

III 吾妻の諸街道の現状と文化財

一、沼田・真田道	
1 沼田城下から中山宿へ	1
2 中山宿から中之条町へ	2
3 中之条町から長野原町へ	3
4 長野原町から羽根尾宿へ	4
5 羽根尾宿から大笠宿へ	5
二、草津道	
(一) 須賀尾峠越え道	65
1 矢竹集落から長野原町へ	65
2 長野原町大津から草津温泉へ	66
(二) 鼻田峠道(六里ヶ原通り)	
1 狩宿通り	67
2 錦原通り	68
3 大笠通り	71
(三) 幕坂峠越え	74
1 中之条町・原町から沢渡温泉へ	80

2	沢渡温泉から生須集落へ	83
3	生須集落から草津温泉へ	85
四	淡嶺越え道	86
三、	三国裏街道	87
1	李ヶ橋から箱島集落へ	87
2	箱島集落から五町田・奥田・新巻集落へ	89
3	新巻集落から植栗・岩井集落へ	91
4	岩井集落から金井・川戸・長須橋へ	93
5	中之条町から鐵川・須川宿へ	95
6	中之条町から岩本・大道峰へ	102
四、	四万道	105
1	中之条町から四万温泉へ	108
2	親都神社から五領へ	109
3	糞原集落から君ノ尾・渡戸集落へ	111
あとがき		113

## 歴史の道調査実施要項

### 一、目的

古来、人や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいいうべき由緒ある道や水路とそれに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用に資することを目的とする。

### 二、調査主体者

#### 群馬県教育委員会

- (1) 指導 調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

#### (2) 総務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を統括する。

(3) 調査員  
群教育委員会事務局管理部文化財保護課長並びに担当職員

真庭唯芳  
月夜野町文化財調査委員

金子正宏

利根商業高等学校教諭

矢島宣弘

群馬県立嬬恋高等学校教諭

奥泉雅夫

群馬県立吾妻高等学校教諭

今井英雄

群馬県立中央高等学校教諭

中之条町教育委員会

中之条町教育委員会

草津町教育委員会

草津町教育委員会

吾妻東村教育委員会

吾妻東村教育委員会

渋川市教育委員会

渋川市教育委員会

新治村教育委員会

新治村教育委員会

#### (4) 調査協力機関

中之条町教育委員会	吾妻町教育委員会	長野原町教育委員会
草津町教育委員会	嬬恋村教育委員会	六合村教育委員会
吾妻東村教育委員会	高山村教育委員会	沼田市教育委員会
渋川市教育委員会	新治村教育委員会	

#### (5) 調査方法

##### ○一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

##### ○二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

#### (6) 調査対象

昭和五十七年度は、吾妻の諸街道及び他街道とする。

##### (調査項目)

- ④ 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば一関・番所・一里塚・宿場・本陣・駿府陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御飯屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所・並木・石疊・橋梁・隧道・常夜燈・道標・地蔵・

道祖神・井戸・河岸・渡船場・渡止及び歴史的名所（社寺・札所・温泉・宿坊等）・名勝（庭園等）の分布状況と保存の実態。

④ 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態。

⑤ 道・運河の歴史的意義・格・沿革。

⑥ 河川の歴史的変遷。

⑦ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

⑧ 江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び都名。

#### 四、調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道、運河ことに分冊として作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

#### 群馬県歴史の道調査報告書

第一集	足尾銅山街道
第二集	日光例幣使街道
第三集	三国街道
第四集	沼田・会津街道
第五集	信州街道
第六集	清水峠越往還
第七集	佐渡奉行街道
第八集	古戸・桐生道
第九集	古河往還

第十集 下仁田道

第十一集 中山道

第十二集 十石街道

第十三集 利根川の水運

第十四集 日光への脇往還

第十五集 吾妻の諸街道

第十六集 東山道

第十七集 鎌倉街道

#### 群馬県歴史の道調査事務局

元文化財保護課長	磯貝福七
前文化財保護課長	関茂
文化財保護課長	森田秀策
前文化財保護課参事	白石保三郎
文化財保護課参事	新藤俊雄
元文化財保護係長	橋口良夫
前文化財保護係長	岸栄
文化財保護係長	奈良部清
文化財保護課調査員	満留和五十三年、五十四年度担当
文化財保護課調査員	大井田利興(庶務担当)
文化財保護係調査員	近藤功
文化財保護係調査員	青木裕(当)

(昭和五十三年度、五十七年度担当)

# I 吾妻の諸街道の概観

## 一、吾妻の諸街道の概観

吾妻地方はおおむね山岳地帯である。この地域に人の営みが始つたのは繩文の昔にさかのぼり、以来嘗々として数千年の生活が展開されてきたのである。人間の生活のあるところ必ずや物資の交流が存在することは歴史の教えのところである。

吾妻地域の交通については、古く日本武尊の伝説に言う「吾妻者耶……」

の鳥居越え道が知られているが、その詳細は不明である。律令時代に入つて、吾妻郡が設置され、郡内に長田（奈加太）、伊參（伊佐萬）、太田（於保太）の三郷が存在したことは、和名抄等の文献に見えるので郡衙などの官衙が設けられていたことは間違いないからうが、その位置については考古学的の発掘をまたねばならない。官衙が存在したとすれば、それらを結ぶ道も当然あつたはずであるが詳細は不明である。

中世に入つてからは、いわゆる鎌倉道が幾筋か相州鎌倉迄通じた。吾妻から吾妻氏等の御家人がこの道筋を鎌倉へと向かつたであろう。（歴史の道第十七集鎌倉街道参照）

戦国期に入ると、この地の有力武士は、あるいは甲斐の武田、あるいは小田原の北条、更には越後の上杉等の群雄の谷間にあつてその身の進退を云々されたが、おおむね武田配下の信州上田の真田氏に属して激動の時代を生き抜いたようである。郡内の有力武士は、地の利を生かして天然の要害によつた。

一、沼田—真田道  
二、草津道  
三、三国裏街道  
四、四方道

た。岩櫃、大戸、長野原、中山、羽根尾、鎌原等あまたの古城跡は、「つわものども」の夢のあとを今に伝えている。戦国時代の道は、専ら軍事目的に供されたと言つてよく、その多くは山腹の険阻な位置に配されたようである。

天正一八（一五九〇）年小田原北条氏の滅亡により戦国の世も終りを告げ、吾妻は真田氏の領するところとなつた。あまたの城は岩櫃城を残してすべて破却廃城となつた。真田氏は信州小県より吾妻及び利根を領し、領内に上田、岩櫃、沼田の三城を有し、このライン上の人馬及び物資の交流は相当の量に達したと思われる。いわゆる真田道（沼田—真田道）の成立である。

慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦後も吾妻は真田領として存続し、元和元（一六一五）年大坂夏の陣終了をもつて世の中から戦乱がまったく消えると、郡内の軍事道路はその役目を終え山腹から下り、より平坦なところへとその位置を変えた。岩櫃城も破却され、その城下平川戸も引き払われて、山麓の觀音原に移された。原町の成立である。かくして吾妻にも近世の交通網が形成されて行くのである。

さて、この報告書で述べる「吾妻の諸街道」は、主として近世（江戸時代）の諸道であり、既報の歴史の道第三集三国街道、同じく第五集信州街道に扱つた部分を除く、以下の諸道である。

- 一、沼田—真田道
- 二、草津道
- 三、三国裏街道
- 四、四方道

## 中世交通要図

(中之条町誌より)



図1 中世交通要図

この道は、戦国末から近世初頭に、信州上田の真田氏が、吾妻の岩櫃城を中心としていたようである。

(一) 沼田—中山—中之条—平川戸(後に原町)—岩下—道陸神峠—川原畠—長野原—羽根尾—赤羽根—大曾—信州街道と合流(この道を赤岩通りとする)

(二) 沼田—中山—中之条—平川戸—岩下—高間—中山—赤岩—長野原—羽根尾—赤羽根—大曾—信州街道と合流(この道を赤岩通りとする)

(三) 沼田—中山—中之条—平戸川—大戸—信州街道と合流(この道を大戸通りとする)

(四) 沼田—中山—中之条—平戸川—沼渡—暮坂峠—小雨—長野原—羽根尾—赤羽根—大曾—信州街道と合流(この道を暮坂越えとする)

以上四筋の道のうち、戦国期には(二)赤岩通りが主であつたらしい。(加沢記などによる)しかし、戸時代に入つてからは険阻なこの道は次第に使われなくなり街道と呼ぶにふさわしくなくなった。

(五) 大戸通りは、大戸より高崎方面から来た信州街道と合流しており、既に歴史の道報告書第五集で扱っているので、本報告書では長須橋より大戸の間を沼田—真田道の補足として報告するにとどめた。

四幕坂越えは、草津道の主要な道としての地位を占めることになった。(中之条又は原町より小雨の間)

従つて本報告書では(一)道陸神峠越えについて主として報告することにした。ただし、この道筋の内、松谷(横谷・松尾)—川原畠間は大変な難所で、江戸時代を通じて地元の人も敬遠するほどであった。かの十返舎一九が、草津よりの帰途須賀尾峠を越えて大戸方面へ出ようとして道を間違え、この道

(一) 沼田—真田道

## I 吾妻の諸街道の概観

(一) 江戸・高崎方面よりの道

草津温泉へ通ずる道であり、諸国の湯治客の通つた道である。草津の湯は、

中世以来その名を知られた名湯であり、源賴朝開湯伝説や、室町期には高名な連歌師宗祇の入湯、また太閤秀吉の人湯計画等歴史上著名な人物が数多く草津を訪れている。しかし草津の名を天下に高めしめたのは江戸時代に入つてからであつた。徳川氏が江戸に幕府を開き、参勤交代により全国の諸大名が江戸に出席したことが、関東の奥座敷ともいえる草津の湯の名が全国に喧伝された原因とも考えられる。

草津道と呼ばれる道は数多い。主なものを見列挙してみよう。

を通つたことが、「続腰栗毛十一篇」に出てくる。  
しのめつぐる鳥の声とともに、ふたりは宿をちだしたが、きのふ長のはらより道をとり進へて、かはら烟、横谷といへるあたりへさまよひ、やうやう百姓の家を頼みて一夜をあかし、今朝たち出ても、往還にあらざれば行きもわからず、高崎のかたへ出る道をきけば、榛名山へまほりて順道なりとて、郷原といへるをしきでゆく。

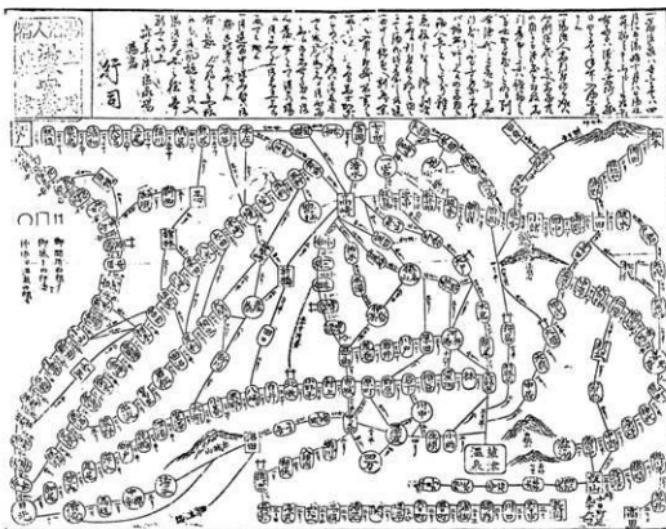
往来のみちをよこへかわら畑

とりちがへたるがはらのしゆく

また、これより三〇年程以前(天明五年)に信州松代藩士がこの難所を通り、「夢中三湯遊覽」に「往還とは申しながら、仕官のもの、父母を持候ものの通路すべき所とは申しがたし。恐敷場所也。此難所は惣て十町余もあるべし。岩窟の場は老丁ばかりの物也」と、その難所ぶりを記している。

この様な次第で、沼田—真田道として、この道を主とすることには若干問題ありとする考え方もあるが、沼田—真田道として取りあげ調査を実施した。

## （二）草津道



(一) 高崎は豊岡で中山道と別れ、神山—室田—三ノ倉—権田—長井—萩生

—大戸—須賀尾—矢竹(ここでは歴史の道第五集信州街道で既報)—須

賀尾峠—長野原—草津(この道を須賀尾越え道とする)

(1) 高崎から三国街道をたどり、下野田から水沢—伊香保—湯中子—五丁  
田—中之条—沢渡—幕坂—小南—草津（この道を幕坂越え道とする）  
以上二道は、草津道のメインであり、前者は往路として、後者は復路として  
使われることが多かったようである。特に後者は、草津の「こわい」湯で  
湯治した浴客の「あがり湯」として、沢渡の湯が重要な意味を持つていたよ  
うで、更に余裕のある者は伊香保の湯につかり帰途についたものようであ  
る。

(2) 信州方面よりの道

(3) 上田—真田—鳥居峠—田代—大畠（ここまでは信州街道と重複）—大

前—赤羽根—石津—前口—草津（この道を鳥居峠道とする）

(4) 中山道の沓掛宿より浅間山の東腹の鼻田峠を越える道であり、峠より

三筋に分かれている。①鼻田峠—狩宿—羽根尾—草津（これを狩宿通り  
とする）②鼻田峠—鎌原—赤羽根—石津—前口—草津（これを鎌原通り  
とする）③鼻田峠—大世（この道を草津道とするには若干問題があるが、  
大世通りとしておく）

以上の三ルートを鼻田峠越え又は六里ヶ原通りと呼ぶ。

(5) 信州中野より湯田中—沓野—沢峰—芳ヶ平—草津（この道を沢峰越え  
道とする）

(6) 信州中野より万座峠を越え千俣より大畠へ出る道。

(7) 信州小諸より地蔵峠を越え鹿沢を経て田代へ出る道。

(8) 沢峰より小倉（入山番所）—大沢—草津へ至る道。

歴史の道調査報告書第三集三国街道で既報の三国街道は越後の諸大名及び  
佐渡奉行などが通行した重要な道であり、五街道に準ずる地位を与えられて  
いた。従つて街道の要衝北ヶ橋と猿ヶ京には関所が設けられ、参勤交代や公  
私用の旅人・荷駄等が厳重にチェックされた。

吾妻川に架かる北ヶ橋は、増水すると川止めとなる。川止めされた旅人は、  
金井宿又は横堀宿に逗留して減水を待つか、上流の長須橋を迂回するかしな  
ければならなかつた。

三国裏街道にも幾つかのルートがあつた。

(9) の鼻田峠越え道（六里ヶ原通り）は、中山道を上方よりの旅人が草津入

湯の為に通つた道である。三筋のうち①狩宿通りの通行量が最も多く、  
為に狩宿に關所を置き草津への旅行者をチェックしたものと考えられ  
る。②鎌原通りは③大畠通りと並んで信州方面の物資の輸送路としての  
意味を持つ道であった。

(10) の沢峰越え道は街道としての歴史は新しいようで、江戸時代末に主し  
て草津への物資を導入するルートとして開かれたようである。信州善光  
寺平方面の物資は「礼道を通り大畠を経由しなければならなかつたが、  
距離的により近いこの道が多く使われたよう、大畠の黒岩良左衛門の  
訴訟事件にまで発展したことはよく知られるところである。

(11) その他の道

越後秋山郷より野反池（現在の野反湖）の畔を経て和光原—引沼—草津の  
道である。この道は現在の六合村入山地区と一つ山を越えた秋山郷の物資  
の交易路として古くから重要な意味をもつてゐたようである。

### （三）三国裏街道

### I 吾妻の諸街道の概観

- (一) 町—中之条—尻高—中山 (ここで三国街道と合流する)
- (二) 李ヶ橋—祖母島—箱島—五町田—植栗—川戸—厚田—長須橋—郷原—原町—中之条—岩本—大道峠—須川 (ここで三国街道と合流する)
- 以上二つの道が三国裏街道の公的なルートであったと思われる。即ち、空ヶ橋の関所が通れない場合は心ず長須橋を迂回することが義務づけられていたようである。長須橋は後述する通り、吾妻川に架せられた公儀橋であった。
- 幕府は軍事的意味あから、主要街道においては原則として架橋を許さず、吾妻川においても、戦国以来の長須橋を例外として、他は船渡しとしていた。李ヶ橋も一時刎橋であったこともあるが、船橋が本来の姿であり、増水すれば川止めしたのであった。
- (三) その他のルート
- (ア) 祖母島—船渡—小野子—関口—四方木で三国街道と合流する道
- (イ) 五町田—船渡—村上—市城—青山—中之条で(一)の道と合流する道 (二)  
の道は草津道のうち幕坂越え道と重複する)
- (ウ) 新巻—船渡—市城—青山—中之条で(一)の道と合流する道
- (エ) 岩井—船渡—中之条
- (オ) 川戸—田辺橋—原町
- 以上、いわゆる日影道から日向側へ吾妻川を渡船で越えて三国街道又は三国裏街道へ出る道である。これらのルートは、原則的には非公式であって、渡船は農作業等の用事で地元の人々が使用するという名目で許可されていたようである。

## 二、吾妻の関所と橋

吾妻は上州の北西部に位置している。上州は関東の北西部に位置する。徳川氏の江戸入府以降、関東の西部及び北西部は軍事上の防衛線として重要な

意味を持ってきた。特に古代からの幹線道路である東海道・東山道が関東山地を越える箱根及び碓氷は最も重視された。慶長・元和の頃、徳川政権もようやく安定の度を増し幕藩体制も不動のものになつたとはいえ、関東山地

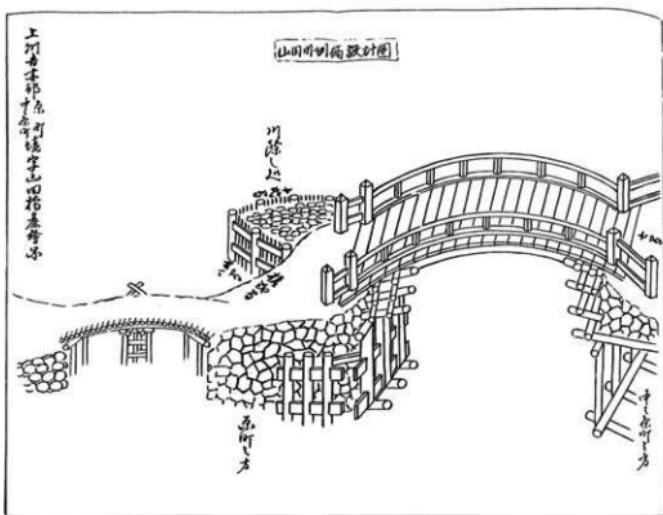


図3 山田川橋設計図(原町誌より)

の軍事的重要性は少しも変らず、特に上州西北部の守りは、江戸に比較的近い大外様大名前田氏を意識して重視されたようである。

上州には全国の関所の三分の一があったという。うち三分の一が山間地吾妻にあった。大戸関、狩宿関、大笠関（以上信州街道沿い）、李ヶ橋関、狼ヶ京関（以三國街道沿い）、但し至ヶ橋は旧群馬郡、猿ヶ京は現利根郡に属す、入山番所（草津道のうち渋峠より六合村入山の小倉を経て草津へ至る道に設けられた。文化二年設置許可）等がそれであり、大戸、李ヶ橋、猿ヶ京の三関は幕府の直接管理する重要な関所であった。なお狩宿・大笠両関は寛文二（一六六二）年沼田藩主真田伊賀守より幕府に願い出て許可、設置されたものであった。（各関所の詳細は歴史の道第三集及び第五集に既報）

江戸時代には軍事的意味あいから架橋は極めて制限されていた。しかし、吾妻には公儀橋あるいはそれに準ずる橋が比較的多いのである。これは、吾妻川等の諸川が断崖をなし、渡船場の設置に難があつたためと考えられる。

加沢平治左衛門の著と考えられる「沼田領品々覚書」によれば、天和元（一六八一）年吾妻地方の主な橋として、建い橋、てつ寿の橋、須河橋、こと橋、羽尾橋、志か籠橋、赤岩橋、小雨橋、ゆわらノ橋、山田川橋、大塚ノ橋、雁ヶ沢橋、猿橋、袋倉ノ橋、渡沢橋の「御普請橋」で、藩主の命で領内村々より人足を出して掛替えたものである。

### 三、草津の湯を訪れた人々

草津温泉については既に数多くの案内書や研究書の類が出されており、詳細はそれらの諸書に譲り、ここでは草津を訪れた人々に焦点をしづつ述べることとする。

#### (一) 中世以前の入湯

##### (1) 源 種廟

日本武尊、弘法大師の入湯については、伝説の域に属するので除くことにして、源頼朝の開湯、入湯については同じく伝説とはいえ一概に無視しえない。「吾妻郡略記」に「源頼朝三原野の狩の時間湯といふ。御座の湯沸出づる所に大石あり、右大将此の石に座し給ふによりて御座と名づくと云へり」とあり、草津五湯の一つ御座の湯の由来を記している。源頼朝の三原野の狩の折に草津を訪れたとしているのだが、木曾義仲敗死後の厳しい落ち人狩りのことと合わせて未だ詳細は解明されていないので、今後の研究に待つ以外にならない。

##### (2) 由良成繁

文明年中（一四八五年）新田郡太田金山城の留守を預っていた由良成繁のこととが「松陰私語」に出てくる。

宗悦入道（注・由良国繁のこと）者、去年十月以来由良之旧宿陰居、嫡子成繁者四月十三日草津湯治、可走廻被官人等三百余人供奉

##### (3) 豊臣秀吉の人湯湯鑑書

文禄四（一五九五）年太閤草津入湯御鑑書（湯本平兵衛家文書）によれば、一万の供を従えて、大津→佐和山→岐阜→土岐→木曾福島→松本→真田→鎌原→草津の道筋を一五日をかけて入湯しようとしたらしい。結果、入湯は実現しなかつたが、當時既に草津の湯は天下人秀吉の気持ちを動かす程に、その名湯ぶりが喧伝されていたものといえる。

その他にも、文明一八（一四八六）年に僧堯惠の入湯（北国紀行）、文龜一（一五〇二）年に高名な連歌師宗祇の入湯（同じく宗祇につきそつて草津に來たのが弟子宗長であった。（宗長著「宗祇終焉記」）、天正一五（一五八七）年ごろ前関白近衛龍山公の入湯（光泉寺藏和歌巻物、豊臣秀次、前田利家、

## I 吾妻の諸街道の概観

平安末期に案出された觀音雪場巡りは、四国八十八ヶ所巡礼を始め、次第に地方にもその流行がおよせていった。觀音は正しくは觀自在菩薩といい、

## 四、吾妻三十三番札所

- 五、安積 良齋（儒学者）「登白根山記」
- 六、佐久間象山（漢・洋学者）「香野日記」
- 七、清河 八郎（志士）「瀬田記略」
- 八、堀 素成（国学者）「草津繁昌記」
- 九、高野長英、金井烏州、富田水世、小野湖山等の有名人がいる。

江戸時代において、草津は以前にも増して著名となる。文化一四（一八一七年改版の諸国温泉効能番付（中沢昇三氏蔵、草津温泉史所収）を見ても、草津之湯は西の攝州有馬湯に対して東の大門を張っている。したがつて、世の太平と相まって有名無名の夥しい数の人々が諸國より草津を目指した。特に草津が隆盛を極めたのは文化文政期であり、その中には十返舎一九、小林一茶など著名な文人があままれている。ここにかれらの中のいく人々を、その著作のうち草津を来訪した記述のあるものと併せて列記することにする。

- 一、平沢 旭山（漢学者）「漫遊文章」
- 二、小林一茶（俳人）「草津道の記」
- 三、清水 浜臣（国学者）「上信日記」
- 四、十返舎一九（戯作者）「善光寺草津道中金草鞋」「上州草津温泉道中続膝栗毛」

大谷吉繼、織田信秀、長尾為景、小幡貞信などの戦国武将の入湯、一向宗の蓮如、教如、顯尊等本願寺法主の來浴等々、多士済々である。

## 江戸時代の入湯

江戸時代において、草津は以前にも増して著名となる。文化一四（一八一七年改版の諸国温泉効能番付（中沢昇三氏蔵、草津温泉史所収）を見ても、草津之湯は西の攝州有馬湯に対して東の大門を張っている。したがつて、世の太平と相まって有名無名の夥しい数の人々が諸國より草津を目指した。特に草津が隆盛を極めたのは文化文政期であり、その中には十返舎一九、小林一茶など著名な文人があままれている。ここにかれらの中のいく人々を、その著作のうち草津を来訪した記述のあるものと併せて列記することにする。

阿弥陀如来の脇侍の一つとして来迎思想の中でも重要な役割を担っている。淨土教の発達に伴って觀音信仰は独自の発達をとげて行った。  
吾妻においても、中世すでに吾妻三十三番札所が成立していたようである。大永七（一五三二）年頃、時の岩橋城主赤藤越前守により、応仁の乱後荒廃していた吾妻三十三番巡礼所が再興されたようである。（『中之条町誌』）その後天文以来の兵乱で中世の三十三番札所も廃絶したが、元禄三年横尾の吉祥院、大塚の普賢院、尻高の福藏寺、大塚の林権左衛門らの尽力で再興された。  
次に元禄再興の吾妻三十三番觀音札所の一覧表を中之条町誌第一巻より転載する。

番号	觀音名	場	近世吾妻三十三番觀音札所（元禄三年以降）																				
			山	田	町	原	倉	島	島	戸	田	井	沢	巻	泉	栗	所	堂	名	祭日	別當	備	考
16	正觀音	千手觀音	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	
15	正觀音	千手觀音	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	
14	正觀音	千手觀音	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	
13	正觀音	千手觀音	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	
12	正觀音	千手觀音	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	
11	正觀音	千手觀音	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	
10	正觀音	千手觀音	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	正觀音	千手	
9																							
8																							
7																							
6																							
5																							
4																							
3																							
2																							
1																							

正觀音																			
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16		
正觀音																			
千手	如觀音	千手	馬頭輪	十面輪	王觀音	馬頭	馬頭	千手	十一面	正觀音	千手	千手	正觀音	千手	正觀音	正觀音	正觀音		
大	雄	横	橫	橫	青	伊	西	中	五	反田	中	之	四	方	下流渡	上流渡	沢		
塚	尾	勢	中	之	中	中	中	之	田	中	村	中	方	貢船平	黃田	湯原	波		
川	高	勢	山	町	海	音	定	岩	和	馬	寺	御	玉	禪	峰	白	石		
塚	津	高	桃	海	音	通	萬	羽	利	王社	堂	谷	谷	平	戶	沢	沢		
平板	津	瀬	寺	寺	山	寺	崎	堂	堂	堂	堂	堂	堂	見	寺	寺	寺		
1	1	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4		
18		3	3	18				18	18	18	18	18	18	18	18	18	8		
		清見寺						林昌寺									林昌寺		
		天正23・5.10						現	在	林昌院							林昌寺		
		28.18合併						高津	高津	高津	高津	高津	高津	高津	高津	高津	高津		
		合併						明治17・18合併									明治17・18合併		
		伊豆						現	在	林昌院							現	在	林昌院
		正観音						伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆	伊豆
		正観音						正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音
		正観音						正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音
		正観音						正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音	正観音

(註) 原本、寛政十年 三島沢別觀音別當小池重左衛門筆写、三島湯原寺本より作製

観音巡礼は、近世の庶民にとって、信仰の対象であったことは勿論であるが、娛樂の意味も含まれており、封建制下に気ままな旅行の許されなかつた庶民のさきやかな羽根伸しの場でもあつた。坂東三十三ヶ所、秩父三十四ヶ所、西国三十三ヶ所(都合百カ所)の巡礼も同じ意味あいをもつていたわけである。

観音巡礼の隆盛にともない、その巡路となる道も整備されたと考えられる。

## II 道の確定

### 一、道の確定

#### (一) 沼田—真田道

##### 1 沼田城下から中山宿へ

沼田から中山へ行く道として、沼田城大手門を起点にして記述する。沼田から中山へは二本の道が通っていた。即ち、戸鹿野町の北端に位置する東源寺の北側の道を通って利根川を渡り、下川田町の内宿へと通じていく道と戸鹿野町を南下して戸鹿野新町を通過し、戸鹿野橋を渡つて屋形原へ入つていく道とであつた。そして、二つの道は下川田町篠尾で合流することになるが、東源寺からの道はまた下川田町田中から分かれて今井町の北を通る別の道となつていく。従つて沼田から中山への道は下川田町篠尾で交差したあと、沼田市と高山村の境をなす北の権現峠と南の小峠を通つて、高山村中山付近で合流する二本の道があつた。

最初に小峠を通つていく道から記述する。

沼田城大手門のあつた沼田小学校正面門からお馬出し通りを南進すると、本通りの四つ角にである。そこを右に折れ、一五〇メートル位進むと下之町の交差点になる。更にそこを左に折れると県道戸鹿野・下之町線になり、およそ六五〇メートル程南下すると右手に折れて戸鹿野町へと入つていく。戸鹿野町の北端に位置する東源寺の前を通過し、戸鹿野町から戸鹿野新町へと入つていく。戸鹿野新町から利根川へ道は急勾配をなして下つていく。

鹿野町を渡ると国道十七号線に出る。その国道を横断し、上越線の線路をも横断し直進するわけだが、上越線敷設の際に削りとられて、現在はほとんど道形は残っていない。急な段丘崖の斜面を登り、鉄道線路を横切ると屋形原町へと入つていく。屋形原の三差路を右に折れ、段丘崖の際に沿つて進んでいくと前原の集落へと至る。現在の道路は前原の集落の所で、谷に沿つて大きく屈曲しており、旧道は谷をそのまま横切つて直進していたが、現在道形はほとんど残っていない。前原から篠尾に至るが、篠尾の集落へ入る手前から旧道は右に折れてだらだら坂を上つていくと篠尾神社につきあたる。この篠



戸鹿野橋



旭開拓部落より小峠に至る旧道

尾神社の前と裏に二本の旧道があつて、それぞれ田中の集落へと通じ、更に沼田東源寺へと連絡している。篠尾神社の横を通りておよそ八〇メートル位進むと右側の路傍に小さな道しるべがおかれていて、そのあたりから旧道は雑木林や杉木立の中を入っていく。そして、そよそ二キロメートル先の旭集落まで人家は全然なくなる。道は夏草がおおい繁つて柏道のようであり、鹿道に近い。途中四〇〇メートル位にわたって道は沢の中に、また杉木立の中に入つて消滅してしまつている。

旧道は旭集落の二〇〇メートル位手前から現在のアスファルト道と合流し、旭集落に至る。旭集落を通過する道は舗装が切れて山道となり、勾配が急になつてくる。小峠になる手前では二手に分かれるが、左へ行くと子持山登山道である。右手の方を行くと間もなく標高八二三・六メートルの小峠になる。小峠からまた道は二手に分かれるが、旧道は右の方の道を北西の方向へと進む。道なりに沿つて四〇〇メートル程下つていくと土橋があり、その先から道は舗装されている。旧道はやがて和田の集落へ入り、三国街道を横切つて中山神社の前を通り、中山城跡の所で權現峠からの道と合流する。

一方、沼田の東源寺わきの道は、東源寺の北側の段丘斜面を一気に下つて上越線の線路を横切り、更に滝坂、国道十七号線を横切つて西進する利根川によつかる。往時はここを渡し舟で渡つて対岸の内宿へと入つていたと思われるが、「加沢記」には此の辺一帯を「かじか瀬」といは「かちけ瀬の舟を渡して……」と出でてくる所から徒歩渡りができる瀬があつたのかもしれない。

川岸から内宿まではやはり急な坂になつており、薦師堂の前を通つて川田公民館の前に出る。その三差路を左折すると間もなく国道一四五号線に出る。国道に沿つて三〇〇メートル位行くと旧道は右の方に迂回したのち再び国道に出て田中へと至る。田中の集落から旧道は右手の山の中へと入つていい。後入沢集落の北を通り、雑木林の中を旧道はずつと続いている。後入



下川田町田中付近の国道145号線



高山村新田宿手前の旧道

## 2 中山宿から中之条町へ

沼田城下からの二本の道が中山城跡付近で合流したあと旧道は高山小学校や高山村役場の前を通つて国道に出るが、それを横切つて溝口の集落へと入つていく。溝口の集落を通る旧道は国道より一段高い所を通つているが、



中之条小枝沢に至る旧道

溝口の先、どのあたりで名久田川を渡ったか判然としないが、添うが森から見沢まで旧道は残っており、見沢から名久田川が南に大きく湾曲するあたりは道形は残っていない。旧道は火之口部落の南を通つて、やがて中之条町に入る。

中之条町塩原から壁谷の間は国道に沿うようにしてその南に旧道が通つていたが、現在は耕地整理によつて道形は残っていない。壁谷からは名久田川の左岸に沿つて国道を横断し、その後に並行して行くと小枝沢に至る。

小枝沢でまた国道を横切り、その左側にはほぼ並行しながら行くと二日市、柳田へと至る。柳田からおよそ三〇〇メートル位国道上を進むが、旧道はそのまま直進し、畑中の道を行き、名久田川を渡り国道に合流する。そして小塙のあたりで旧道は国道と分かれ、国道の左をほぼ並行して走り、七日市で国道に合流したあと、吾妻神社の前を通つて中之条伊勢町へと



中之条町から長野原町へ

中之条上ノ町から四万街道と分れて左折すると伊勢宮がある。ここを通りて一〇〇メートル足らずで中之条バイパスに出る。旧道はバイパスの北側を通り、現在の山田川橋の上流一〇〇メートル位の所を出て、橋を渡つて南に向かう。原町バイパスを横切つておこり坂に出てくる。約二メートル幅のこの坂を上つて、吾妻線沿いに西進。大きな長屋門を右に見ながら踏切をわたつて南進。雷電神社鳥居を左に、吾妻高校高欄を右に原町の大釋に出る。(ここから原町の市街を真西一直線、稻荷神社まで進み、鉤の手に曲がつて再び市街地に出て、西進。原町バイパスが出来たものの道幅が狭い為、朝夕混雑している。善導寺山門前を過ぎ、達弁橋の先東京電力原町発電所の所でバイパスが合流してくる。旧道はそのまま露沢橋の手前一〇〇メートル

位の所で、国道一四五号線と分かれ、右斜面を上つて、郷原の唐沢集落に入つて行くが、長野原線工事や国道の取付け工事のため登り口、集落への道がはつきりしない。唐沢集落から、株名神社前を通

集落を過ぎた先は畠の中を通り、添わざが森の方へと行く。

ここで、溝口集落の先の添うが森、添わざが森付近で旧道は名久田川をはさんで両岸をほぼ並行して中之条町大塚付近まで走つてゐるが、土地の古老達の話によれば、名久田川の南を通る道が主要道であつたといふことなので、その道について主に記述することにする。また、名久田川の北岸を通る道も添わざが森から関田の集落の入口付近までは道形が消滅してしまつてゐる。

入つていく。

### 3 中之条町から長野原町へ

中之条上ノ町から四万街道と分れて左折すると伊勢宮がある。ここを通りて一〇〇メートル足らずで中之条バイパスに出る。旧道はバイパスの北側を通り、現在の山田川橋の上流一〇〇メートル位の所を出て、橋を渡つて南に向かう。原町バイパスを横切つておこり坂に出てくる。約二メートル幅のこの坂を上つて、吾妻線沿いに西進。大きな長屋門を右に見ながら踏切をわたつて南進。雷電神社鳥居を左に、吾妻高校高欄を右に原町の大釋に出る。(ここから原町の市街を真西一直線、稻荷神社まで進み、鉤の手に曲がつて再び市街地に出て、西進。原町バイパスが出来たものの道幅が狭い為、朝夕混雑している。善導寺山門前を過ぎ、達弁橋の先東京電力原町発電所の所でバイパスが合流してくる。旧道はそのまま露沢橋の手前一〇〇メートル



行沢の旧道

つて辻で、長須橋を渡ってきた道が直交してくる。そのまま西進して五メートル余り行くと分岐点。右折は古谷を経て岩櫃山へ。旧道は直進してガードレール手前の農道を林の中に入していく。吾妻線が左下に走っているのを見ながら進むと崖崩れのため通行不能。やがて吾妻線のトンネル上の通称「鬼岩」へ出てくる。国道が左真下に見える所を通過する、と、古谷から来る道と合流するが、合流点は改修工事でわからなり。旧道は南北に向けて緩やかに下り、五

○メートル位で矢倉鳥頭神社手前で国道と合流する。

岩島町立第一小学校先の信号を過ぎて一〇〇メートル位で国道と分かれ、通称「かんまわり」を通って西沢橋の西で国道に出る。そして、すぐに国道と離れて吾妻川の段丘ぞいに西に進む。岩島の多目的集会所等の南側に旧状を残して岩島中学校手前の支所の所で再び国道と合流する。ここからは国道を机の岩下郵便局の先の大沢橋まで進み、橋を渡って商店の所から右折して緩い坂を踏切を越えて上っていく。応永寺の山門を見ながら寺沢川を渡り直進。二〇〇メートル位で菅原神社の参道を右に見ながら旧道は姑山の下を通り、漆戸に至る。吾妻線と並行して道は通じている。久々戸川の所で少しもいて岩島第二小学校の前に出てくる。ここを過ぎると線路と少し離れて西北、山裾に沿って、よく旧状を残した道を進む。左前方に松谷発電所水路が見えてくると中組である。T字路になつて、左折すれば踏切を渡つて国道へ出るが、右折してすぐ深い雁ヶ沢川へ降りていく。かなり低い所で橋を渡る

が、丁度現在の水路の下あたりである。河床から登りつめ山裾を西進していくが道形はわからず、吾妻線路沿いを多少とも上下し、平沢橋の三メートル位北側にできて、諏訪神社跡地前を通る。今度は線路を右(北)上に見ながら並行して上組集落に入つて行く。この道が旧道で線路すぐ北に觀音堂がある。旧道は民家の間を行き、堀によつつかつて左折し、堀にそつてすぐ右折する。鉤の手になつてゐるのである。

通称「かどや」を過ぎて一間弱の道を一五〇メートル位進んで南に向かうと、すぐ国道一四五号線である。

明治四十年の馬頭観音を左に見て進むといよ／＼吾妻渓谷。

溪谷最初のトンネルから崖を線路上に登つて行くが、全く登り口はわからない。旧道は線路上少し上を並行して進むが、道形はわからぬ。野猿茶屋が見えてくると、道形は残り、線路上三メートルから五メートル位の所を通り、沢の所が通行不能となつてゐるが、これを過ぎると急勾配の曲り道となつて、下の国道が見えなくなつる。国道まで五〇メートル位あるであろうか、あとはそのまま多少上下しながら崖ぎわをえ

やえん茶屋の上・道陸神峠の荒れた道



三つ堂前の旧道



の所を通り、沢の所が通行不能となつてゐるが、これを見ると急勾配の曲り道となつて、下の国道が見えなくなつる。国道まで五〇メートル位あるであろうか、あとはそのまま多少上下しながら崖ぎわをえ

ぐつてのびている。足をすべらせそな箇所も一々あつて荷駄が通れたか疑問である。時折、下を通る車が見え隠れするが、音はほとんど聞こえない。やがて熊野茶屋の近くに来ると急な下りである。急坂を下がつてから、線路上において、国道近くまで下りてきて、八ツ場沢の手前から線路上に登り、通称「死に岩」の下を通り石畳から少し高い所を通って三平にぬける。この辺りの道は藪で何とか道形はわかるもののが通っている形跡はない。ドライブインの少し先から線路上に登り、線路を渡つて吾妻川沿いに行く道は江戸時代のものではない。

三平からは旧道は歴然。三つ堂の前に出てきた道は一メートル弱、緩やかに西進しながら下つて行き、川原畑諏訪神社前に出てくる。ここより山手に入つて行く、台風で荒れた沢を通り、七〇八〇メートルで久森幹につく。ここを下ると久森小学校（長野原第一小学校）の裏手に出る。久森沢川にかかる鉄橋の所から一度線路の下に出で、立馬に登る。折の沢をまたと林、勝沼の入口。この坂を少し登つていくと「右ハぬまだ、はるな」「左ハやま」の道しるべが沼田・上田を結ぶ小さな道を認めている。ここを登りつめると十字路となり、旧道は西に伸びている。宮原の王城山神社前から道は拡幅され、中標音堂の所に達する。ここで新道と分かれ、雜木林の中に入つて行く。右にカーブし沢を左下に見ながら一メートル位の道を進み、沢を渡つた所に延國供養塔等六基がある。この後、旧道は山の中深くわけ入つて北上する。国道からは一番遠く離れて、やがて横壁の集落を正面下に見ながら尾坂の桑畑に下つて行くが、道形は藪で所々わからぬ。尾坂の山ぎでは人家はほとんど見られないが、耕地は松谷上組からここまでには林地区に次いで広い。長野原合同宿舎前までは旧状をどめているが、ここから拡幅舗装された道は津南・秋山・長野原線にすぐ出る。旧道はこの道に出る直前で吾妻線を横切り、文化四年の馬頭観音の前から食堂につき当たる。ここから河床に下り、須川（白砂川）を渡つた。河床は大変深いが、吾妻川に合流するこ



(国道から旧道へ)

の地点が、岩のつきだしによつて一番幅が狭い。崖を登ると国道のすぐ北を通つて長野原諏訪神社の前に出てくる。そのまま市街地を西に進んで電報電話局前に進む。

#### 4. 長野原町から羽根尾宿へ

長野原電報電話局前から右手山側通水記念碑の所に入つて行く。旧道は幅一メートル位で旧状を残している。上つたり下つたりを三回程繰り返し、群馬大津駅入口の西の坪井平橋の所に出てくるが、この辺の道形はわからない。左下に中央小学校が見える。国道を三〇〇メートル程行つた二つ目のカーブで右に上つていくと坪井に至る。長野原警察署の上を通り西進して、民家の間を通つていくと六合村吹久保への道に合流する。これを少し北上し三階建てのアパートの手前を左折して、南西方向に旧状をとどめた道は緩やかに下つていく。民家の西の小さな坂の所を右折すると旧状を残した道はわずかで大津神明宮に至る。

長野原町大津の草津有料道路と国道一四五号との三差路より旧道は、国道沿いに進み、草木原へ向かう小道となる。坂を下つて集落に入りそのまま進むと墓地がある。旧道はそこより右へ折れ遅沢川を渡り対岸の諏訪神社裏に出る。ここは、現在、国鉄吾妻線が通り、墓地よりここまで廃道である。

諏訪神社から旧道は、線路南側を通り国道に出る。国道は羽根尾宿内を通つている。

この羽根尾・大津地域は、昔、交通の要所であり、大津の交差点で草津道が分歧し、沓掛・狩宿からの草津道が羽根尾駅前で沼田一真田道と合流し、この草津道が、諏訪神社前で分岐している。

## 5 羽根尾宿から大盆地へ

羽根尾宿を過ぎてから旧道は、国道一四四号となり幡恋方面へ向かう。

一キロ程進むと長野原町と幡恋村との境を流れる赤川である。旧道は、現在の橋よりわずか上流を渡って標高差五〇メートル程の急坂を登り滝ノ上へ向かう。この道筋は今も残っている。坂を登った旧道は、村道となり畑の広がる高原状の地帯を通り、集落入口で左折し、また坂を下つて国道に出る。ここは、吾妻線鉄橋の手前である。

国道を二〇〇メートル程進み、オツムギ川を渡ると半出來の集落へ入る。

旧道は、オツムギ川沿いの小道を進み、東平<sup>ひがひら</sup>と呼ぶ水田と畑の広がる地帯を通り、今井川左岸を二〇〇メートルほど進んで今井に入る。今井川を渡る付近から道筋はなくなっているが、集落内の観音堂よりも残っている。

旧道は、石津への村道を進む。未舗装の小道で、諏訪神社前より五〇〇メートル程進むと左折し、さらに狭い道に入る。落差五〇メートル程もある潮戸の滝の上流部を渡り、三原の湯窪に出る。この間の旧道は、廻道となつていて、現在の湯窪は、わずかな平坦地で旧利用した畑があり、その畑の中で旧



東平より今井へ向かう旧道



三原の仮坂



中居～赤羽根の境の沼田～真田道

(手前赤羽根右への道中居)

道は、草津道と合流する。ここより上の山までの道筋はなくなっているが、県道と万座有料道路を横断し、上の山集落へ向かう小道が旧道となる。この小道を進むと仮坂と呼ぶ坂を下り、空沢を渡つて県道に出る。仮坂は、たいへんよく道筋が残っている。

空沢より県道を四〇〇メートル程進むと、幡恋村立東小学校へ向かう道がある。村道三原西窪線で、これが旧道である。小学校を過ぎると舗装も切れ、荒れた道となる。崖下を吾妻川が流れ、その左岸を二〇〇メートル程進むと村道西窪門<sup>せいろうもん</sup>貿易線と合流し、万座川を渡る。村営アパートの横を通り、給食センター横の小道を通つて国道一四四号に出る。

ここが西窪である。集落内の国道左側に双体道祖神があり、そこから小道が裏山に向かつていて、これが旧道である。こより旧道は畑をぬけ、大前の幡恋村役場裏を通り、旧役場・大前神社前で国道に出る。なお、この区間の道筋ははつきりしない。



横壁、小倉（上の道が須賀屋鈴からおりてきた道。  
下の道左が横壁手前が朝原、長野原へ）



勘場木の旧道（長野原）

大前の集落内をしばらく進むと、左側に駐在所がある。旧道は、このわきから吾妻川へ下る小道となる。川原より道筋はなくなり、対岸は絶壁で道を確定するのは困難である。

この不明な部分は、八〇〇メートル程あり、崖上には旧道が残っている。

そこは、吾妻川と大堀沢との合流部右岸で、旧道はその後、大堀沢右岸を五〇〇メートル程進み、沢を渡って、大笹神社前の道へと通じている。

旧道は、神社前よりもなく国道に出で、そのまま大笹宿に入る。この大笹宿中央では、柵掛からの旧道と合流している。

以後の道筋は、ほぼ国道沿いに進み、田代発電所付近より崖上にあがって田代に入る。田代からは、またほぼ国道沿いに鳥居鈴へと向かい、信州真田へと入る。

なお、大笹う鳥居鈴間は、昭和五十四年度に調査ずみなので重複をさけ、省略した。この間の道については、歴史の道調査報告書第五集「信州街道」田代に入る。田代からは、またほぼ国道沿いに鳥居鈴へと向かい、信州真田へと入る。

なお、大笹う鳥居鈴間は、昭和五十四年度に調査ずみなので重複をさけ、省略した。この間の道については、歴史の道調査報告書第五集「信州街道」

を参照されたい。

## （二）草津道

### 1 須賀尾鈴越え道

矢竹集落の南で草津への道は分岐する。左折すると信州をたどる万騎鈴へ。右折して小川を渡り林の中を行くと県道吾妻・長野原線に出る。矢竹の集落を右に見ながら国道をそのまま進むが、しばらくすると国道を絶断しながら須賀尾鈴にたどりつく。

鈴からは大きく迂回しないで、深沢の源流に沿って下っていくが、急勾配をすぎると深沢と少しすれ離れてやがて分岐点に達する。長野原への道は左折するが、右折は小倉集落である。桐屋はここを通じるべから目と鼻の先。桐屋前を通つて吾妻川の断崖上に出て西進していく。山崩れのため、通行不能箇所もあるが、道形は一間幅で続いている。沢を渡つて崖の上を進みあとは林の中を河岸に向けて、まきながら降りていく。右に大きく曲がったその先が琴橋である。琴橋を渡つてまもなく、長野原諏訪神社前に出る。ここより大津までは、沼田—真田道と同じ道筋である。

大津の交差点、神明神社前で沼田—真田道と分岐した旧道は、草津有料道路上の山麓を曲がりくねつて勘場木へ向かう小道となる。

集落内を通過してまもなく、草津有料道路に出るが、わずか二〇〇メートルで二軒屋に入る小道となる。この入口で、運沢川を渡つてきた狩宿・羽根尾方面からの草津道と合流する。

二軒屋から旧道は山道となる。現在は、畑へ向かう道として利用されていが、この開墾地を過ぎると廃道同然の道で、小さな鈴を越える。ここが立石坂である。

開墾地より一五〇〇メートル、六合村の村道に合流し、湯久保へ向かう。

旧道は、湯久保で集落内を通る道と畠を通る道の二筋があつたようであるが、

この二筋の道も集落のはずれで合流する。この間、約五〇〇メートルである。また、湯久保より太子・小雨方面へぬける沼田道があつたと聞いた。

湯久保から旧道は、ふたび山道となる。今はほとんど人も通らない廃道化した道である。二五〇〇メートル程進むと、草軽電鉄の軌道路に出る。草津までこの軌道路が、ほぼ旧道となる。

草津町の本白根農場付近より舗装道となり七〇〇メートル程先で幕坂峠越えの草津道と合流する。そして、坂を上り、草津有料道路と合流する。ここは、運動茶屋の大きな石碑が建っているところである。以後、旧道は、草津温泉街へと向かう。

なお、長野原町二軒屋より立石・洞口・谷所を通る草津道もあつたようである。

## 2 鼻田峠道（六里ヶ原通り）

信州沓掛より鼻田峠を越え広大な六里ヶ原を横断するこの道は、三筋あつた。

狩宿方面への道、鎌原方面への道、そして大釜への道である。これらの道の名称については、後述することにして、ここでは、前者より、狩宿通り、鎌原通り、大釜通りと呼び道の確定をすることにした。

### ○ 狩宿通り

信州沓掛より北へ、鼻田峠を登った所に峰の茶屋がある。ここより小浅間の東麓を通り二キロ、群馬県に入る。

旧道は、現在の国道一四六号に沿って進む。正確には国道のわきを通つているのであるが、その道筋をはつきりたどることはできない。県境より道は、ゆるやかな下り坂で、約一キロメートル進むと片蓋川の空堀（火山灰土のた



別荘地内を通る  
狩宿通り  
(桜岩地蔵付近)

め水が地下に伏流し  
普段流水のない川の  
こと)に出る。この  
手前の左側に入る道  
がある。ここが、大  
釜通りとの分岐点で  
分去茶屋のあつたと  
ころである。

片蓋川を渡つた旧

道は、国道右側(東)の林の中を通つていて。一三〇〇メートル程進むと、左側に分去茶屋というわらぶき屋根のそば屋がある。旧道は、ここに出て行く。昔ここにも茶屋があり、鎌原通りと分岐していた。

ここより旧道は、国道左側の未舗装道となる。ほぼ直線的な道で、別荘地内を通り約三キロ進む。そこで、鎌原と北軽井沢間を結ぶ道を横断し、さらには進して五〇〇メートル、左に畠が広がる。ここで道筋はなくなつて、が、地蔵川右岸を通り、その先の小道に出ている。

小道をしばらく進むと地蔵川を渡り、まもなく広大な牧草地がある。旧道は、この牧草地内を八〇〇メートル程通り、国道に出る。

ここより旧道は、しばらく国道となる。長野原町立西中学校手前のカーブは、現在よりきついカーブであつたらしい。

田口で国道はバイパス道となるが、旧道は、応桑新田（昔の狩宿）に入れる右の道となる。狩宿宿の入口と出口の部分の旧道は、カギ型に曲がつている。ここは、東西に走る信州街道と合流している。

狩宿から旧道は、また北進し、四〇〇メートル程進んだ所、滝原口で川原湯温泉に向かう旧道と分岐している。この先で国道と合流し、一大〇〇メートル程先の堂光原手前のカーブで旧道は、直進する小道となる。この道は山

## II 道の確定



羽根尾駅前の狩宿通り



羽根尾発電所付近の狩宿通り



三原岩井堂より望む正面の崖 (バイパス橋上)

盤坂 (鎌原通り赤羽根道)

道で、古森の西側を通り下り坂の道である。

旧道が、ふたたび国道に出るのは、古森の先で国道がヘアピンカーブをする所である。

国道に出た旧道は、吾妻川を渡り羽根尾駅前で沼田—真田道と合流する。

現在の交差点東側の小道が、旧道である。

ここより、沼田—真田道と同じ道筋で、羽根尾諏訪神社前に向かう。

神社前より旧道は、北進し、国道が急カーブする所より山側へ上る道となる。ここは今でも道筋がきれいに残されている。その後、旧道は、東京電力

羽根尾発電所貯水池わきを通り、源沢川の右岸を進み、しばらくして川を渡り、二軒屋入口で須賀尾越え道と合流し草津に向かう。この二軒屋の合流点は不明確である。

### ○ 鎌原通り

長野原町応桑、長野県境より国道一四六号を二・三キロ程進んだ分去茶屋というそば屋付近が、狩宿通りと鎌原通りとの分岐点である。

ここは、現在、広い交差点で、このほか中央より分岐していたようである。

しかし、旧道は、こより約八〇〇メートルの間、別荘地内を通るため道筋を確定することはできない。分去茶屋より北北西、町宮浅間園へ向かう道が

地蔵川の空堀を渡る地点がある。こより旧道の道筋をたどることができる。

この道は、交差点に鎌原觀音堂八キロと示されている道である。この付近は、玉領地と呼ばれ、最近の観光開発で別荘地分譲が行われ、旧道も、幅員八メートル程の舗装道となっている。

二・五キロ程進むと、赤川と呼ぶ地域である。旧道は、T字路を左折する。右折すれば桜岩地蔵堂である。

旧道は、この舗装された村道を立野・鎌原へと向かう。四キロ程先で、サoland別荘地・向原へ向かう道と分岐し、左の坂道を下る。小熊沢を渡りしばらく進むと鎌原古屋敷である。古屋敷を五〇〇メートル程進むと、信州街道と合流し宿内に入る。

鎌原宿は、南北に通る鎌原通りと信州街道との合流点であった。現在の道は、宿の北はずれで左折するが、旧道は、そのまま直進し水田地帯を通過。二〇〇メートル程先で、道はY字路となり、旧道はそれを左に行く。右は芦生田道である。さらにそこより二・三〇〇メートル程先で旧道は二筋に分か

れ三原へ向かう。直進する道が、赤羽根道、左折する道が中居道である。

赤羽根道は、一キロ程先から蟹坂と呼ぶ急坂を下り、吾妻川を渡る。この付近は、最近バイパスができ道筋はまつたくない。対岸の村立東中学校付近より国道一四四号を横断し、その上の県道（沼田—真田道）に出る。この合流点には、石仏がある。

一方、中居道は、あぜ道を七〇〇メートル程進み、廻道となつた急坂（道筋はまつり残つてゐる）を下つて、浅間有料道路の通称鎌原坂途中の西武バス駐車場付近に出る。その後、鎌原坂を下つて、国道との交差点付近で吾妻川を渡る。対岸からは、三原集落内の細い道で、天神沢右岸を上り、沼田—真田道と合流する。

赤羽根道・中居道は、三原で沼田—真田道と合流した後は、三原湯窪まで、沼田—真田道と同じ道筋となる。

湯窪の畠の中で分岐した旧道は、沢伝いに上り、広い尾根に出た後、滝沢

川を渡り、石津南方の畠へ出る。この間、道は廻道である。

草軽電鉄軌道跡に作られた県道を旧道は横断し、石津に入る小道を下る。集落内で右折し、今井川を渡る。

その後、坂を上つて仙入りの広大な畠地帯に出るが、ここより、赤川を渡り、草津町二軒屋までの道筋は確定することができなかつた。

二軒屋から旧道は、県道となり、中村・谷所へ向かう。県道は、谷所で草津有料道路に合流するが、旧道はその手前より県道からはそれ有料道路を横断する。

それ以後の旧道は、草軽電鉄軌道跡にはば沿つてゐる。一六〇〇メートル程先で須賀尾越え道と合流し、草津へ向かう。

## ○ 大笠通り

国道一四六号を長野県境より約一キロ。片蓋川の空堀手前地点が、狩宿通

りと大笠通りの分岐点である。

旧道は、分岐点より北西に進路を取り、空堀を渡る。ここにはまつたく道筋はないが、しばらく進み、別荘地のフェンス沿いにはまつり残つてゐる。

しかし、この旧道の通る広大な六里ヶ原は、浅間焼けで荒れた土地であり、さらに風雪で何度も道が消された所である。現在では、その上に別荘地開発が進行し、その後、三一四キロの道筋をたどることは困難である。この間を推測すれば、北西に直線的に通つていたと考えられ、浅間有料道路を横断するのは、日本興業別荘管理所南方二一三〇〇メートルのところと思われる。

これより先の道筋は、県道大笠・応桑線となる。この道も最近、幅員を広げて改修したため道筋が多少違うようだが、その違いを確認することは難しい。

途中、高羽根沢・大堀沢などの沢を渡るが旧道は、大笠宿までほとんど下



六里ヶ原の大笠通り



大笠 沼田～真田道と大笠通りの合流点

## II 道の確定



下沢渡（菅田）の旧道（沢渡温泉方向より望む）



沢渡温泉街



草津道（細尾より幕坂へ）

### (2) 沢渡温泉から生須集落へ

晩約橋を渡つて商店の東脇を下沢渡の堤まで行き、川に沿つて南側を中之

条・草津線に合流する  
まで進む。商店の脇は  
道が残つているが堤下  
はない。県道に合流し  
てから、そのまま進む

が、川に沿つて進んで  
いる。有笠山が正面に  
見えてきた所で右に入  
つて行く細い道がある。

り坂であり、分去茶屋と大曾宿との標高差は、約三八〇メートルである。

大曾通りが、沼田—真田道（信州街道）と合流するのは、大曾宿の中央で、右に道標が残されている。

### (1) 幕坂峠越から沢渡温泉へ

伊勢宮のある西中之条から約八〇〇メートル位行くと国道三五三号線と合流する。下折田まで国道を進むが、下折田の入口から旧道は左に入つて高札坂といわれるゆるい坂を上り下りし、四万川の段丘崖の縁に沿つて上折田まで行く。上折田で国道に合流したあと、一・五キロメートル位進むと四万温泉との分岐点に出る。右へ行けば四万温泉に達するが、沢渡への道は左へ行く。左に折れて渡戸橋を渡り、高渡橋の所から旧道は現在の道より左の方、道と合流し、湯原の集落を通つて沢渡温泉に達する。

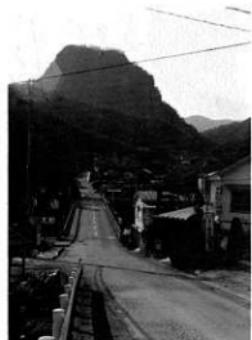
一方、原町から沢渡温泉への道は四万川の右岸を通つてゐるが、中之条から原町に至る旧道は中之条町から来た道が西中之条の伊勢宮のわきを通つて国道一四五号線にぶつかる所から国道をはずれ、右手に大きく湾曲してそして須郷沢の坂へとさしかかっていた。しかし、現在はその道形は残っていない。須郷沢から原町の大ヶヤキに達し、原町へと入つていた。

原町から沢渡温泉への旧道は、大宮神社のわきを通つて、稻荷大明神宮の下を通り、現在の道路に沿つて下山田に至る。下山田から右に折れると四万川を渡つて中折田に通じ、中之条へ沢渡の道と連結する。

下山田から更に清水の弁天様の前を通り、高沼の集落に至る。高沼の先へ行くと高渡橋があり、橋を渡るとやはり中之条へ沢渡の道と連結する。右岸の旧道は高渡橋を渡らずにおよそ一・五キロメートル位進むと寺社原の集落に達する。寺社原から先は、山が両側に押し迫つた深い谷あいを上沢渡川に沿つて通つており、往時の道の雰囲気が感じられる。前尻の集落を過ぎて沢渡温泉街に達するが、左へ折れていくと幕坂峠への道である。



大岩から龍（細尾）方面への旧道



沢渡温泉から笠山方面を望む

○メートル位前で上側に移る。往時、数戸の集落があつたと思われるが、今は羽衣橋を左に見ながら県道の北側の上を通って、唐松橋の手前に出て県道と合流する。唐松橋を渡つてすぐ県道と分かれ、左（南）側に入り上沢渡川との間を行き、牧場沢を渡つて老人福祉センターー憩いの家の前で県道と合流する。県道沿いに四ツ目橋を過ぎる所まで行き、通称「いわばな」の前で県道より分かれて南下して川沿いに大岩までつと進む。旧道の道形は所々残っているが台風等のため被害をうけいる箇所もある。五輪沢を過ぎると民家も散在し道の手入れもよくなつてくる。大岩の近くでは旧状はよく残り、不動沢を渡つて、右に大きく曲つて県道に出、不動橋に至る。不動橋を渡つてすぐ酒屋の西を左折して民家の中に入つて行く。ここも旧状をどめている。民家を離れて二〇〇メートル位行くと、上沢渡川を南に渡つて山中にわけ入り、松谷の大平へ道が通じている。草津

これが旧道で、農道として使われているようだ、川に沿つて進んでいる。羽衣橋の二〇メートル位前で上沢渡川を渡つて川の北側に移る。白石沢の白石沢の集落があつたと思われるが、今は羽衣橋を左に見ながら県道の北側の上を通って、唐松橋の手前に出て県道と合流する。唐松橋を渡つてすぐ県道と分かれ、左（南）側に入り上沢

渡川との間を行き、牧場沢を渡つて老人福祉センターー憩いの家の前で県道より分かれて南下して川沿いに大岩までつと進む。旧道の道形は所々残っているが台風等のため被害をうけいる箇所もある。五輪沢を過ぎると民家も散在し道の手入れもよくなつてくる。大岩の近くでは旧状はよく残り、不動沢を渡つて、右に大きく曲つて県道に出、不動橋に至る。不動橋を渡つてすぐ酒屋の西を左折して民家の中に入つて行く。ここも旧状をどめている。民家を離れて二〇〇メートル位行くと、上沢渡川を南に渡つて山中にわけ入り、松谷の大平へ道が通じている。草津

道は川を渡らず、川の北岸を行くが、台風で路肩が崩れ、全く道がなくなつている箇所がある。道はその後民家の前を通り工事中の橋の手前を迂回して進む。県道は大分高い所を走つて右上に見えている。三軒の家の前を通過後、まばらな杉の木の前を通つて県道に上つてくる。県道からは龍の食堂の前を通つて、現在の龍橋の七〇メートル位上流を渡つて林道を西進すること三〇メートル。ここに明治の旧道が左折してあり、道するべがある。江戸道はこれより一〇〇メートル位行つた所を左折して山の中に入つて行く。藪がひどく旧状は判別しにくいが、やがて道形は残り、小一時間程度細尾集落から取りつけ道に到達できる。ここからは勾配は一層強くなり、有立山・大岩がふりかえるたびに眼下に広がり、右に左に曲がりながら一間の旧道は続く。県道が時折、左下に小さく細く見え隠れして、旧道の高さが想像できる。細尾の裏から四十分位行くと岩の上に一基の馬頭観音があり、草津道を認めている。この辺りの道は伐り出した雑木の枝が道に投げこまれ、ほとんど歩行できない。やがて熊笹が生い繁る中を進むこと一時間、突然前方に牧場のよう立木のない見晴しのよい山が見えてくる。ここで右カーブして崖ぞい、そして杉の三〇年生の植林を左谷に見ながら進むと平坦部に出る。幕坂の茶屋跡である。江戸時代、道行く旅人に酒食と休息のやすらぎを与えた所である。細尾と生須からそれぞれあがつて、二軒の茶屋が営まれていた。今は熊笹が一面に生い繁る笹原で昔を偲べない。茶屋跡からは沼沢に西進して県道、草津・中之条線の六合村側、現在の幕坂跡から最初の大きなカーブの所に出てくる。合流点まで道形はほとんどわからない。すぐ近くの林道は新しいもので間違やすい。

細尾からここまで間は道は荒れていたり、人の通つた形跡のない箇所、藪・風倒木、伐り出し後の小枝の山などであるが、道形は茶屋跡までは完全に残り、茶屋から先の県道合流までが定かでない。

## II 道の確定



小雨から草津へ



小雨から草津への途中（林道が見え隠れする）



日光寺前の渋峠越え道



箱島西部の旧道（西より東方を望む）

数百メートルで「世立・花敷」への分歧点へ着く。そのまま直進するのが草津道で、駒ヶ沢川の北側（右岸）に沿つていく。やがて左手下方に堰堤が見え県道が右に大きく曲がり駒ヶ沢と離れていく所で、旧道はガードレールを越えて左手に入つて行く。ここも旧状がよく残り二十分程の下り坂を生須におりていく。県道と合流する地点に牧水詩碑があり、生須の大庚申塔がすぐそばに見えている。生須の集落にはほんの二〇〇メートル位。

### (3) 生須集落から草津温泉へ

生須の山市屋の前で県道と分かれ、旧道は左折し民家の間をカーブしながら入っていく。往時のおもかげをよく残す道を今度はゆっくり右カーブして、新吾嬬大橋の東の所から南下して旧吾嬬橋への道に合流し、そのまま下り、旧吾嬬橋へ行かずガタガタ道を河床に降りてくると小雨橋である。当時の架橋跡が川中の大岩として残っている。橋を渡つて、きつい勾配を登る道形はないが、それでも旧吾嬬橋を渡つてきた県道に出て小雨の六合村役場の裏（北）までは旧道とおぼしきものが残つてゐる。役場裏の大きな馬頭観音通り、舗装の細い路地を真っすぐ行くと国道二九二号線に出る。民宿大黒屋の倉の所まであがつてから、右折し県道の壁上を五〇メートル位いき、左折するといよいよ大坂への道。道祖神の道するべがある。ここから一〇〇メートル位コンクリート舗装の道が続くが、登つて最初のカーブの所に石仏群がある。稻荷・馬頭観音・道祖神等が人馬の往来安全を祈願していたのだろうか。これから一〇〇メートル位の所に進しるべがある。この辺からは生須の集落が一望の下。坂は段々きつく右に左にうねりながら、しかし旧状をよくとどめて上つてゐる。途中、苔むした石仏が岩に一基。さらに上りつめいくと、徐々にゆるやかになり、熊笹が多くなつてくる。上りはじめて四五十分。左側の谷が杉林となり、右側は緩い山となる。途中、山道と合流していくと送電線が頭上に表わされてくる。やがて林道・草津・小雨線の所に出て

くる。この地点は林道がズウズウ沢（ウルシ沢川）川に沿つて大きくカーブする三つ目のカーブを過ぎた所で、丁度六合村、草津町の町村界をなす所である。これから一五〇メートル位林道の端を通つてから右折し、又、

旧道に入つていく。やや林道に沿つて緩やかな勾配を踏みしめるところがある。一里地蔵と呼ばれている地蔵尊である。林道がすぐ左方に見え、この後は林道に接近したり離れたり、時に迂回する林道を縦断、横断、林道上を通つたりしながらぼ直線状の旧道草津道は続く。畑が広く展開し何軒か民家が見えはじめると、草津の南郊外。やがて新興住宅街の所を右折していくと舗装道路となつて分岐をそのままいくと十字路、それを直進すると運動茶屋である。

#### 4 渋峠越え道

北信濃地方より草津への道として、湯田中を通り、渋峠を越えてくる道もあつた。（渋峠より北方、草津峰（沓野峰）を越える道もあり）

志賀・草津有料道路の渋峠ヒュッテより山道を芳ヶ平に向かう道がそれである。

広い尾根道を下り、芳ヶ平を出て、ヒュッテより大沢川を渡り、右岸を下る。

尾根を通り、谷沢原を出て、その後、谷沢川を渡り、南下して日光寺前に至る道である。渋峠より温泉街まで、その標高差は一〇〇〇メートル以上もあり、たいへん険しい道である。

### (三) 三国裏街道

#### 1 杖ヶ橋の関から箱島集落へ

杖ヶ橋の関所跡の南の段丘崖を、今に残る旧道を上り、現在の日影道（県道渋川・原町線のこと、以下日影道と記す）に出る手前で西側の登沢川を越える。沢を越える部分は旧道は消えている。日影道に出た旧道は、日影道を中心にして左右二手に分かれる。

まず、右手方向へ斜めに入り、金島駅方面へ下る道であるが、これは天明の浅間押し以前の道で、おおむね吾妻川右岸段丘の低みを通つていた。国鉄金島駅構内で吾妻線を北側へこえた旧道は、吾妻線の北側を進み、更に吾妻線にからむよう西へとのび、大輪沢川の鉄橋の辺吾妻線の南側へ出る。更に国鉄祖母島駅前まで至る。

一方左手方向へ斜めに入り山腹を通る道がある。これは天明の浅間押し以後の道であろうか。上越新幹線の下を抜け、甲波宿弥神社の石段下を通り、伊香保川島線を越える。ここから約三〇〇メートル程度は消えている。日影道が大輪沢川を渡る境橋の東側から、日影道を北側へ越え、上川島の集落の北側をかすめて西へ進む。ここから北側の崖下へ下り国鉄祖母島駅の東部四〇〇メートル程のところで、前述の旧道と合流して祖母島駅前に至る。

さて「うばしま」駅前から道は消えているが、吾妻線にはまだつづつ四五〇メートル進み、吾妻川の崖際を西へ進み沼尾川を渡りようやく吾妻郡に入る道は更に林の中を西へ進み沼尾川の左岸の崖下に至つて再び出現する。旧道を残す道をたどつて崖を斜めに上り約五〇〇メートル程南へ進むと日影道に出る。ここは柏原の東部であり、南方より伊香保・柏原線が下ってきて日影道と合流するところである。旧道は日影道と伊香保・柏原線を横切り柏原の集落を西へ通り抜け、再び日影道を横切つて八幡社の前を通り、金沢川



奥田の旧道

奥田宿は坂の多い宿である。約五〇〇メートルの家並みを抜け山道を下ると新巻である。

南北にのびる新巻の集落を横切る。

の沢を越えると再び日影道へ出る。箱島である。  
箱島の家並みを両側に見ながら日影道を約四〇〇メートル程進み、箱島郵便局のところを右に旧道を道なりに進む。甲波宿神社を右に見ながら更に西へ、坂を下ると東電箱島発電所下に出る。旧道は田んぼの中を西へとのびていき、箱島から小野上へと通ずる道の途中へ出る。旧道はここで消えてしまい、ここより西は吾妻川が山際までせまり、相当な急崖をなしてゐる。通称なべっこわしと呼ばれる難所である。吾妻川の洪水の度に道は欠け落ち、幾度となく道はつけ替えられたという。なべっこわしを抜けると間もなく日影道を斜めに横切り五町田へと入つて行く。

## 2 箱島集落から五町田・奥田・新巻集落へ



(北より南方を望む)

新巻を横切った旧道は、字御園の南部で奥沢川へ下り、奥沢川左岸の急崖を上る。この辺は約五〇〇メートルの間、旧道は消えている。字白之出の東部で、南方の大字泉沢から下ってきた道と合流した旧道は間もなく日影道に出る。日影道上を約一キロメートル程西進すると字新興である。ここで道は二三手に分かれる。

まず、右手の道をたどろう。新興から西沢川を渡る小泉橋の北東を通ります、太田幼稚園・太田小学校の北側を通り、字中原から北へ、植栗城跡を通り、字殿前、字北組の辺りを環状に通り、植栗・中之森線の田長觀音の東側へ出て来る。これを北へ向えれば竜ヶ島橋から伊勢町へ通じている。田長觀音の北のところから小道を西へ進み、吾妻川の崖際を通りて田中集落の南部から南下すれば背高地蔵の辻に至る。辻を南へ五〇〇メートル程進むと字山根に至る。

一方、新興より左手へ出る山際の道は、西沢川・大泉寺川の二つの沢を渡つて山の裾部に続いている。ところどころ旧道は消えてしまうが、字山根の東部からは、はつきり旧状をとどめている。山根の集落の西はずれで、北から來きた前述の旧道と合流する。

## 3 新巻集落から植栗・岩井集落へ

伊香保よりの道と合流する。この伊香保よりの道を北へ進めば五町田の渡船場である。旧道の北側のみ家並を有する五町田宿を抜けて奥田川の手前に至る。右手に五町田の村社三島鳥神社を見て、奥田橋の上流、四〇五メートル程のところで奥田川を渡り、奥田小学校の南側の畑中を西へ抜け、舗装された旧道の坂を上りあげると奥田である。

#### 4 岩井集落から金井・川戸・長須橋へ

二本の旧道が合流して寺沢川を渡ると金井である。金井の一宮神社の森を右に見て旧道は西へと続く。東横方面より来た道と合流した道は、きれいに舗装された道を約一キロメートル程で下郷に至る。左手に富士浅間神社を見ながら道はゆるく北へカーブする。間もなく田辺橋への辻へさしかかる。旧道はまっすぐ西へ進み、大戸方面よりきた広い道（高崎様名中之条線）を横切り内出の集落に入る。内出城跡の外堀を通り、内出を抜けた旧道は、高崎・様名・中之条線へ出る。右手に川戸神社を見ながら舗装道路を約一キロメートル進むと字田中である。すつかり改修された道を右折し、岩櫃の岩峰を正面に見ながら吾妻川を渡る。この橋が長須橋である。旧長須橋は現在の橋の東わきを北へ下る細道の先に架せられていた。

橋の東わきを渡れば郷原である。



長須橋（万年橋）旧道は現在の橋の右脇



中之条町合同庁舎前（三国裏街道入口）

#### 5 中之条町から蟻川・須川宿へ

中之条町合同庁舎前の道、五本辻と云うか、六本の辻を北の方向に進み、すぐ東に向かう。

道幅一メートル足らずの歩行者のみの道らしくないこの道が、かつての旅人の行きかつた「三国裏街道」または大道幹越道、あるいは越後道である。トントントントと坂を下つて胡桃沢川を渡ると、大変大きなお寺の前に出る、林昌寺である。道は幾分広くなり、門前を東に進む、そしてつき当たりを直角に左に曲つて北の方向に進む。

この道は伊勢町のバイパス交差点よりの道で、旧道は四メートル位の舗装された車の行きかう急坂をのぼる。赤松の庭木や白壁の土蔵、見上げる寺の正面に県立中之条高等学校などが並び、高校の右手を進むと道は細くなり、



中央を上ると高津に入る



蟻川（旧道は手前の橋を渡り直進）

のぼりの山道にさしかかる。林昌寺から一キロメートルの所が峠であり、右方には町の総合運動場がある。

直進し坂を下る。赤坂行きのバスが運行されている長久保をすぎ、桃瀬川を渡つた所でバスの通りとは分れて左に向かう。

蛇行して急坂をのぼると高津に入る。びっくりする程の急傾斜の道である村である。

右に公民館と子供の広場があり、さらに進むと道が二手に分かれ。その手前に道祖神が見える。旧道は左手の方から、現在の道をなめに横切り、道祖神の前を右に進んだのである。左手の道も古い頃から利用されており親都神社の方に続いている。

右に向かった旧道は道はせまく、車のすれ違いがやつとの、ややのぼりの道である。

上りつめるとき度は下りになる。まわりの山々が、一目で見渡せる開けた畑の中を北に向かうと蟻川に入る。

蟻川の村は蟻川という川（谷）をはさん南北に、またその北を流れる赤坂川の急傾斜の高台に農家が点在している。道も急な上り下りであり、住民は昔から骨の折れる生活を強いられた事と思う。

眼下に川の見える所で道が二手に分かれる。左手に行く道も、古い頃から良く利用されたと見え端石造物が沢山見られ、そのまま進むと新田を通り、お茶講で有名な白久保の方に行ける。旧道は坂を下り蟻川にかかる橋を渡る。橋を渡つた所で右に行く広い道がある。大塚を経て沼田方面に向かう道であり、中之条、沼田を結ぶ、国道一四五号線に出られる。

旧道は橋を渡つて、正面やや左の高台に能野神社、右下に吾妻三十一番札所洗板觀音堂を見て直進する。

依然せまい急坂をのぼり、おくまん様の裏を通り進む。しばらく行くと、

当時、吾妻、利根において大きな勢力をもつた、刀工、蟻川波右衛門の屋敷跡を右に見て、今度はこれまた今迄に見た事もない急坂を、ころげ落ちるよう下る。蛇行をくり返して進むと未完成の大きな道と一緒になり左に向かう。

この道は大変広く、こんな山の中ではちぐはぐに感じられる程である。吾妻は、川が多く無数に小さな沢が流れ谷が深い。したがつて急峻な地形のため、道路を広くとする事が出来ず、他所よりも道路の状態は悪い。しかし各所で道路工事が行なわれおり広くて良い道路が出来つつある。

広い道路を下つて行くと三本辻の所に出る。新しい道と古い道、新しい橋と古い橋、ここには幾本もの道と二つの橋がかかっている。

川は赤坂川であり、対岸は赤坂の村である。辻には年代の新しい道標がある。ここに来るとなんどなく、川を渡りたい感じがするが、右に折れずに、そのまま赤坂川の西沿いに北上する。

道は急にせまくなる。この道は、静寂な昔にもどったような感じのところである。古い農家や赤色のええた老松が目を楽しませる。左の高台に小さな神社が祀られている。さらに直進する。正面に大きな赤松と農家が見えていた所から、堂本塙橋を渡り左に折れ、赤坂川を上流に向かうと行沢である。人家はまばらであり、ここからは山道にさしかかり心細い。旧道は民家と道祖神の間の山道に入り、長坂と言う所で、車の通れる道を横断し、すぐまた山道を上つて行くまったくの人馬のみ、そして福荷穴<sup>ふくわらあな</sup>と言う所で、この車の通れる道と一緒になる。

車の道はややせまいが、行沢から長坂、橋塙を通つて上つて行く。

福荷穴で、旧道と車の道は一緒になり、北に向う。しばらく北上をつづけ、上り下りを繰り返し途中から、旧道は尾根づたいで山に入り登りつめると、大道<sup>おほぢ</sup>、吾妻と利根の郡境の県道に出る。

一方車での道は、道なりに途中から北に向かい蛇行して県道に出て右に進

み大道跡に向かう。

旧道は、郡境の所で県道を横断して真すぐに入須川に下る。車道の方は岬から蛇行して入須川に向かう。入須川の辻で一緒になり、だんだん坂を県道に沿って進む。相当長く車道を進むと、正面に石切山が見えてくる。ここから旧道は右に入り、人馬のみの道を、川沿いに下る。塩原と言う所である。

細い道の左に双体道祖神と文字の美しい庚申塔があり、左に曲り込んで行くと道標がある。是より右沼田、左越後道と書かれている。ここから左に急坂を上り、「たん県道を横断し、山に入り、峠を越え、青木バス停の所で、再び県道を横切る。入る道は広いがこの道は右からはずれて旧道はそのまま直進する。小さな橋を渡ると三本辻に出る。お庚申様と道標があり、右ぬまた左ゑらじ道と書かれている。ここを左に向かうとすぐ県道に出る。県道を右に進むと学校が見えて来る、そして、つき当りを左に廻り込むと当時の三国本街道の須川宿である。

## 6 中之条町から岩本・大道跡へ

中之条町からの三国裏街道は、林昌寺の前を通り蟻川をへて大道跡への

道が利用された。

この蟻川を通る道の他にも、当然道はあったと思われるが、岩本を通る道も利用された。

この道は、中之条町の吾妻觀光タクシー案内所とたばこ屋の間に入る道で、舗装されてはいるがせまい道である。

左に大国魂神社、右に廣盛酒造の大きな建物の前の道を北に向かう。アサヒ座横町と言わされた通りぬけると、年代の新しい道標が四つ辻に建てられている。



岩本 県道から左、山道へ

る少し先で、再び県道を越えて山に入り北に向かう。  
この道を入らないで県道沿いに親都神社をまわって白久保へ行く道もあるであろう。

山道に入った旧道は、やや真っすぐに進み、元禄九（一六九六）年の道祖神の建つ田んぼのあぜ道を通つて、お茶講で有名な白久保の天満宮の手前に出る。「ここで、県道を横断しそのまま、まつすぐに山を廻り、ゴルフ場の中を通り、しばらく先の切通しの所から県道に出る。ほとんど道形はない。

県道に出た旧道は、そのまま岩本まで、県道に沿つて進む。岩本には、青竜寺という寺や、バス停もありちょっと道の広くなつた所で、旧道は県道と分かれて左に入る。

せまい急な上り坂を進む。そのまま行くとお不動様に行きつくが、その手前から右に入る。もちろん徒步のみの通行となる。ここから相当長い山道を進み、やがて「石にまもなく」と云う所で県道に出る。そして県道を横断し再

江戸時代は前述の蟻川の道が主要

道であったが、現在はこの道を上りつめて岩本を通り大道跡に向かう道に変わってしまった。多少遠くとも、曲りが少なく上り下りのゆるやかな道の方が、車での走行に適しているためである。

旧道は県道沿いに進み、胡桃沢川を渡り山道にかかると道はせまくなる。左側に石灯籠のある所あたりから、右の畑に入り、すぐまた、県道を横切り左の山に入る。道形はない、そして、県道が大きく曲り込んでい



胡桃沢川吉池橋を渡り左へ



柴本の道から左折し広い道を横断し、成田に向う

び山道に入り坂を下る。すると神社の所に出て、右に進み轟石の所へ上つて行く。轟石の所で県道を横断して轟石の所を通り、その先で県道に入る。轟石から、大道幹迄は、ほぼ県道に沿つて旧道はつづいている。大道幹から須川宿迄は前文を参照のこと。

#### 四四万道

##### 1 中之条町から四方温泉へ

四方への道と云えども、主に温泉への道という事になろう。四方温泉の歴史は古く、坂上田村麻呂、碓冰貞光、塙谷日向守定光等、湯の発見に関する伝説があり、ひろく古い時代から知られていた。また、四方川の上流、木之根宿を越えて、越後に近いため、越とを結ぶ重要な交易路でもあり、昔から重視されて来た。

中之条町からの四方への道も、当然何本もあつたであろう。そこで一番利かれたと思われる道からたどってみる事にする。  
中之条町の、吾妻観光タクシー案内所とたばこ座の間を入り、左に大国魂神社、右に廣盛酒造の大きな建物の前を北に向かう。  
たまたま、この道は三国裏街道（前述）と同じ道筋に当るので、途中まで省略して道をいそぐ。

北に進み、つき当たりを右に、信号機の所を左に曲つて県道を進む。まもなく胡桃沢川に至る。

ここから三国裏街道はさらに直進して大道幹で、蟻川から胡桃沢川の道と一緒に、須川宿へ行く。

四方への道は、胡桃沢川に架かる吉池橋を渡り、わたり切った所を左に向かう。

道は大変にせまく、車の走行は無理と思える程である。もつとも広く新しい道がこの古い道と並行して、川に沿つて作られている。

ここは柴本である。一応道路は舗装されてはいるが道は悪い。入つてすぐ、二又に道がわかれれる。右に坂を上り、すぐ家の間を左に向かって、またもとの道と一緒に、しばらく道なりに進む。現在この道も利用が多い、それはせまいながらもこの道に沿つて家が並んでいるためである。やがて大久保に至る。

まもなく正面の高台に、大変感じの良い大きな家、白壁の土蔵、はなれ、物置などが並んだ家が見えてくる。ここで道は四つ辻になつており左の川の方に向かう。

まっすぐに行きたいと思う道を左にとり、胡桃沢川を渡り、さらに広い道を横断して、急な曲りくねった細い道を上る。左手に牧場があり、牛が沢山遊んでいた。日影である。やつとの思いで坂を上ると、ややこしい四つ角に出る。

この四つ角を右に曲ると、今迄のせまい道から、びっくりする様な広い道

となる。成田である。四万への旧道はこの広い道のすぐ右を通り、糸原につづいている。車は通れない。なるい坂を上りつめると、今の広い道に出でなお真っすぐに進む。糸原は、土地は広く平て見晴しも良い所である。ほほ中央に民家が数軒あり、ここで、直角に右に曲る。広い道から、今度は砂利道のせまい道に入る。急坂を下り、再び胡桃沢川を渡ると右から親都神社から来る道(後述)と一緒になり、左に進むと、また広い道に出る。五領である。今度は右に向かう、広い道であるが急坂が続く。ややしばらく進むと左に入る道がある。ちょうど大きく右まわりをするカーブの外側である。しかし、広い道から急に細い道の入口は見つけるに困難である。もつとも工事中なので完成すれば案内板がつけられる事であろう。今も小さな板に、四万10kmと書かれている。

せまい砂利道の、まれに見る下りの急坂を進む。車の運転がキケンに感じられるほどである。かなり山を下ったと思われる頃、賀湯平<sup>かゆひら</sup>に出る。三本辻を右に向かう。道はせまいが平原な舗装道路である。途中道の抵幅工事をしていた。ここは寺社平<sup>じしゃへい</sup>であり、左手に觀音堂が見える。

左にゆるくまわり込み、そのまま右に向かって一気に坂を下る。そのまま進むと橋を渡つて国道三五三に向かう。四万への旧道は橋を渡らずに橋のたもと桺の木の間から川の上流に向かったものと言う。現在はほとんど道形も残っていない。そのまま川沿いに進み、秋鹿のあたりで道形がはつきりするが、まだ道は消える。そのまま進み、中之条四万保育所の所から道形がはつきりする。そして、渡戸橋の先で現在の国道三五三と一緒にになる。

国道は広く、はげしく車が通り過ぎる。そして右に曲り込むと山口温泉街に入る。ニタ井を通った道もあると思う。

温泉街の道は、他のどの温泉地でも道はせまい。ここは温泉街も他間にもれず、車のすれちがいがむずかしい程で、観光客が多く、気を使う事おびただしい。

さらに進むと月見橋に至る。この橋を渡ると古くからの湯の町四万温泉新湯に行く。

月見橋の手前右に入ると細い道がやや上りでつづく。上り切ると広い道になる。右に稻裏神社を見て進むと、大きく左に廻り込み橋を渡り進むと、日向見薬師堂が正面に見えて来る。そして温泉宿が見える。

そして、このお薬師さんの手前右に細い道があり、この道を辿ると、木ノ根宿をぬけて峠を越え、新潟県の浅貝に至るという。

## 2 親都神社から五領へ

四万への道は、親都神社から五反田を通つて西へ行く道も広く利用された、親都神社の東端に江戸時代の道標がある。右しま、さあたり、左中之条道と

さへこへ西へ向かう。柴田宿の六桺を左に見て進む。右を見ると天をくぐる。神社の所は道が広いがすぐまぐらくなる。車の通行がやつとんどり、林の中を進むと空気はひんやりと

して気持ちが良い。右に石薬師のお堂が見えて来る。さらに進むと、道の抵幅工事をしている。座石<sup>ざせき</sup>の所だ。

さらに進むと、右に明暦三年の庚申塔や、觀音堂が見えて来て三本辻に至る。

右に曲つて進み、沢を渡つた所で塙から分かれ左に入る。入口はわからぬといふ。

左に入った道は人のみ通れる山道で、気持ちが良い。六百メートル余り





糸原から左に向かって殿界戸へ

糸原から右に曲つたが、今度はそのまま百五十メートル程直進して、左に向かう道がある。

糸原邊は、すでに「1、中之条町から、四万温泉へ」で記したので糸原の中程、数軒の農家の所から進める。

先ほどは右に曲つたが、今度はそのまま百五十メートル程直進して、左に向かう道がある。糸原邊は、すでに記したので糸原の中程、数軒の農家の所から進める。

糸原から左に向かって殿界戸へ

四万への道に、中之条町から糸原に出て、糸原から四万川に沿って上流に向かう道がある。

糸原邊は、すでに「1、中之条町から、四万温泉へ」で記したので糸原の中程、数軒の農家の所から進める。

糸原から左に向かって殿界戸へ

もとの道にもどつて辻に出る。十二平である。年代の新しい道標があり、石柱には右面に中之条、正面は岩本、左面に四万と書かれている。その四万の方に進む。

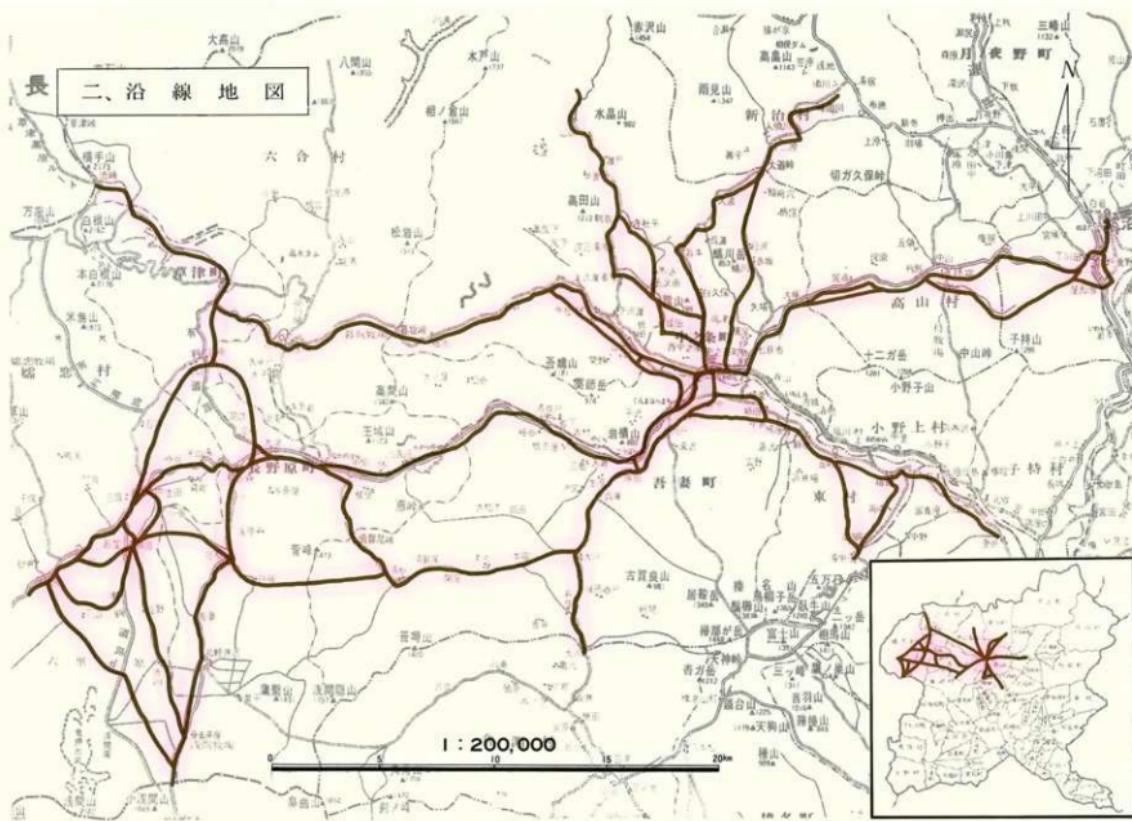
しばらく進むと、かなり広い道につき当たる。五領である。この道は前述した糸原からの道と一緒になる所である。ここから寺社平、四万へと向かう。五領から四万へは、前に記したので以下省略する。

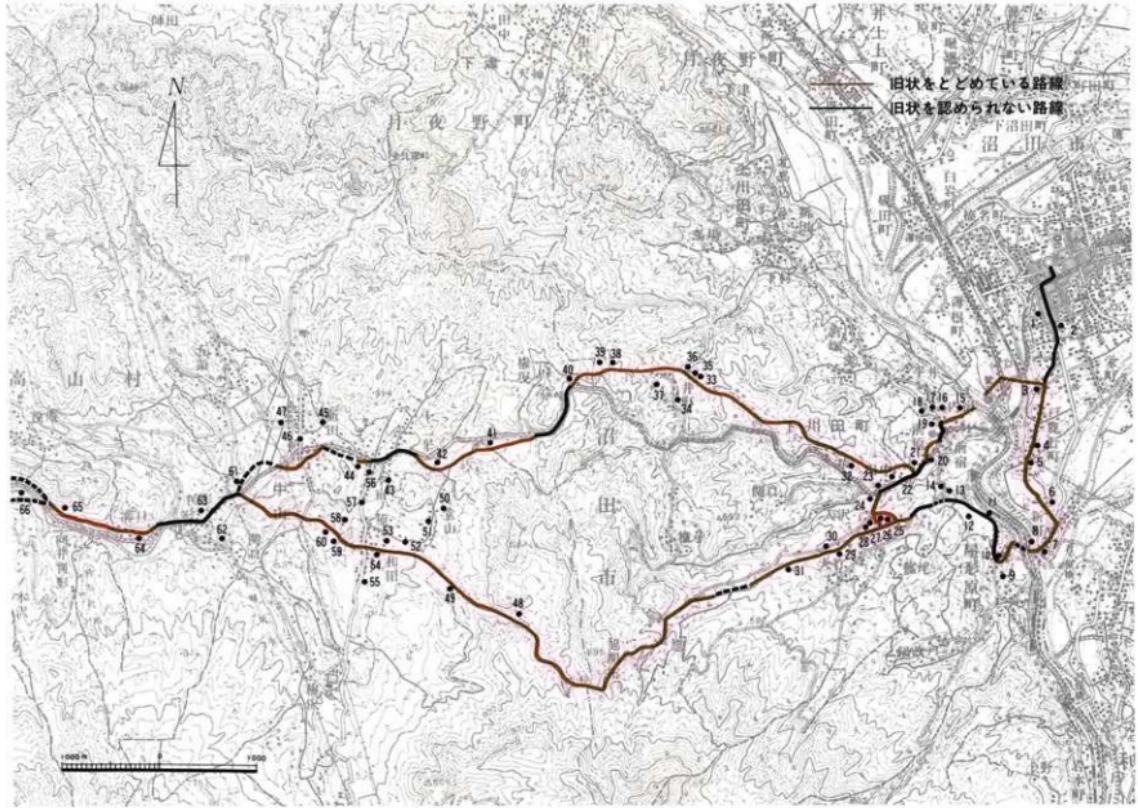
## 3

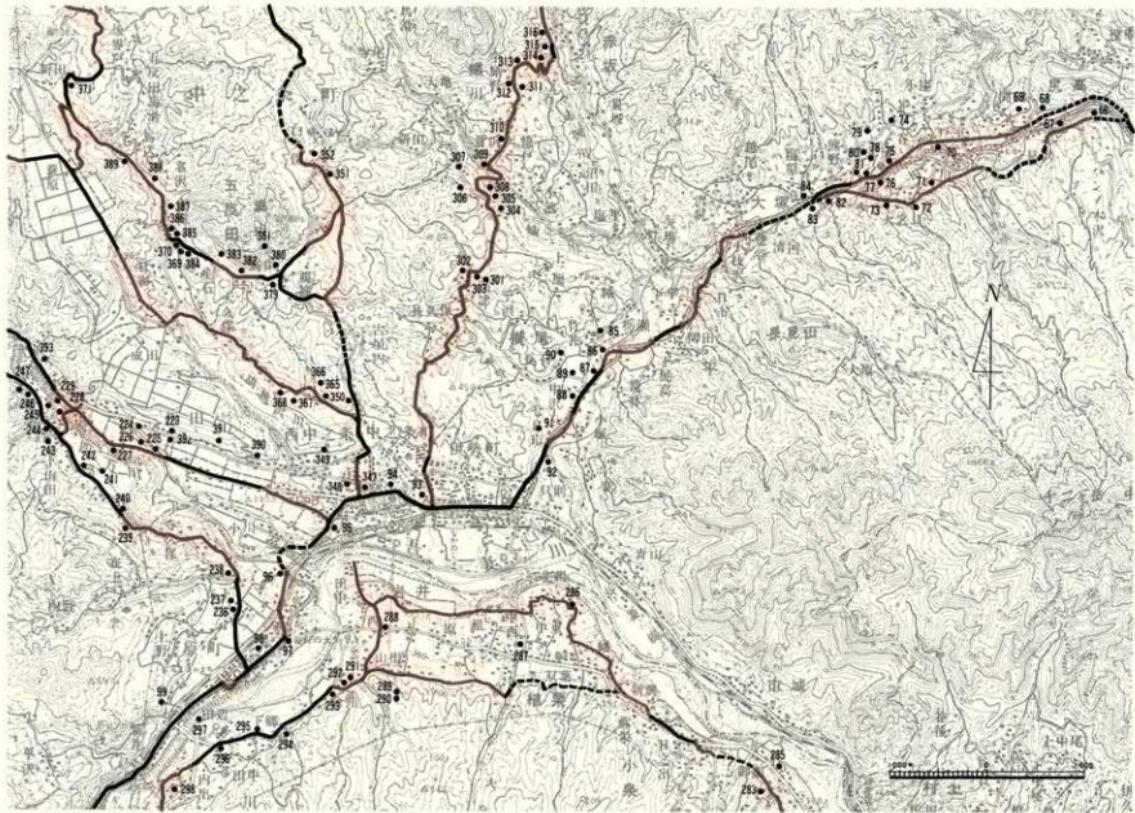
## 糸原から君ノ尾・渡戸へ

駒岩あたりで旧道は、河原の方に下り、しばらくして不動堂の所からまた国道にもどる。右に県指定の駆け穴を見て、一度左の山手に入るが、また国道にもどり進む。国道はややせまいが、四万温泉への観光バスや自家用車、定期バスなどが、ひつきりなしに行きかっている。道は変わる。当時の主要な道と言われた中之条、糸原、貴湯平、寺社平、ニタ井の道はさびれ、この国道の道が四万への重要な道になった。

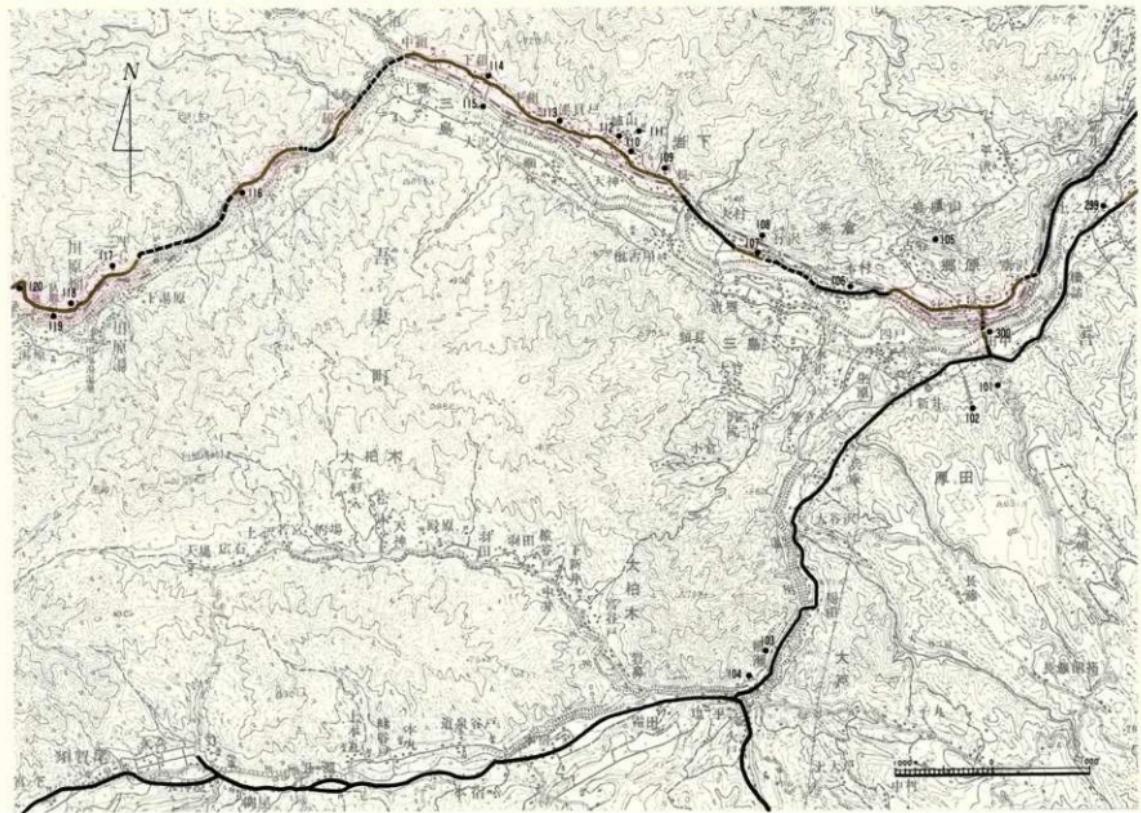
渡戸橋やや先の所から四万温泉街に入る。この先の道はすでに記したので省略する。

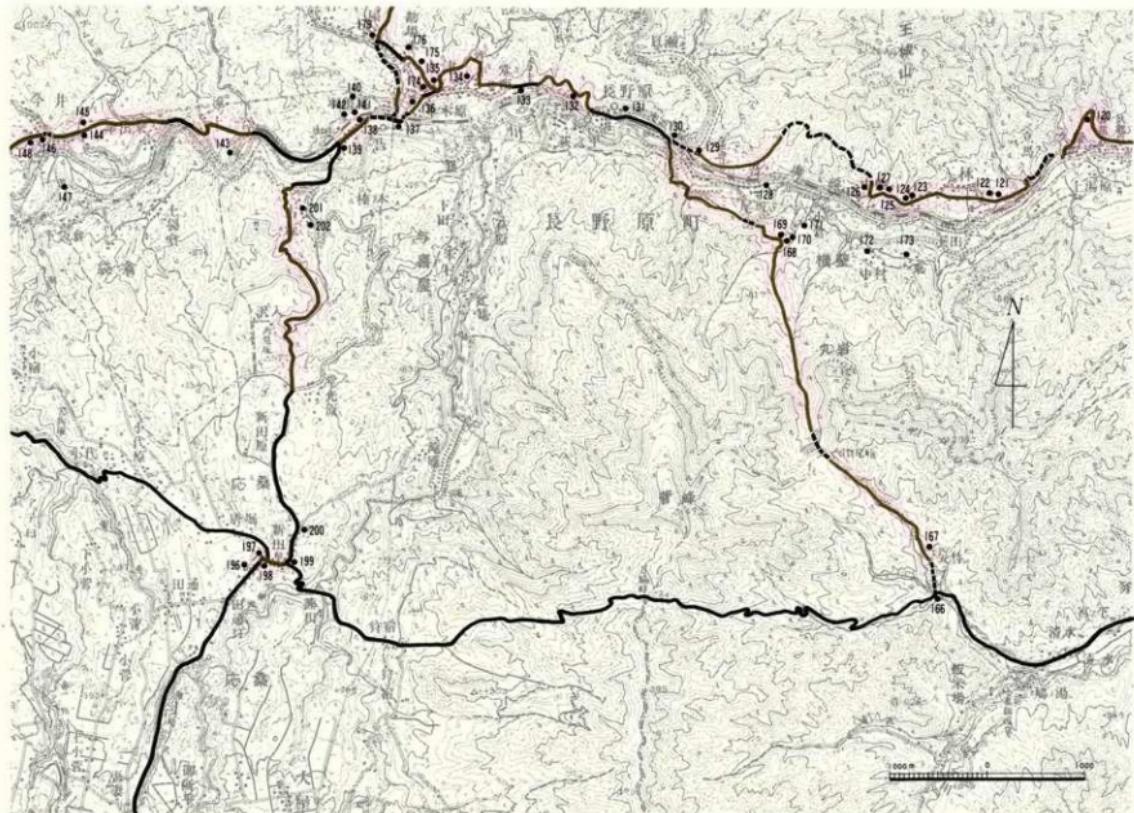




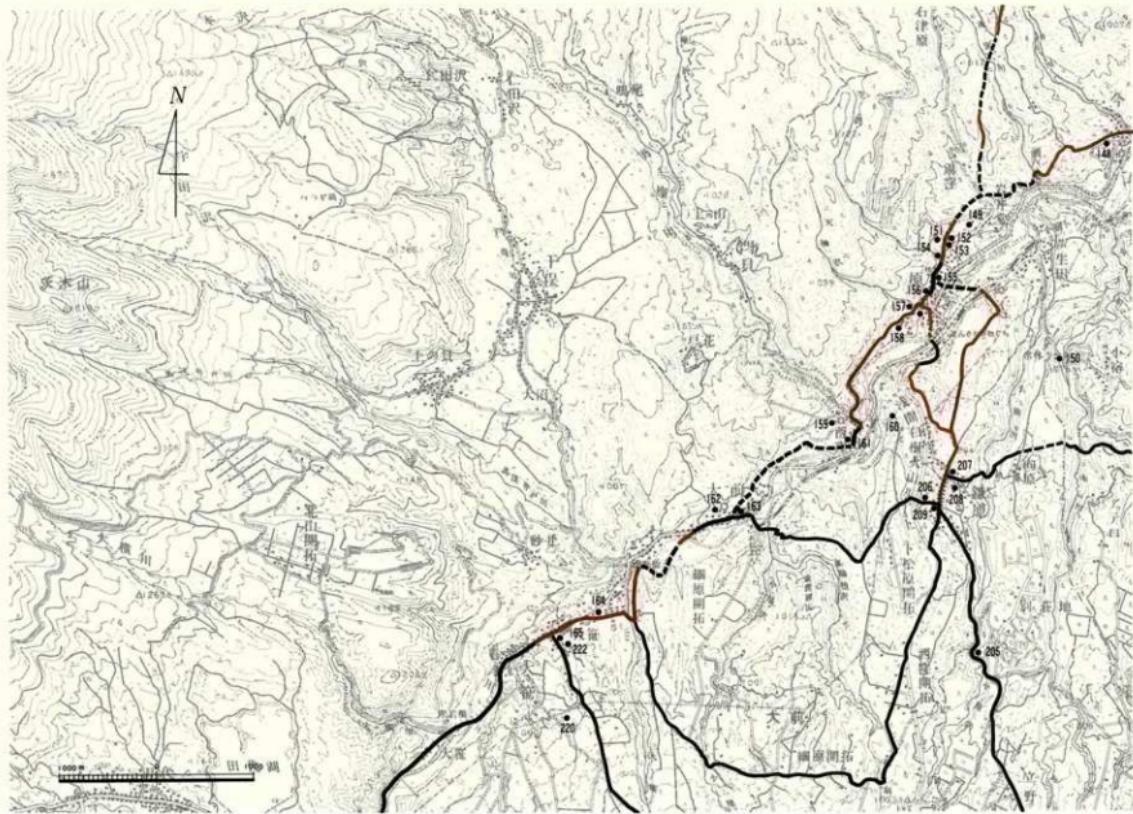


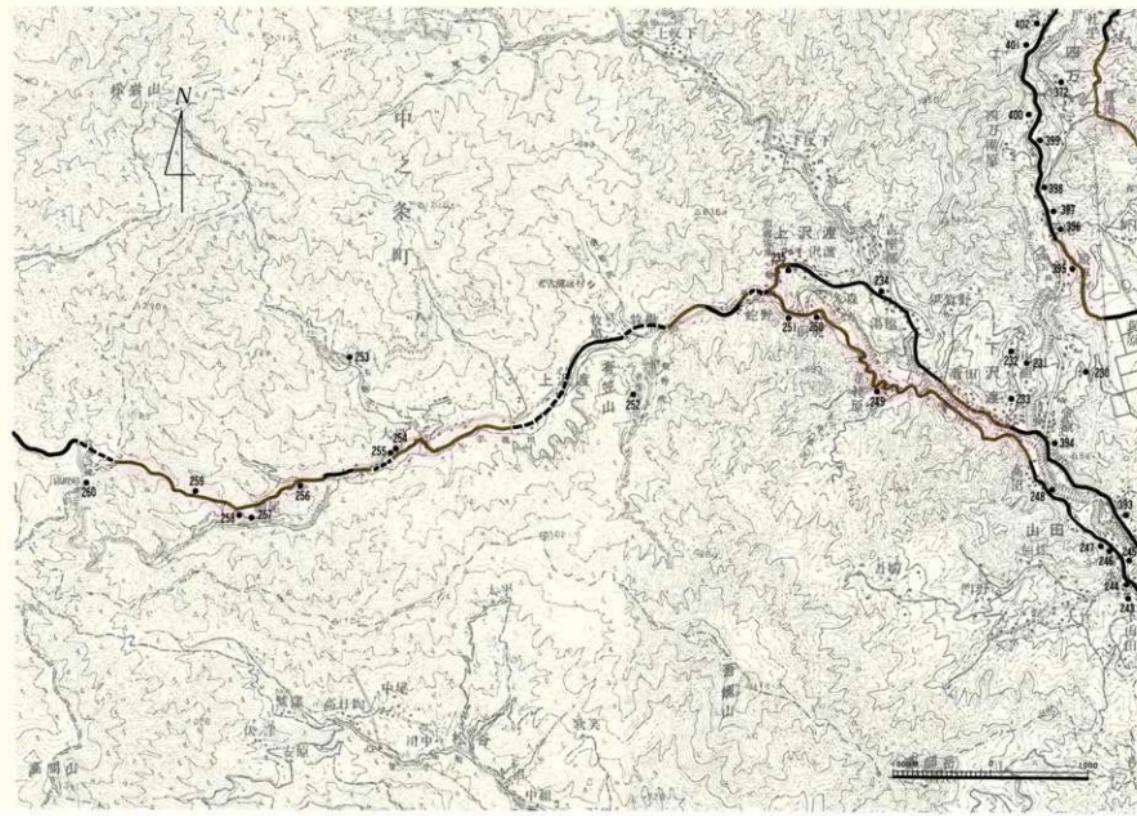
II 道の標定



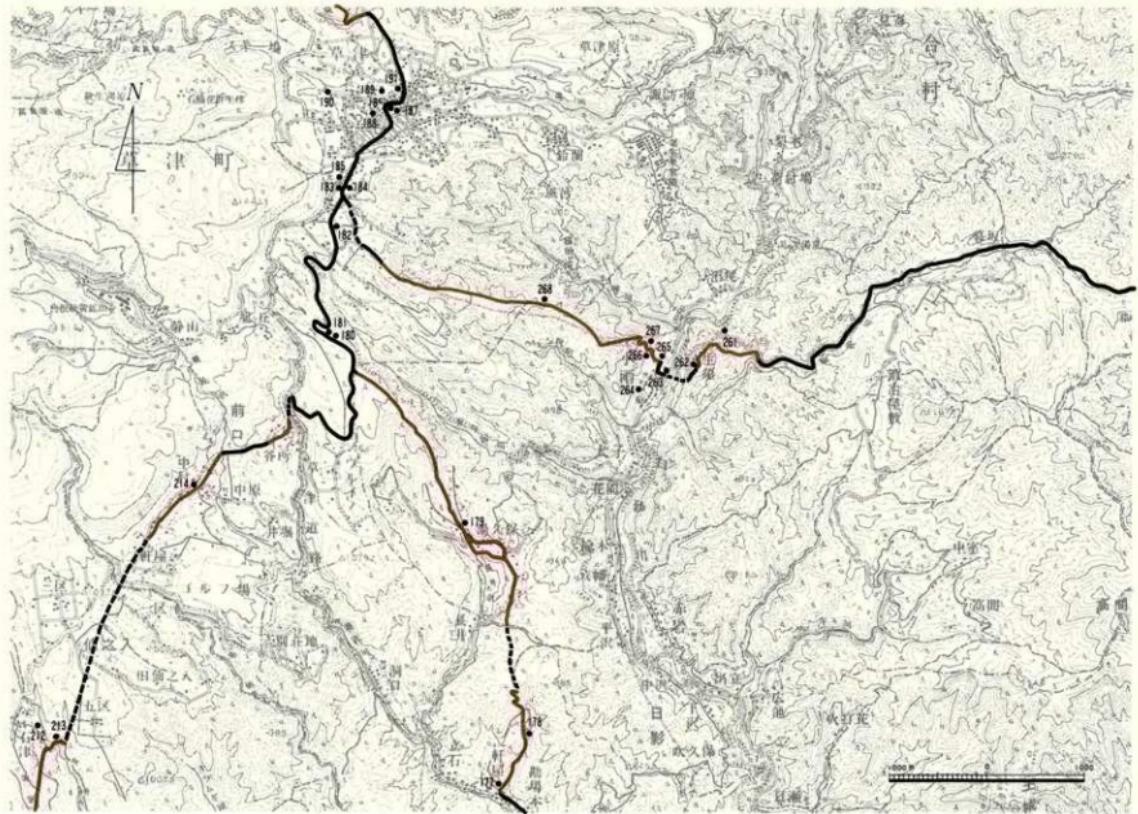


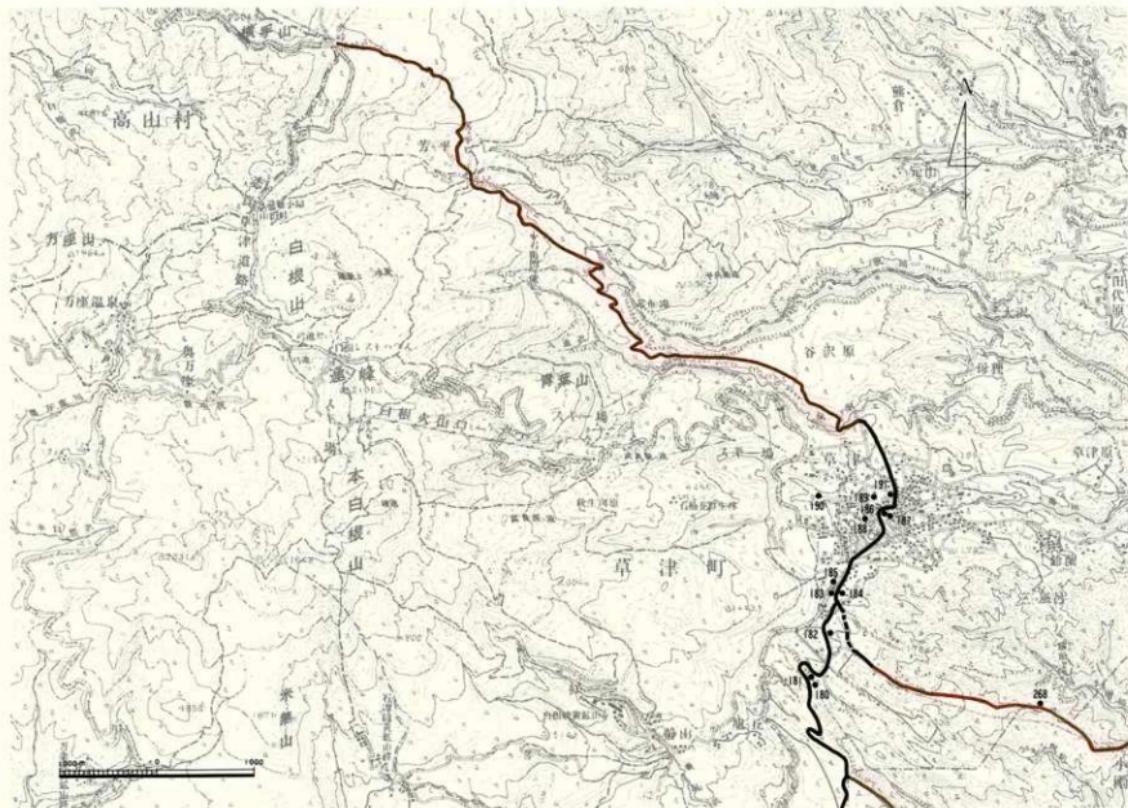
II 道の確定

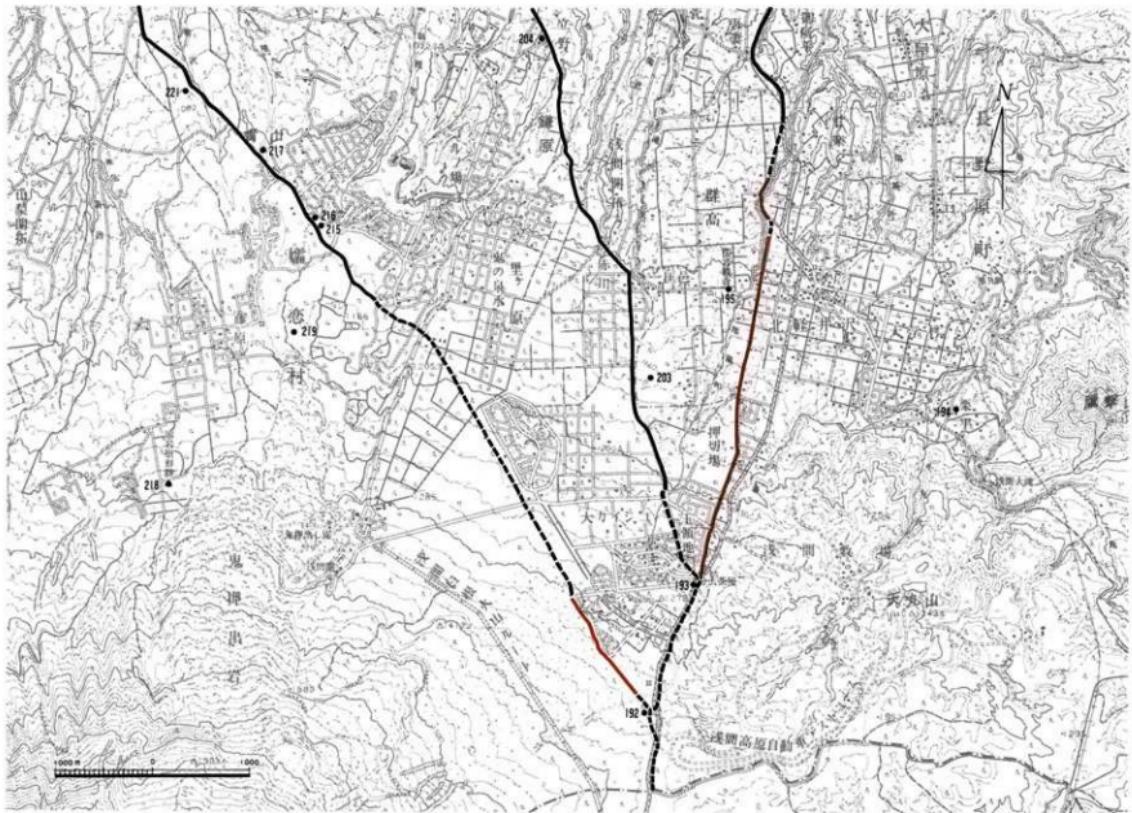


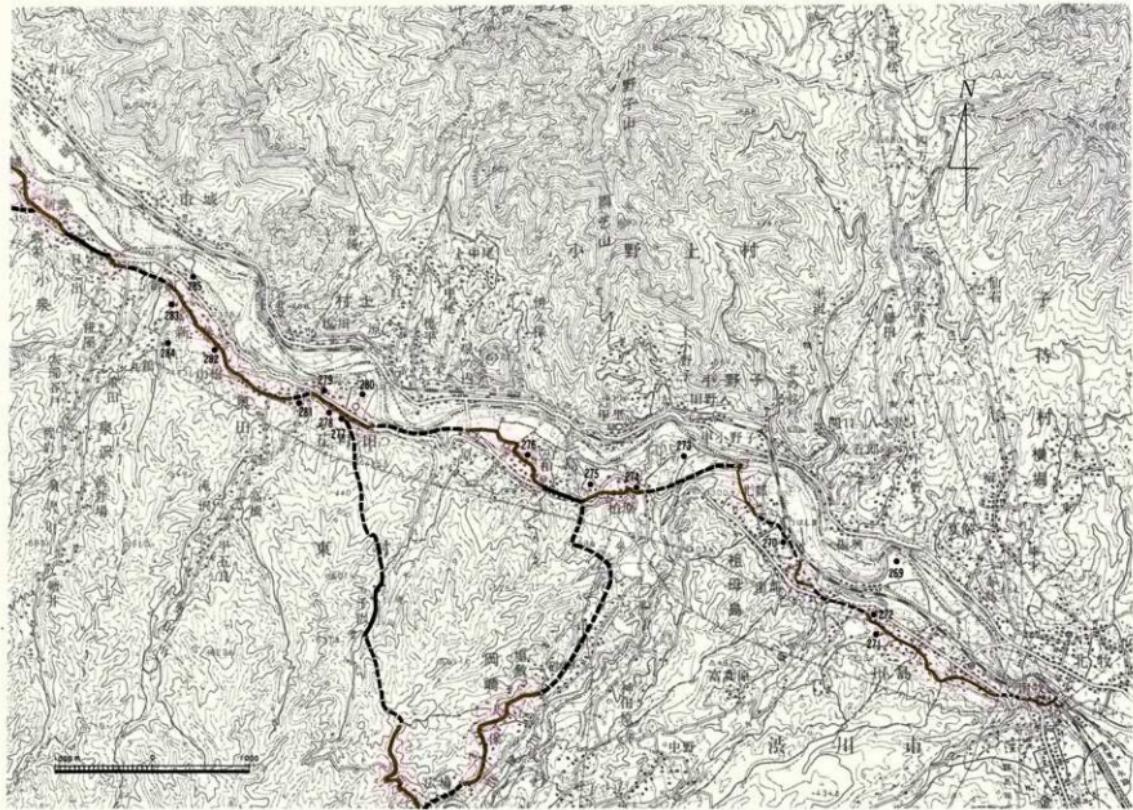


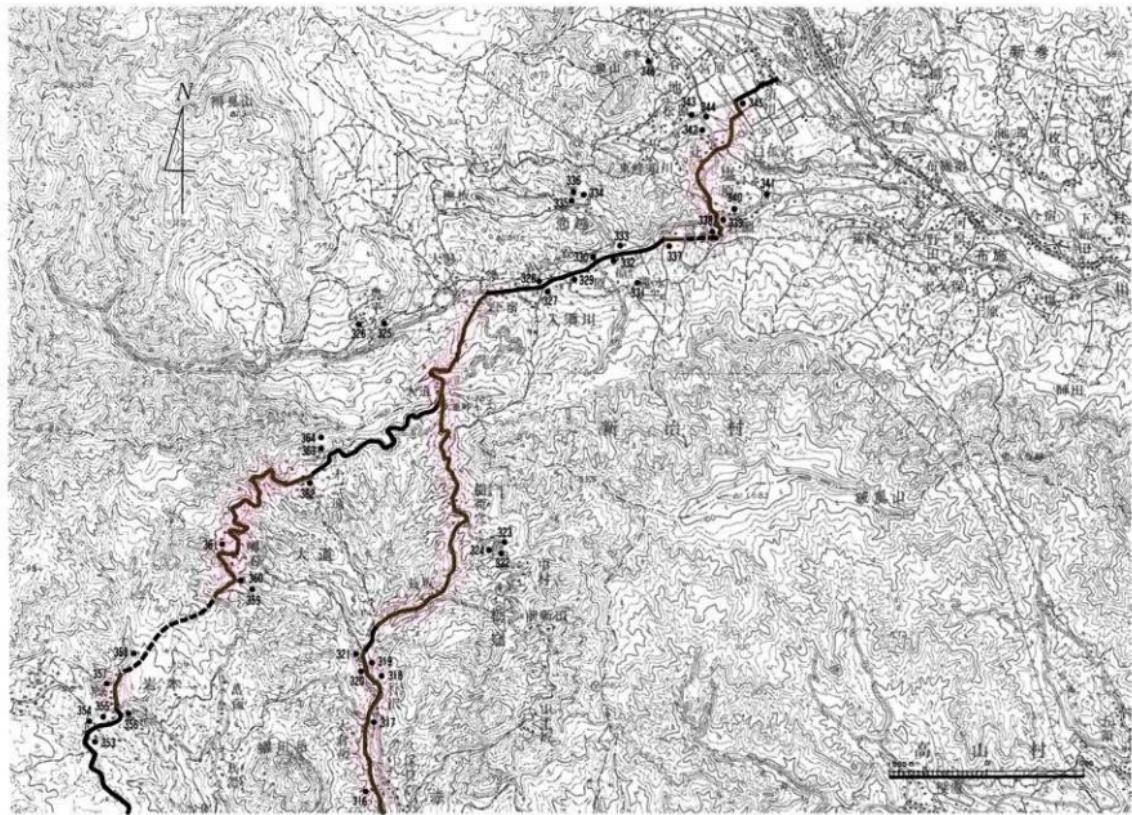
II 道の確定

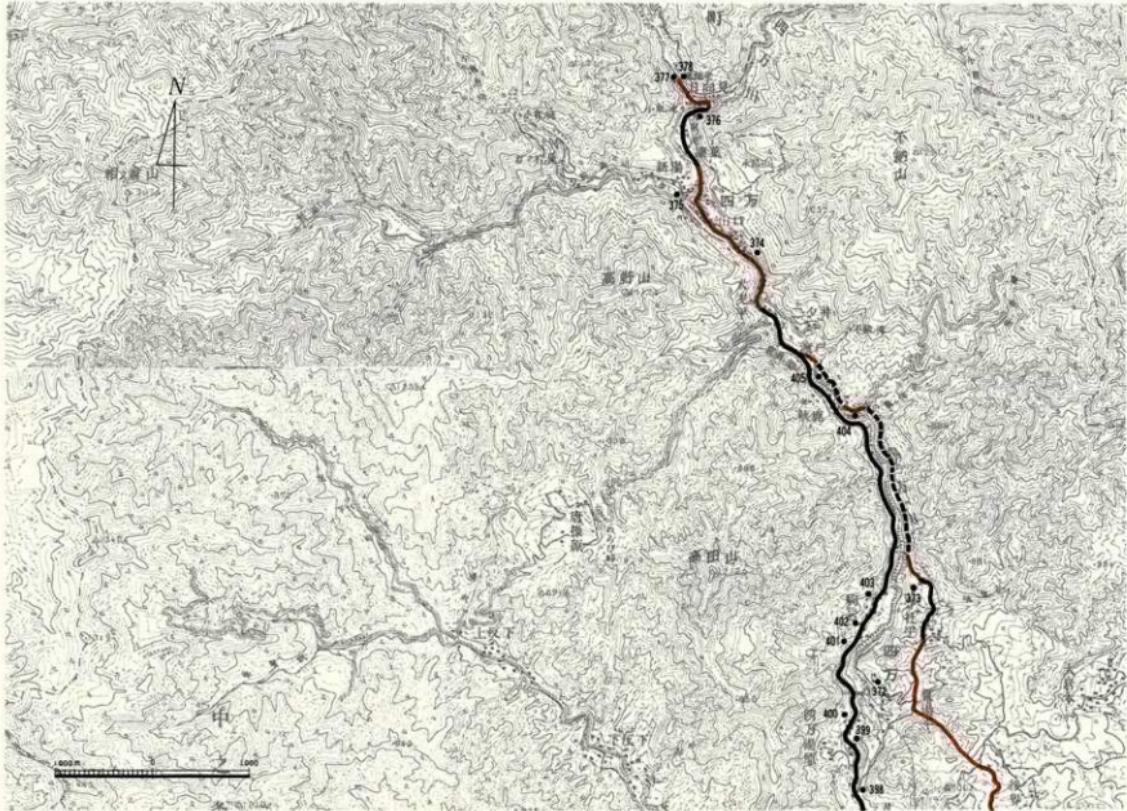












### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

#### 一、沼田・真田道

##### 1 沼田城下から中山宿へ

沼田城大手門からの道は現在の沼田小学校付近がその起点となる。お馬出し通りから沼田本町通りを右に折れ、更に下之町交差点を左に曲がって南下して行くと戸鹿野町へと達するが、本町通りを中心とした沼田の繁華街は近代的な装いを凝らした商店が軒を連ね、昔の面影を偲ぶよがとてない。しかし、沼田の台地をめぐつて流れる利根川、薄根川、片品川とそれら諸川を囲繞するかのようにしてそびえ立つ谷川、子持、武尊<sup>（ゆづる）</sup>の山などが四季折々に織りなす自然の景観は特に絶景であり、それは今も昔も変わりはない。

沼田から中山への道は二つのルートがあつたが、メインルートであつたとされる戸鹿野橋から小峰を経由していく道を最初に記述し、その後に沼田東源寺わきから権現峠を経由する道について記述しておきたい。

上之町の交差点を左に折れて、県道戸鹿野・下之町線を二〇〇メートル位南進すると右手に正覚寺への参道がある。正覚寺は淨土宗で開基は初代沼田城主真田信之の室小松姫といわれており、境内には小松姫（大蓮院）の二メートル余の宝篋印塔と御靈屋がある。また闇ヶ原合戦前夜、石田三成についた真田昌幸、幸村父子が上田城に帰る途中沼田に立ち寄り一宿した寺と伝えられる。（群馬県百科事典）また境内には沼田市指定天然記念物の「戸鹿野樹」が亭々としてそびえ立つおり、樹名は不明だが長年沼田城と深いかかわりをもつてきたこの寺の歴史をつぶさに眺めてきたことであろう。

正覚寺前を過ぎて、更に五〇〇メートル位進むと旧道は県道から分かれて

右の方へ折れて行き、東源寺の前を通つて戸鹿野町へと入っていく。戸鹿野町を出るとすぐに左側に戸鹿野八幡宮<sup>（戸鹿野八幡宮）</sup>がある。これは享禄三（五三〇）年に沼田城主<sup>（沼田城主）</sup>が後園玉泉寺の鎮守としての八幡宮を勧請して城の南方の守護神としたことに始まる。天正八（一五八〇）年真田昌幸が出陣に際して祈願し、以後代々武神として崇敬された。境内には信州伊那郡上戸村の石工による龜甲積みの石垣、大鳥居はじめ多くの石造物がある。（沼田市の文化財）戸鹿野八幡宮前から旧道はゆるやかな坂を下つていく畠中の道で、往時の街道のどやかな風情が感じられる。やがて新町へと入つてくるが戸鹿野町からの旧道が合した所からや北の方の山を少し登ると、中腹に巨大な岩がある。その岩陰に小さな石宮があつて「産護石様」と呼んでいる。八幡太郎義家に敗れた安倍貞任の一族の悲話が伝説としてまつわっている。お産が軽くすむという言い伝えから、後世産護石として祭られ、お産前の婦人の参拝が多かつたという。

新町は往時は戸鹿野新町と称し、寛永十八（一六四一）年に戸鹿野町から分離し、慶安二（一六四九）年に宿割して出来たものであり、旧道の両側に並ぶ家並と道端を流れる用水から何とはなく昔の宿の雰囲気をかもし出してゐる。戸鹿野新町の南のはずれに、觀音堂があり、庚申塔や馬頭観音などの立派な石仏群がある。そこから旧道は右に折れ、段丘崖の斜面を縫うようにして急な坂道を下り、稻荷の祠の前を直角に折れると戸鹿野橋へ出る。

戸鹿野橋は江戸時代を通じて水上の銚子橋と共に利根郡内の利根川筋に架橋された御用普請の橋であり、沼田城主の參勤道や、物資の流通路、旅人の

往来道として交通の要衝にあった。寛文八（一六六八）年真田伊賀守によつて架けられたもので、その後大正十三年までの間に十九回架け替えられている。

戸鹿野橋を渡ると国道十七号線である。そして国道に沿つて一段高い所に上越線が通つている。戸鹿野橋を渡つて右に折れるとすぐに国道に明治十七年の大きな道しるべがある。明治十八年に開通した清水峠越新道を記念して建てられたもので、「右沼田町會津道」「左清水越三國道」とある。

旧道は戸鹿野橋を渡ると右斜めの方向に上越線の線路を横切つて段丘崖の坂を上り、屋形原町へと入るが、その間の旧道は上越線工事の際に潰滅して道形はほとんど残っていない。

屋形原町へ入つて進むと三差路に出るが、旧道は右へ曲がつて進んでいく。しかし、その反対側の道を南の方へ一五〇メートル位行くとやはり三差路があり、その角にめずらしい道しるべがある。指先で沼田から「たかさき」（高崎）の方向を指したものであるが、年代ははつきりしない。



明治四年戸鹿野村絵図、戸鹿野橋



屋形原道しるべ

旧道は屋形原町を北上していくが、やがて人家が途絶え、利根川を臨む段丘崖の縁に沿つて進む。その途中に石造物群がある。その中でもとりわけ珍しいのが、「幻杵二の碑」である。明治二十七年と比較的新しいが、「幻杵二」なる品師の興行記念に建てられた碑であつて、「キリシタン」「萬國一早業」という文字が模書きに彫られてあつて、当時の屋形原町の人達の奇術に対する驚きと感激が伝わってくるようである。

旧道はやがて下川田町前原の集落の南端をかすめて通つているが、旧道は沢を下りてまづすぐに横切つて対岸に達していた。しかし、その道形は今は無い。現在の道が大きくなりカーブして前原の集落にさしかかった所の角に道しるべがある。「北なぐるみどおり 北より南沼田みち 西中山とおり」と三行に刻んである。

前原を過ぎると篠尾の集落に入つてくるが、旧道は篠尾の手前から右に折れて、ゆるやかに統く坂を上つていく。所々に簡易舗装の所もあるが、道幅といい、周囲の景観といい、旧道の面影をとどめている。三〇〇メートル位行くと篠尾神社につきあたり、その前が十字路になつてゐる。左へ行けば篠尾の集落、右へ行けば田中集落に通じ沼田東源寺から権現峠への道と連絡する。真直ぐに行けば小峰に至る。篠尾神社の横を旧道は行くが、神社の裏にもう一本田中集落に通する道がある。そしてその路傍に地蔵や狛塔、馬頭観音等十体の石仏が半ば夏草の中に埋もれて立ち並んでいる。

篠尾を過ぎて大竹の集落を左に見て行くと旧道は舗装が切れ、両側に雜木林がおおいにふさつてきて、うつそうとしたたたずまいの中を通つていく。その道端に小さな粗末な石に刻まれた道しるべがボツネンとおかされている。

「右ぬまた 左下加ハタ道」とある。旅人の往来したことことがしのばれる。

旧道はこの先、雜木や杉木立の中をどんどん進んでいくことになる。林におおわれて薄暗く、森闇として物音一つ聞こえてこない。道形は残つてゐるが、現在は杣道としてしか利用されていないのか、道一面にずっと夏草が生

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

左へ行くのが子持山登山道であり、旧道は右に折れて行くが、間もなく標高八二三メートルの小峰に達する。小峰の頂上から又、道は二手に分かれるが、旧道は右の方を西北の方向に進んでいくと、やはり小峰頂上からきている林道ともなく合流する。その林道をどんどん下っていくことになるが、それがかつての旧道である。小峰から五〇〇メートル程下った所に土橋があるが、その先からは舗装になつていて、道は山あいの木立の中をほぼ一直線に下つていくが、道幅もほぼ往時のままのようであり、そこはかとなく昔の面影が漂つている。

更に林の中をどんどん進んで行くとやがて沢にさしかかる。しかし、その沢を渡る橋はなく、対岸の道も杉木立の中に潰滅して見当がつかない。およそ四〇〇メートルの間は杉林になつて旧道は消失してしまつていて、その道も今は通る人ではなく、過去のじしまの中にひつそりとたたずむ寂寥感が漂つている。

また道路と合流する。そして間もなく旭集落へと入つていく。山道といつて木林道として整備され、道幅は広い。小峰にさしかかる手前で道は二手に分かれ、旭集落から先は舗装も切れ、急な山道となつていて、山道といつても林道



大竹より小峰に至る途中の馬頭観音（寛政五年）



小峰頂上から中山方面を見た旧道

左へ行くのが子持山登山道であり、旧道は右に折れて行くが、間もなく標高八二三メートルの小峰に達する。小峰の頂上から又、道は二手に分かれるが、旧道は右の方を西北の方向に進んでいくと、やはり小峰頂上からきている林道ともなく合流する。その林道をどんどん下していくことになるが、それがかつての旧道である。小峰から五〇〇メートル程下った所に土橋があるが、その先からは舗装になつていて、道は山あいの木立の中をほぼ一直線に下つていくが、道幅もほぼ往時のままのようであり、そこはかとなく昔の面影が漂つている。

旧道はやがて高山村原集落と和田集落の間を通過するが、右手の原に碑文時代の敷石住居跡がある。和田で旧道は旧三国街道と交差する。そこを横切つていくと右手の小高い丘にうつ蒼と生い繁る木立に囲まれて中山神社がある。中山神社は元慶二（八七八）年美濃國一ノ宮南宮大明神を勧請し、創建したものであると伝えられており、旧中山村全城の總鎮守として、また中山城主中山氏の代々の産土神として崇敬をうけてきた。（高山村誌）この中山神社に相対して旧道の左側の畠地に「史跡 丸屋敷跡」という標柱が建っている。高山村誌によれば諸説があつて、中山城諸代の家臣の屋敷跡とも言われ、また建保二（一二一四）年に築かれた中山城の最初の城とも言わられる。現状は耕地整理の際、消滅してしまつたが、わずかに内郭及び内堀が確認出来るそうである。

丸屋敷跡から先、旧道は再び丘陵地にさしかかり、峠を越えて行くと眼前に突然と耕地整理された近代的な農場風景が展開されてくる。その中で旧道は進むが、やがて国道一四五号線とぶつかり中山城跡のある小高い丘の前に到達する。

次に沼田戸鹿野町の東源寺のわきの道を通つて中山へ至る道について記述

右手に東源寺がある。東源寺は淨土宗で承応元（一六五二）年真田伊賀守の側室の浜松の局が正寛寺六世鉄山和尚に帰依して隱居寺として開いたのがその始まりという。（利南村誌）東源寺の境内に稻荷がある。東源寺稻荷といふ。沼田城の鬼門除守護神として伏見稻荷を勧請したものだが創立年代は明らかではない。沼田氏の創立で戸鹿野八幡宮と同じ頃ではないかという。この稲荷は古来、靈験あらたかとされ、沼田町の色町の人々の信仰が多かったが、現在では養蚕の神として郡内一円を信仰團としている。（利南村誌）堂内には白い陶製の小さなキツネが数百個も奉納陳列されており、一種異様な雰囲気をかもし出している。また、東源寺の参道の入口に徳本の名号塔がある。



戸鹿野東源寺稻荷

東源寺の北側の段丘崖の斜面を旧道は一気に下っていく。上越線、滝坂、国道十七号線をそれぞれ横断して西へ進むと利根川につきあたる。対岸の下川田地内に渡るには、往時は渡し舟によつたものと思われるが、「加沢記」によれば「かじか瀬」或いは「かちヶ瀬」という呼称が使われているところからすれば、徒步で渡れたのかもれない。

対岸へ渡ると旧道はいきなり急な崖道を上らねばならないが、それを上ると平坦な道が下川田町内宿へと入っていく。薬師堂が右側に建っているが、ここには多くの石造物があり、また堂の裏には加沢平次左衛門の墓がある。加沢平次左衛門は沼田藩主真田伊賀守の家臣で、天和元（一六八一）年沼田藩改易後浪人し、

下川田辺に住んで「加沢記」や「上野国沼田領品々覧書」を著している江戸初期の著名的な郷土史家である。（群馬県百科事典）しかし、その墓は名聲の割に小さく苔むしており、墓碑銘も磨滅してほとんど判読不可能な状態である。また、平次左衛門の墓のある桑畑の一帯は川田城跡でもある。川田城は三浦系沼田氏六代景久の四男川田四郎景信が分家した際、棄いたと伝えられる。川田氏は天正七（一五七九）年小田原北条氏、同八年真田昌幸攻で滅ぼされた。城は真田が再興したが天正十年から十五年まで北条勢の来袭で戦乱がつづき、その際に川田、屋形原の郷侍も多く討死し、城は荒れ果ててしまった。（沼田市の文化財）城跡一帯は往時に便ぶよすがはほとんどなく、ただごの城跡から少し離れた沼田台地や利根川の流れ、遠くは谷川連峰、武尊の山などの雄大な景観がつわもの共の盡を静かに包みこんでいるようである。

川田城跡から少し行くと川田公民館の前に出る。「まよめの里」の碑がある。浄土宗で行くが、右の方をおよそ二〇〇メートル位行くと遷流寺がある。浄土宗で開山は沼田氏の一族川田四郎光清で沼田氏と共に真田氏に敗れ、遁世して光円と改め、宮塚の円珠姫の旧庵に依つて天正年間、開基して円珠庵と称したと伝えられている。その後、天和元（一六八一）年に円珠山大藏院遷流寺と改称したという。ここに出てくる円珠姫は川光清の姫で、幼名を小柳と称したが和歌を能くし、十八歳の作「子持山紅葉をわけて入る月は鏡に包む鏡なりけり」の歌が正親町天皇の叡聞に達し、「上野の沼田の里に円なる珠のありとは誰か知らまじ」の御製を賜り、名を円珠と改めた。（川田村誌）その円珠姫の歌碑が田中の集落の先の藤尾に通する子持山登山道の入口に建てられている。

また、川田公民館の所を右に曲がつてまたすぐ左に入つて行くと右手に川田神社があり、境内の大ケヤキが一きわ高くそびて立つているのが見える。県指定の天然記念物で樹高が約二十一メートルに及び、樹令は五〇〇年以上と推定され、県下でも屈指のけやきの巨樹である。

権現峠、今井町境地蔵と道しるべ  
(台石が道しるべ)

下川田町内宿にある長屋門（深津満雄氏宅）

川田公民館を左に折れるとすぐ右手に珍しい長屋門が見える。農家の下男などを住ませたものであろうか。旧道は間もなく交差点に出で国道一四五号線と合流する。それを約二〇〇メートル位行くと右の方に少し迂回して再び国道と合流して田中の集落に至る。旧道はここで国道と分かれて右手の山道へとさしかっていく。山道を上りながらしばらく行くと後入沢の集落の北側にさしかかるが、そこを過ぎると今井町の間

まで約二キロは全然人家がない。道形は残っているけれども山仕事をする人以外はほとんど人通りはない。雜木林の間を夏草におおわれて延々と続いている。所々山が切れた谷あい

メートル程離れた山の上部にあるという変わった風習の両墓制である。

今井町を過ぎてしばらく行くと上川田方面へ行く旧道との辻の右角に地蔵様が台石の上に鎮座している。そしてその台石が道しるべになっている。地蔵様と台石の道しるべは別物であると思われるが、その道しるべには「右ハぬまた道 左ハかみかわた道」とある。この道しるべにある通り、右手の方へ行くと上川田へ行く事ができる。この道しるべから少し先に行くと、今井村と中山村の境をなした所に「権現松」と土地の人が呼ぶ松がクロナスクな恰好をして立っている。村の境界を示す目印として植えられたものらしい。

権現峠を過ぎ、権現峠を越えるといよいよ高山村へと入っていく。そして国道一四五号線に出た所に若山牧水の歌碑が建てられている。牧水は大正七年十一月、沼田から草津に向かう途次、高山村を通り、判形のやまや旅館で一泊している。その際の紀行文と歌十数首が遺されているが、その中の二首が権現峠の歌碑に刻まれている。

権現峠から旧道は国道一四五号線と合流し、左に大きくカーブしながら坂を下っていく。跡からおよそ五〇〇メートル程下ってから、旧道は左の方へ入っていく。しかし、雜木林の中を背たけ位の夏草が生い繁り、わずかに道形が残っているものの、人の歩いた気配はない。夏草をかき分けながら進むとやがて雜木林も途切れ、畑中の道となって簡易舗装も施されてくるようになる。そして、昔の雰囲気がそこはかとなく感じられてくるようになるものの、右の方に国道一四五号線がほぼ並行して走り、往来する自動車の騒音が旧道にまでひびきわたつてくるのが情緒を損ねる。一・五キロ程旧道は国道と分かれて進むが、再び国道と合流して本宿へと入っていく。本宿は三国街道の宿場であり、街道筋には本陣や問屋の跡も標識で示されている。旧道は本宿の先、国道から左の方へ少しそれしていくが、畑の中で消滅してしまつておこなわれている。ここは両墓制は十五歳以上の大人の墓と、それ以下の子供の墓が別々に設けられているもので、子供の墓地は大人の墓地から二〇〇

まで至るわけだが、国道を横断した所から中山城跡までの間は、耕地整理によってすつかり旧道は姿を消してしまっている。その前に県道を右に折れて行くと中山宿の新田宿になる。道の左側に本陣があり、往時のたたずまいを留めている。

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No	正覺寺	名	称	年号	備考				
南無一念阿弥陀塔							産護石碑	百馬頭觀世音供養塔	道祖神	東源寺稻荷	戸戸野八幡宮	五輪塔										1.	沼田城下から中山宿へ								
庚申塔							田城跡	百馬頭觀世音供養塔	道祖神	東源寺稻荷	戸戸野八幡宮	五輪塔										2.	中山宿								
萬延元年	宝永元年	享保二年	天保十三年	安政八年	嘉永五年	文政二年	明治十七年	元禄九年	明治二七年	延享元年	庚申塔	他に庚申塔、廻國供養塔等多數あり	高野櫟	大蓮院宝圓印塔	高野櫟	大蓮院宝圓印塔	高野櫟	大蓮院宝圓印塔	高野櫟	大蓮院宝圓印塔	高野櫟	庚申塔	道祖神	道祖神	庚申塔	道祖神					
他に尊衣婆等石造物多數あり			遷流寺六地蔵	双体道祖神	十二神社	双体道祖神	道しるべ	元禄九年	他に多宝塔など数基	他に多宝塔など数基	庚申塔	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	右沼田町會津道 左清水越三国道	庚申塔	道しるべ	道しるべ	庚申塔	道しるべ					
萬延元年			長屋門	開魔像	川田神社大ヶヤキ		加沢平次左衛門の墓	薬師堂前に多數の石造りあり	石祠八基、馬頭觀音像等多數あり	石祠八基、馬頭觀音像等多數あり	庚申塔	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	他に子育觀音像(寛政十年)等	庚申塔	双体道祖神	双体道祖神	庚申塔	双体道祖神						
他に地蔵仏(寛文八年)																															
54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
馬頭觀音																															
天明五年																															

嘉永五年	元文六年	安政四年	文政十一年	天保五年	天保十五年	嘉永四年																																						
元文六年	安政六年	文政四年	天保二年	天保二年	天保二年	嘉永二年																																						
萬延元年																																												
天保二年																																												
庚申塔	道祖神	道祖神	抱肩握手型	右ハぬまた左ハ加ミ加わた道	右ハぬまた左ハ加ミ加わた道	抱肩握手型																																						
道祖神	道祖神	道祖神	抱肩握手型	他に庚申塔、馬頭觀音あり	他に庚申塔、馬頭觀音あり	抱肩握手型																																						
道祖神	道祖神	道祖神	抱肩握手型	右ぬまた左下加ハた道	右ぬまた左下加ハた道	抱肩握手型																																						
庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔																																						
道祖神	道祖神	道祖神	道祖神	道祖神	道祖神	道祖神																																						
馬頭觀音	馬頭觀音	馬頭觀音	馬頭觀音	馬頭觀音	馬頭觀音	馬頭觀音																																						
他に庚申塔(明和二年)一基あり																																												

61 60 59 58 57 56 55

双体道祖神  
中山本宿本陣  
双体道祖神  
中山神社  
双体道祖神  
丸屋敷跡  
中山城址

元文 五年 奉幣型、他に庚申塔等二基あり

抱肩握手型

## 2 中山宿から中之条町へ

中山城跡から旧道は判形の集落に入り、高山中学、高山村役場の前を通つて、溝口の集落へと入つていく。溝口を通る旧道はよく往時の面影を留めている。このあたりは名久田川の川岸まで山が迫つてきており、旧道はその山のふもと近くにあつて、現在の国道よりも一段高い所を通つてゐる。そして、溝口の先から添わづが森まで行くが、添わづが森から関田まで道形はほとんど残つておらず判然としない。

名久田川をはさんで添うが森と添わづが森があるが、この付近で旧道は一手に分かれ、中之条町大塚辺まで名久田川の両岸を通つてゐた。しかし、名久田川の南岸を通る旧道の方が一般に通行量も多く、主要な道であつたようである。

添うが森は名久田川の南岸、添わづが森は北岸のそれぞれ小高い山の上にあり、石宮が祭られている。添うが森には天慶の昔、平将門の頃の男女の結ばれぬ恋の悲しい伝説が、添わづが森には悪縁を断つ、縁切りの願いを秘めた伝説がそれぞれ残されている。



高山村元宿



高山村見沢どうどうが渕

があり、添うが森と添わづが森の伝説に出てくる熱退和尚は第七世の住職である。文明年中に堂塔伽藍が炎焼したが、その後、天正年間に並木城の北に移転し、現在の泉竜寺となつた。(『高山村誌』)

現在、その跡には小さな堂宇が一字建つてゐるのみである。旧道は火之口集落の南の山をそを通り、名久田川に向かつて下りてきて名久田川を渡り、熊野の北向観音堂の所へ出る。火之口の対岸にあら高山西小学校には房高人形がある。一人大きい人形芝居の人形で、人形の頭は県指定重

要文化財に指定されている。

北之谷に泉童寺がある。泉童寺は前出の泉照寺を天正年間に移転したものであるが、寺の裏に県指定天然記念物の高野櫻がある。樹令七〇〇年以上とされ、樹高が約二九メートル位ある。寺伝によれば、建久年間、源頼朝が吾妻下向の折、熊野に祭る常盤の塔に墓参し、泉童寺にて休憩した際、裏庭に頼朝自ら記念として植えたものという。(『高山村誌』)また、泉童寺参道入口わきに徳本の名号塔が建っている。常盤の塔は元宿の郵便局の横に置かれている。常盤御前は一説には、源義朝の妾であったが、のち平清盛の愛人となるも承和年中の乱に、はるばる東国に逃れ下つて尻高の山中に迷いきて、ついにここで果敢なく死没したといわれている。(『高山村誌』)今、その墓は五輪の塔であるが、苔むして傷みがひどく、哀れな末路を象徴しているかのようである。その塔が置かれていた元宿から戸室集落に通する旧道の坂を地元では「塔の坂」あるいは「戸の坂」というように呼んでいる。



高山村尻高のキリスト教会堂



中之条町塩原道しるべ(右ぬま田左村道)

常盤の塔のある所から少し西へ進むと尻高の教会堂<sup>(1)</sup>がある。明治十九(一一八八六)年西群馬教会から牧師が来村、初めて説教會を開いて村民三人が受洗したのが、このキリスト教会の靈廟である。現在の教会堂は明治二十(一一八八八)年に建設されたもので、吾妻郡内最も歴史の古い教会である。白壁面の小じんまりとした洒落な建物は明るい陽射しの中によく映える。

旧道は北向観音堂<sup>(2)</sup>の所から国道一四五号線のすぐわきを通っていたが、壁谷のあたりまで耕地整理によって消滅してしまった。北向観音堂を過ぎると間もなく中之条町へ入るが、中之条へ入るとすぐ左側に大塚の観音堂<sup>(3)</sup>がある。大塚の観音堂の前から塩原の集落に入る道の右側の路傍に道しるべがある。

「右ぬまた 左村道」とある。

壁谷から小枝沢、二日市、柳田、篠林のあたりは旧国道一四五号線沿いをつかず離れずしながら旧道が通っている。そしてその先はほとんど現在の旧国道一四五号線上を行くが、小塙から七日市の間は国道から左に少しそれぞれ国道に並行して走っている。そして吾妻神社の横を通り国道上を中之条町の市街地へ入っていくことになる。最近、大塚辺から七日市辺にかけて新しく国道一四五号線のバイパスが建設されて、周辺の景観もかなり変貌をとげているが、その新国道を行くと、名久田川の橋を渡つたすぐの横尾に植塙古墳<sup>(4)</sup>がある。明治初年頃に発掘されたもので、墳丘の直径十七メートル位の円墳である。また横尾には高野長英に師事し、医家として蘭学者として聞こえの高かった高橋景作<sup>(5)</sup>の屋敷がある。

七日市の桃源川が流れる山すそに「桃源の水牢跡」がある。真田伊賀守時代、苛酷な貢の取り立てをおこなつたため未納者が続出し、それら未納者に對して水責めを行なつた遺跡である。今、この遺跡にはうす汚れた水が淀み、数匹の鯉が悠然と泳いでいるが、その水中に二本の卒塔婆が立てられてゐる。そして正面には粗末な台がしつらえられて、ローソクや線香や花など

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

中之条吾妻神社社殿  
中之条林昌寺山門

中之条の市街地に入る手前に吾妻神社<sup>(1)</sup>がある。祭神は大穴牟尊命<sup>(2)</sup>といい、吾妻大社、割宮ともいう。吾妻七社の一つであるが、その創建は古代条里制施行の時までさかのぼるという。江戸時代には真田氏の崇敬厚く、又明治以降は中之条、原町、高山一帯の總鎮守として一般住民にも崇敬深かつた。境内はうつ蒼たる古木、巨木が林立、昼なお薄暗く、ひんやりとして身のひきしまる思いと共に深遠なる歴史の莊重さを感じられる。

旧道は中之条町に入るが、中之条町は町の中心を流れる胡桃沢川を境に、東の伊勢町と西の中之条町に分かれる。伊勢町通りの旧道は国道一四五号線上を通るが、胡桃沢川の所で国道一四五号線と分かれ、右の方中之条町へと入っていく。伊勢町から中之条町へ入る手前の右側に一際大きくそびえる山



中之条吾妻神社社殿



中之条林昌寺山門

の香華が手向けられ、犠牲になった人達の靈を慰めている。遺跡とはいえないわけにはいかない。

林昌寺から中之条町を行くとやはり右手のやや奥まった所に白亜の洋風建築物がある。現在、装いも新たに中之条町歴史民俗資料館としてオーブンしているが、もとは吾妻第三小学校の校舎として明治十八（一八八五）年に建てられたものである。その後、女子尋常高等小学校の時代を経て、大正七年（昭和五十三年まで）町役場の庁舎として使用してきた。群馬県にただ一つ残された明治洋風小学校建築として県指定の重要文化財になっている。

中之条町の通りを行くと三差路に出る。右へ行くと四万温泉に通する国道三五三号線であるが、旧道は左の方へ行って、小川の橋を渡ってすぐに右に折れる。その近くに伊勢宮がある。

No.	名 称	年 号	備 考
73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62	双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神 双体道祖神	宝曆十三年 天明四年 酒器持ち祝言型	祝言型 抱肩握手型、もう一基は明治期 握手型と祝言型の二基あり 添わざが森 どうどう測 泉照寺跡

95	94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74	常盤の塔 双体道祖神 名久田キリスト教会 並木城跡 奥童寺高野横 双体道祖神 北向觀音堂 庚申塔 大眾觀音堂 道陸神 頬塚古墳 馬頭観音 双体道祖神 庚申尊 高橋景作屋敷 桃源の水牢 吾妻神社 林昌寺 中之条町歴史民俗資料館 伊勢宮道祖神	常盤の塔 双体道祖神 名久田キリスト教会 並木城跡 奥童寺高野横 双体道祖神 北向觀音堂 庚申塔 大眾觀音堂 道陸神 頬塚古墳 馬頭観音 双体道祖神 庚申尊 高橋景作屋敷 桃源の水牢 吾妻神社 林昌寺 中之条町歴史民俗資料館 伊勢宮道祖神	實政 十年 酒器持ち祝言型
		寶曆十三年 二年 寛政八年 四年	寶曆十二年 右ぬまた 円墳	實政 十年 酒器持ち祝言型
		不夜燈（寛政四年） 左村道	不夜燈（寛政四年） 左村道	實政 十年 酒器持ち祝言型
		天保六年と享保七年の一基あり	天保六年と享保七年の一基あり	實政 十年 酒器持ち祝言型

### 3 中之条町から長野原町へ

現在の中之条は寛永二（一六二五）年長岡の宿から王子原へ町を移したことでより発展した。移転に際しては沼田の役人が一切を引きうけて行われ、「真田の町割り法」といわれた。町の中央北側を中宿といつたが、現在の上ノ町である。

この上ノ町から、真田伊賀守時代形成された新田町に左折して枯木沢を渡ると左に伊勢宮がある。伊勢大神宮の神靈を遷座したもので、郷土鹿野氏によ

り祭られたものといわれる。境内には道祖神、町田一草の碑がある。伊勢宮からは四〇〇メートル位で山田川につく。山田川橋は「中之条町誌」によれば天正十（一五八二）年、武田氏幕下、真田氏が利根・吾妻を支配するに及んで、沼田～上田～往還を最重要幹線とみるに伴い真田氏が一切の費用を出して架橋していたものである。江戸時代になつても三国街道往還にあつた重要な橋であった。当時の橋は公儀橋で例を三の御返組み出した御橋であつた。

おところ坂は淋しい坂で老松があつたという今は見あたらない。この坂の左手手元に安永乙年の馬頭観音他2基がある。須郷沢川を渡った所に安政六年の常夜灯が、右に吾妻では珍しく大きな長屋門が見える。須郷沢の新井氏が江戸初期祭ったと思われる雷電神社前を通つて原町の大樟につく。古来、この木はツキの木と称せられ、国指定の天然記念物となり原町の象徴としても親しまれている大木である。



木橋三四郎宅長屋門



原町頭徳寺と庚申塔

原町が岩櫃城下の平川戸宿から現在地に移転されたのは、領主真田信幸が大坂の陣後の徳川家康の意を安んじて、己の安全を図るために急遽、岩櫃城を破却したからという。元和元（一六一五）年から少くとも數年はかかつたと思われる。全町の移転は大事業であった故、真田の臣、出浦対馬守幸久は計画遂行の責任者として、成功を祈念しつゝ良（鬼門）のこの地に鬼門除けとして植えたものという。（『原町誌』より）

しかし現在は排気ガス等で老化が進み、その保存に当局は神経を使っているようである。

旧道は原町の市街地を通り、その中程に顯徳寺<sup>(1)</sup>がある。京都仁和寺の末寺で真言宗御室派に属し、金剛界大日如来を本尊としている。創始は元和年間で、墓地にある最も古い墓は原町移転の責任者、出浦対馬守の妻の墓といわれ、元和三（一六一七）年である。大門前の「庚申塔」と「大青面金剛塔」は町行く人の目をひくが、それぞれ、町田延陵・角田無幻書と伝えられる。旧道はここから一直線で稻荷神社（大鷲神社）ぶつかり、直角に曲がって市街地に出るが、江戸時代町中を流れていた水路の名残りが見られる。これから三百メートルで善導寺<sup>(2)</sup>の山門前に到達する。淨土宗普光山善導寺の創始は室町時代、貞治年間で、二度目の移転（元和年間）で現在地になったといふ。境内に岩櫃城主吾妻基國の堂と鐘樓、天明三年浅間押し櫻災者の供養塔などがある。寺宝として恵心僧都筆と伝えられる米切圖、二世円光上人の母が榛名湖に入水して蛇となつた伝説に係わる蛇のうろこ三枚、そして古備前焼の香炉。特に古備前焼の猿の香炉は、寺に異変のある時は、奇声を発して鳴くといわれている。これは、岩櫃城が敵の軍勢に攻められた時、善導寺の住僧が岩櫃城主吾妻太郎を裏切つたので落城した、そのため怨靈が崇つて本堂ができるがと燒失するといわれている。現に善導寺には本堂がない。ここから百メートルで信号になるが、左折すると江戸初期原町農民が棒名山へ株刈りに行くための橋が現在地より下流にあった。元禄の頃木橋の



長須橋（旧）岩場

規模にしたという。これを受けた原町発電所水路の上が岩櫃城の城下、平川戸宿があつた所である。道はそのまま直進して霧沢橋の手前から国道と分かれ唐沢集落へ入つて行く。

集落東端から簡易舗装の細い道が榛名神社鳥居を過ぎて辻の三差路まで続く。これを左折して、吾妻線を横断した西の橋場から発掘されたハート形土偶は日本を代表するものになつてゐる。さうに国道を横断すると吾妻川に公儀橋として有名な長須橋（万年橋）跡が、現在の橋の少し下流に岩盤と共に残つてゐる。長須橋は三国裏街道の要所として重要であるが、大戸、大笛の信州街道に合流していく点から、近世初頭までこれまた大変重要な位置を占めてゐる。

ここにある大運寺<sup>(3)</sup>は、淨土宗鎮西派に属し興国年間（一三四〇～一三四六）に創始されたものである。二度移転した後、現在地鳴瀬に落ちついたものである。この寺と幕末上州の分限者加部安左衛門との関係は深く、多くの堂宇が加部安の寄進により建立・莊嚴化した。今も歴代加部家の墓地があり、その分限者ぶりがしのばれる。本尊は吾妻町指定の文化財となつてゐる木彫座像の宝冠の阿弥陀仏である。この他、山門前のだれ桜と共に加部家黄金時代二代の碑は有名である。

元の道にもどる。道陸神岬越のさなだ道は辻勘前の三差路を西進し、その先の分岐点を直進していくか、分岐点を右折すると古谷集落を経て越々たる

岩櫃山に至る。この山腹にあった岩櫃城は戦国時代、武田信玄をして駿河の久能、甲斐の郡内（岩殿）と並んで三名城といわしめ、勇名をはせた。武田領時代、この岩櫃城下平川戸を中心として各支城にいたる道路が敷かれたが、軍事上、すべて尾根や山腹を通っていた。江戸時代初期、天下が安定していくのに伴い、不便さを感じ低地におりて行きたのである。

その他、岩櫃山には弥生時代の廃の集落跡があった所としても有名である。古谷への道と分かれた道は旧道に入つて行くにつれて大きな岩の所に出る。「鬼岩」である。円心坊こと野口円心により、旧鶴原村と旧矢倉村境の岩櫃山を背に万年橋跡



岩倉鳥頭神社



岩櫃山を背に万年橋跡

身で応永寺で修業したのである。彼は川原畠村の出で、この難所が開削されたのである。

この難所が開削されれた後、諸国を行脚し

れたのである。

この難所が開削されれた後、現在地に移されたといわれている檜の寄木造で、台座から約一・七

五メートルもある大きなものである。その三面六臂の憤怒の

形相は見る者を威圧している。

行沢を過ぎた道は国道を進み、再び長い旧道に入つて行く。

応永寺の山門がおおいかぶさるようにとび込んでくる。曹洞

宗福聚山応永寺の歴史は古い。創始については応永年間（一

三九四～一四二七）という説もあるが不詳である。その後、

宋枯盛衰、伽藍も炎上をくりかえし、山門は天明三（一七八

三）年、本堂その他の寛政四（一七九三）年完成をみたとい

う。応永寺といえば中庭の傘松も有名で、樹令三百五十年以

上といわれる五葉松が大きく枝を広げている。又、岩島の名

産の麻栽培は応永寺の行脚僧が導入したのかも知れない。

（岩島村誌）小林又瑞氏）山門前にも供養塔その他石仏が見

られる。



行政観音堂

その間得た淨財で交通の難所、これから通過する道陸神峠、久森峠等を次々に開削した。今、彼の墓は矢倉駅前の民家の間に眠っている。文化三（一八〇六）年七十五歳であった。

ここを過ぎて国道に出た所が矢倉鳥頭神社で、旧岩島村の總鎮守としての位置を保つたという。ユニークなのは参道の大小の力石である。又、目を引くのは国道に面した神代杉である。日本武尊が大和東征の折手植した杉と言ひ伝えられている。

道はこの後、国道とはなれ、合流を繰り返した後、行沢の旧道を進む。吾妻川の段丘上から対岸、唐堀鳥頭神社が見渡せる。この行沢には真田伊賀守時代の水牢跡<sup>(1)</sup>が多目的集会所の庭園にあり、それと県指定の文化財になつた木造馬頭観音<sup>(2)</sup>がある。この観音は吾妻線路北ぎわにあり、鎌倉時代の作と推定されている。大永七（一五六七）年に中之条海蔵寺で開眼供養がおこなわれた後、現在地に移されたといわれている檜の寄木造で、台座から約一・七

五メートルもある大きなものである。その三面六臂の憤怒の形相は見る者を威圧している。

行沢を過ぎた道は国道を進み、再び長い旧道に入つて行く。

応永寺の山門がおおいかぶさるようにとび込んでくる。曹洞宗福聚山応永寺の歴史は古い。創始については応永年間（一三九四～一四二七）という説もあるが不詳である。その後、宋枯盛衰、伽藍も炎上をくりかえし、山門は天明三（一七八

三）年、本堂その他の寛政四（一七九三）年完成をみたとい

う。応永寺といえば中庭の傘松も有名で、樹令三百五十年以

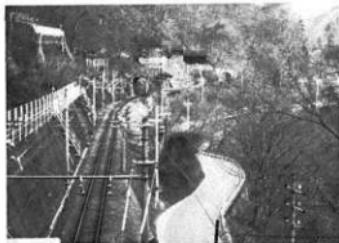
上といわれる五葉松が大きく枝を広げている。又、岩島の名

産の麻栽培は応永寺の行脚僧が導入したのかも知れない。

（岩島村誌）小林又瑞氏）山門前にも供養塔その他石仏が見

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

応永寺を過ぎて寺沢の小橋を渡つていくと右手に菅原神社<sup>(1)</sup>参道がある。この辺りから左手下に岩島駅や国道が見える。右手の姫山の高台には姫山石組がまだ跡がある。昭和三十二年の発見で奈良時代以前の小規模な住宅用のへつついの類として有名である。構造は石を組んで焚口から戸外まで煙出しをつくり、すきまは粘土でふさぎ、かまどに土器器がかけられたという。旧道は道幅二メートル位で漆貝戸を経て松谷雁ヶ沢まで進む。深く刻まれた河床に架橋された橋を渡ると山裾と吾妻線の所を通つていく。雁ヶ沢橋は天明三（一七八三）年の浅間押して流失後、松尾・横谷両村の自音講機にさせられてしまう。それ以前は公儀橋であった。公儀橋の時は高間御林で用材を伐り、人足は岩下、矢倉、郷原、三島、横谷、川原畠の六ヵ村から出で掛替入用費は林、長野原、坪井、塔場木、立石、羽根尾、古森を人足村に加えて計十三ヵ村でうけもつていた。この事からもこの橋が難所であり、又、さなだ道、草津道として利用されていたことがわかる。



道陸神峠 (やえん茶屋の上)



やえん茶屋～熊の茶屋 (道陸神峠旧道)

松谷上組の道は旅人がこの街道最大の難所を控えて気持ちをふるいたたせた道でもある。ここから国道に出た道をそのまま進めば道陸神峠の難所も一息に川原湯、長野原に到達するが、明治二十六年新道開通まではこの崖上を通過したのである。吾妻渓谷最初のトンネルの所から崖上を通じはじめる。やえん茶屋と熊の茶屋の間は最大難所である。先の矢倉境の鬼岩の開削者、野口円心が開削に手をそめたのである。幕末になって弘化三（一八四六）年岩下村の片貝清兵衛と松尾村の竹瀬潤三郎が中心になって寄附金を出して開削した磨崖碑<sup>(2)</sup>があつたようだが見つからない。その後、元治元（一八六四）年大改修が行われ、多人数がこの工事に名を連ねている。の中には旧岩島地方の麻を賣いに来る越中、信州の麻賣い商人の名も連っている。

八ツ場の所から一たんおりていた道は再び崖を登つていく。しかし登り口は国道の壁のためわからぬ。上に登るとほんんど人が通つた跡のない道が確認でき三平に通じている。三平の三つ堂<sup>(3)</sup>は国道から見ると「次は草津温泉のりかえ駅」の看板の見える右上にある。長野原の雲林寺に属する堂宇で本尊は閻魔大王。三原三十四番靈場の三十一番札所として知られている。この辺の道は旧状をよく残している。景色も吾妻川をはじめ川原湯温泉等を見おろして素晴らしい。やがて川原畠の民家に下つてきた道は諏訪神社<sup>(4)</sup>に至る。この神社の宝筐印塔は、文政十二（一八二九）年川原畠惣村中の人々により供養のために建立された。石工は信州高遠の人である。（長野原町指定文化財）旧道はここよりまた山手に入つて行く。臥龍岩、昇龍岩<sup>(5)</sup>の上を通つて久森森につく。幹には開創記念碑<sup>(6)</sup>があり、一・六メートルの自然石に「助力村六十八余」と刻まれている。冷風に吹かれて時をおおり、立馬から林に上つていくと道するべがある。「右ハぬまた、はるな」「左ハやま」で草津帰りや信州からの旅人に教えている。坂をのぼった右側に林の御塚がある。林の浦野家の過去帳に「大乘院村信法印、寛永二（一六二五年三月御塚の神也）」とある。大乘院は修驗道山伏が林村に定住して加持祈福を行いつつ村の指導層として

活躍した拠点であつて、大字林、浦野家が本院である。三百六十年も前の円墳状の墓の周囲には庚申塔や馬頭観音、廻国供養塔など実に多くの石仏群があり年輪の重みを伝えている。又、御塚と共に町指定の文化財となつていて「いたやかえで」といわれる巨木が塚をおおっている。ここを過ぎて旧道は自動車がすりかえ出来ない幅の簡易舗装を西に進み宮原の王城山神社<sup>(1)</sup>の前に出る。この辺りまで、道の北、南に集落があり戸数も多い。王城山神社で有名なものは境内の神木の老杉と奥宮である。老杉は神杉と呼ばれ、高さ二メートル、太さ目通り四・五五メートルで樹令四百年ともいわれている。奥宮は村里を四キロ余離れた王城山の山中<sup>(2)</sup>にあり、歴史は古い。日本武尊東征、

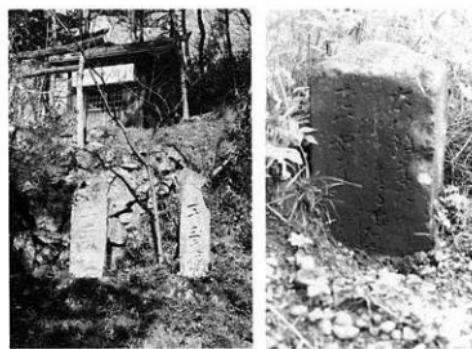
林、道しるべ

凱旋の途次ここに駐屯されたので、山名を王城山と名づけたという。

そして山上に石祠を建

て、尊及び諏訪大明神を奉斎したのが始まりであるという。(長野原町誌)  
この神社のすぐ西に自然石三角柱(上部側面が欠けている)の道しるべがある。「右ハヤマミチ」「左ゼンカウジ、くさつ」と刻まれており伊香保や沼田方面から善光寺や草津に行く旅人の指針になつていたことを物語つている。ここから中標への道は五六年前に比べて見ちがえるよう良くなつてある。本尊が千手観音・地蔵尊の中標觀音堂<sup>(3)</sup>の境内に、移動された道するべがある。子安觀音像の台石に「右たき沢」とある。その滝沢を通つて旧道は山中に入つて行く。滝沢には觀音堂跡<sup>(4)</sup>がある。その入口に文化四(一八〇七)年廻国供養塔<sup>(5)</sup>があり台石に「くさつ温泉、志なのみち」と刻まれている。滝沢觀音堂跡には現在多くの石仏がおさめられ、洞窟と相まって雪場という感じ。この本尊は大日如来で、堂宇は現存しないが、もとはこのさなだ・草津道沿いにあつた。街道から二十メートル位奥まつた現在地洞窟の上段部には本尊がまつられ、対岸の岩盤上や下段にも馬頭観音などの石仏が多く並んでいる。

これから尾坂への道はきつい。危険な箇所といつより距離が長いのできついのである。しかし景色の点は吾妻川対岸を望めて気持ちよい。吾妻溪谷に入つてからここまで、一度、現在の国道に降りたが、あとは全部崖や山腹、台地上である。距離はふえても実に悠然たる気分に満れる場所が多い。命がけで通る嶮阻な所も過ぎれば一眼の清涼剤か。



草木原の笠間稻荷



滝沢観音入口の廻国供養塔の台石

このから尾坂への道はきつい。危険な箇所といつより距離が長いのできついのである。しかし景色の点は吾妻川対岸を望めて気持ちよい。吾妻溪谷に入つてからここまで、一度、現在の国道に降りたが、あとは全部崖や山腹、台地上である。距離はふえても実に悠然たる気分に満れる場所が多い。命がけで通る嶮阻な所も過ぎれば一眼の清涼剤か。

尾坂は台地上にある。山を下つてからはゆつたりと長野原合同庁舎前まで続いている。左下に長野原駅が見えはじめる辺りから対岸を見ると、須賀尾峰を下つて、小倉から琴橋に向かう道が帶一条に確認できる。合向所舍前から広い道を線路を左下に見ながらゆき、百五十メートル位の地点でこれを横切り国道二九二号線も横切ると須川(白砂川)である。須川にかかる須川橋は琴橋と

III 吾妻の諸街道の現状と文化財

No.	名 称	年 号	備 考
101	馬頭観音	安永乙未 (四年)	他二基 文化十三年
100	善導寺	元和年間	境内石段下に地蔵尊の道しるべがあり、右側に「入山、赤岩」左側に「大さき」とあり、右に行けば十二坂を越して六合の吹久保経由、赤岩さらに入山に行道を、左に行けば羽根尾、大前経由の大笛即ち信濃への道を教えてゐるのである。
99	顯徳寺	創始	室町時代
98	田中道祖神	元和年間	元和年間創始
97	本殿 拝殿	宝曆六年	舟後光
96	椎名神社	元和年間	舟後光・道祖神(明和二年)

3 中之条町から長野原町へ

この須川橋を渡つて崖を登つてくれば長野原市街地。諏訪神社にてくる。長野原諏訪神社の由緒は不詳だが、永禄六(一五六三)年九月の長野原合戦の中に諏訪明神のことが記されているので、創始の古いことがうかがえる。長野原の役場東に雲林寺がある。現在地は二度の移転後、永禄二(一五五九)年に羽根尾長門守、海野幸光によつて再建され、落ちついたものである。この境内石段下に地蔵尊の道しるべがあり、右側に「入山、赤岩」左側に「大さき」とあり、右に行けば十二坂を越して六合の吹久保経由、赤岩さらに入山に行道を、左に行けば羽根尾、大前経由の大笛即ち信濃への道を教えてゐるのである。

共に長野原両橋で長野原に入る最後の重要な関門となつてゐた。それ故、琴橋と共に御普請所となつてゐた。架替えの間隔は資料から、寛保二(一七四二)年について宝曆八(一七五八)年、安永四(一七七五)年、天明三(一七八三年)、寛政二(一七九〇)年、文化四(一八〇七年)そして文政八(一八二五年)年ということになる。これからみると近いところで、七八八年長くて十八年目に架替えられている。木造の刎橋のため台風等の出水時に搖らひだり流されたりで寿命も短かつたのである。

この須川橋を渡つて崖を登つてくれば長野原市街地。諏訪神社にてくる。

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102
久森峠開削記念碑	臥龍岩・昇龍岩	川原畠諏訪神社	川原畠三つ堂	松谷神社	磨崖碑	松下道祖神	菅原神社	姫山石組かまど	塗戸戸道祖神	庵水寺	大運寺	岩櫃城	仙人窟	太田神社	延宝二年 再興	本殿 神明造 拝殿 塔現造 伝、日本武尊宿泊所 觀世音及十八羅漢 加部家善提寺 弁天堂 枝垂桜		
江戸初期	江戸初期	弘化三年	元治元年	明和二年	元文五年	寛保三年	建永年間	大和時代	嘉吉元年	室町	鎌倉時代	元文四年	元文五年	元文四年	元文四年	元文四年	太田神社	
刻	刻	祭神素盞鳴命	舟後光、とつくりをもつ、四国西国	舟後光、とつくりをもつ、四国西国	舟後光、とつくりをもつ、四国西国	舟後光、とつくりをもつ、四国西国	京都北野天満宮を勧請	真田伊賀守	武田氏、真田氏	再興	神代杉、力石、本殿	真田伊賀守	榎木、寄木造	榎木、寄木造	神代杉、力石、本殿	真田伊賀守	再興	
「助力村六十八余の文字」	「助力村六十八余の文字」	養蚕の神様で荒神様といつ。	岩下、松尾、横谷村、近郷の村多數、	信州麻商人	秋父坂東百八十八處供養塔(宝曆十一年)	祭神素盞鳴命	祭神素盞鳴命	昭和三十二年発見	吾妻太郎	再興	舟後光、	舟後光、	舟後光、	舟後光、	舟後光、	舟後光、	舟後光、	
本殿中宮鶴の彫刻及び舟井の竜の彫	本殿中宮鶴の彫刻及び舟井の竜の彫	あり	本像魔除大王(明和二年)、石仏多數	あり	宝篋印塔(文政十二)	あり	あり	あり	あり	再興	手	手	手	手	手	手	手	再興

131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121
雲林寺	長野原町供養塔	尾坂地蔵尊	馬頭観音	滝沢、観音堂	日本廻國供養塔	神代杉、奥宮	林宮原道しるべ	王城山神社	御塚	林勝沼道しるべ
創建不詳	創建不詳	石仏多數あり	「右ハやまみち」左せんかうじくさ 二つ	「右ハやまみち」左せんかうじくさ 二つ	創建不詳	大津院	道	寛永二年	御塚	林勝沼道しるべ
文化四年	明和五年	文化四年	明和五年	文化四年	弘長三年	石立像	大日如来、石仏多數あり	百數十年前の建立と推定	大津院	道
創建不詳	他一基	本殿、切妻造。拝殿	他一基	創建不詳	祖神	志なみち	「くさつ温泉	大津の塔	大津院	道
宝鏡印塔（寛政十一）、地蔵その他	曹洞宗、本尊聖観如来	般若塔（弘長三年）	立石像	大日如来、石仏多數あり	曹洞宗、本尊聖観如来	志なみち	大津の塔	大津の塔	大津院	道

#### 4 長野原町から羽根尾宿へ

雲林寺境内の地蔵の左側の指示に従つて市街地を西に進み、やがて電報電話局前から山手に入していく。最初のカーブを南下した所に三原三十四番札所、第一番の作道観音堂がある。本尊は正觀世音で縫隙を道路を往来する人馬の安泰を祈願するために設けられたものである。祭典日には農耕馬、荷付馬、荷馬車等、とにかく馬匹の数が多く国道上の危険なこのお堂は腰わつたが、足を踏みはずして時々馬が落ちたという。本尊を八年前位に所属の雲林寺に移して祭典している。(往駕の話)

作道観音を過ぎた旧道は再び国道に合流し中央小学校が左下に見える。この中央小学校に保管されている瓦塔と板碑はともに明治四十三年、小学校建

築地ならし中に発掘されたものである。「長野原町誌」によれば、瓦塔は奈良時代から平安時代につくられたものらしく粘土で塔をつくり、これを焼いて木造の塔のかわりに間にあわせた仏教文化の遺物である。板碑は高さ八四センチ、幅三〇センチ緑泥片岩製で、頭部の一部が欠損している。板碑は、死者を葬った供養塔婆で、碑面にはキリーケ(阿弥陀)、サ(觀音菩薩)、サク(勢至菩薩)の三像を示す梵字と、延文二(一三五七)年五月二日の年紀がある。

与喜屋方面を見渡しながら国道を進み、国道とはなれて旧道は坪井に入つていく。坪井で吹久保への道と合流した少し南西に町指定の文化財の大津のひいらぎがある。樹令約二百年、樹高約八メートル、根廻り二・五五メートルで浅見家旧家敷跡にあるものである。(長野原町誌)。このひいらぎへの入口には石仏、奥申塔がある。

ここを北上した所、三階建てのアパート前を左折して南西国道方面に進み、国道には出でて旧道を大津の草津有料道路信号の所に進む。そこに大津神明宮<sup>18</sup>が鎮座している。

長野原町大津は、中之条より来ると、志賀・草津方面と上田・駿河沢方面との分岐点である。

昔は、今以上にこの地域が交通の要衝であった。長野原で、須賀尾越え道と沼田—真田道が合流し、この大津でまた分岐する。また、狩宿通り草津道が同じように合流し分岐している。ここには、いく筋もの街道が集まっていたのである。

大津という地名は、全国各地にあるが、その中で近江国(滋賀県)琵琶湖南西岸の大津市は有名である。これは、古代より発展した地だが、近世でも湖上交通及び東海道・中山道など諸街道の交通の要衝であった。また、近くに草津という土地がある。

長野原大津は、明治八(一八七五)年に坪井・勘場木・立石の三村を合併



羽根尾宿



羽根尾駅前

してつけた名で近江国

大津を意識してつけた

名ではないだろうか。

現在の大津交差点よ

り草木原集落へ坂を下

る小道が、旧道である。

この坂の途中、右側

に、笠間稻荷神社があ

る。十二山と呼ぶ丘の

上に鎮座し、安政二（一八五五）年

の石燈籠および、道ばたに二十三夜

塔・双体道祖神がある。

旧道は、集落はずれの墓地前で右

折し遼沢川を渡り諏訪神社裏へ向か

う。この間、わずか道筋は残つてい

るが廃道である。

羽根尾諏訪神社は、東京電力羽根

尾発電所わきに杉の森に囲まれてあ

り、ここより羽根尾宿が望できる。

鳥居横には天保十三（一八四二）年

と年代不明の双体道祖神が列び、吾

妻線縄路さわには、寛政八（一七九六）

年の念佛供養道しるべが「右 沼田

道 左 草津道」を示している。神社前で、沼田一真田道と草津道が分岐し

ていたのである。

旧道は、神社前より道筋はないが吾妻線南側を通り羽根尾宿に入る。

宿は、草津湯治へ向かう人々の休憩地としてにぎわった宿の一つであろう。

現在、羽根尾駅前の交差点わきに、年代不明の「右 せんこうじ 左 え

ど 道」と刻まれた道しるべがあり、この小道が、狩宿通り草津道であった。

集落景観を見ると、道中央の水路はなくなっているものの屋敷割は短冊型

に残り、せがい作りの民家も数多く残り、また、北側の民家庭には天保一（一八四〇）年の馬頭觀世音<sup>(1)</sup>が見られ、全体的に宿場的景観が残っている。

この羽根尾は、かつて羽尾と書き、戦国時代、羽尾氏が城を構え勢力を振つていた。

城跡は、宿北方の標高七五〇メートル程の城峯山にあり、現在は雜木林である。

羽尾氏は、嬬恋村の鎌原氏・西郷氏と同様、海野一族であつたが、日ごろから不和の鎌原氏に永禄六（一五六三）年十一月、攻め込まれ、領地をすて大戸へ逃げた。羽尾は、鎌原氏に味方した湯本善太夫が領有した。

その後、羽尾氏は、永禄九（一五六六）年真田幸隆より岩櫃城攻略時の戦功を認められ、吾妻郡全城を支配する岩櫃城代に任せられている。ところが、天正九（一五八一）年、幸隆の子昌幸に逆心だと誤解され、岩櫃城に攻め込まれ、羽尾一族は滅亡した。

この時、羽尾幸全入道の弟海野幸光（長門守）は七十五歳で自害し、その弟輝幸（能登守）は七十二歳であつたという。

長門守の墓は、現在、羽根尾駅裏の山麓にある。この宝篋印塔は、葬つた墓が水害で流されたため、元文三（一七三八）年に再建したものである。

また、この墓の西方には寺跡がみられるが、これは長野原雲林寺の末寺宗泉寺<sup>(2)</sup>であった。

天正三（一五七五年）、長門守時代に菩提寺として創建されたものである。今は、寺の石垣下に、文政五（一八二二）年の庚申塔などがみられる。

## 4 長野原町から羽根尾宿へ

No	名 称	年 号	備 考
132	作道觀音堂	文政七年 再 建	霧林寺に属す。現在、本尊は霧林寺にある。
133	瓦 塔	平安時代 奈 良 5 長野原	中央小学校保質、明治四十三年発掘
134	大津のひいらぎ	延文 二年	中央小学校保管
135	板 碑	笠間稻荷神社	供養塔
136	大津のひいらぎ	羽根尾諏訪神社	浅見家旧屋敷跡にある
137	大津のひいらぎ	神明神社	念佛供養道しるべ
138	大津のひいらぎ	馬頭観世音	・双体道祖神（年代不明）
139	大津のひいらぎ	道道しるべ	・石燈籠（安政二（一八五五）年）
140	大津のひいらぎ	海老長門守の墓	・双体道祖神（天保十三年（一八四二）年）
141	大津のひいらぎ	庚申塔	・双体道祖神（七九六年）
142	大津のひいらぎ	文政 五年	・右 沼田道 左 草津道
			・右 せんこうじ 左 えど道
			宝筐印塔

に入水した妻の弟橘姫をしのんで「吾姫者耶」と三嘆したという故事にちなみつけられたものという。

赤川を渡つた旧道は、滝ノ上へ上の道となる。現在の西吾妻衛生センター

から上る村道沿いには、吾妻山頂に祭る白山大権現の上州側里宮といわれる今宮権現跡がある。

旧道は、村道と合流して滝ノ上の高原状の地帯を通り、集落手前で半出来方面へ下り、国道と合流する。この道は、現在でも村人が利用している。国道をわずか通り、半出来でオツムギ川右岸の小道を通つて東平という水田地域へ向かう。

東平には繩文住居跡があり、土器類も多数出土されている。現在でもぬく

い沢から清水が湧出しており、段丘上のこの地は居住に適していたのである。また、この近くには、室町期の宝筐印塔がある。

東平より旧道は、今井川左岸を通り、今井集落内の觀音堂に出るが、一部、今井川を渡る所で道筋がなくなっている。

この道の途中、吾妻川の対岸、袋倉方面を望むと、川がU字に急カーブし

突出した絶壁が見える。この上が廣城で、源頼朝が、三原野狩りの際、狩

屋を設けた跡と伝えられ戦国期に入つてからは、鎌原城の支城として鎌原城

から赤羽根台、鷹城、羽尾城へと吾妻川を挟んで烽火台の役または見張台

の役を果していただようである。（『姫恋村誌』より）

旧道は、今井觀音堂前より、西方へ諏訪神社前の村道を通り、滝ノ沢川が

吾妻川に落ちる瀬戸の滝（五〇メートル程の瀑布）の上を通りて三原湯宿へと向かう。この間の一部は廻道である。

現在、三原より県道を湯宿へ向かって上つて来ると、万座有料道路と分岐し、直線道路となる。この左に煙が見えるが、ここに今井からの旧道は出てきて、この県道さらに万座有料道路を横断し、上の山の集落に入る小道となりをさぐると、日本武尊が、東征の帰途、碓氷坂（鳥居峠）に立ち、相模灘

村との境を流れる赤川である。

吾妻郡姫恋村とは、なかなか味のある名前である。「姫恋村誌」より名の起りをさぐると、日本武尊が、東征の帰途、碓氷坂（鳥居峠）に立ち、相模灘

## 5 羽根尾宿から大笹宿へ

羽根尾よりの旧道は、国道一四四号となり一キロ程進むと、長野原町と姫恋村との境を流れる赤川である。

吾妻郡姫恋村とは、なかなか味のある名前である。「姫恋村誌」より名の起りをさぐると、日本武尊が、東征の帰途、碓氷坂（鳥居峠）に立ち、相模灘

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

この仮坂の旧道は、道筋がよく残っている。また、仮坂といわれるだけあり、この急傾斜地に、享保期の供養塔や文化三（一八〇六）年の馬頭観世音などがみられ、空沢の橋のたもとに、宝永七（一七〇〇）年の庚申供養塔、文政元（一八一八）年の馬頭観世音がある。以前、仮坂には、「右 草津様名道 左山道」の道しるべがあつたそうだが、この林の中にころがっていると古者は言う。

空沢の橋より旧道は、県道となり、ゆるやかに坂を下り、S字カーブする所に、嘉永六（一八五三）年の馬頭観世音道しるべがあり、表に「右ハ西窪村左ハ中居村」と刻まれている。この道しるべは、これより先の村立東小学校入口にあつたものではないだろうか。また、ここには、天保十五（一八四四）年、寛政四（一七九二）年の馬頭観世音や文化五（一八〇八）年の庚申塔がある。

この仮坂の旧道は、道筋がよく残っている。また、仮坂といわれるだけあり、この急傾斜地に、享保期の供養塔や文化三（一八〇六）年の馬頭観世音などがみられ、空沢の橋のたもとに、宝永七（一七〇〇）年の庚申供養塔、文政元（一八一八）年の馬頭観世音がある。以前、仮坂には、「右 草津様名道 左山道」の道しるべがあつたそうだが、この林の中にころがっていると古者は言う。

この仮坂の旧道は、道筋がよく残っている。また、仮坂といわれるだけあり、この急傾斜地に、享保期の供養塔や文化三（一八〇六）年の馬頭観世音などがみられ、空沢の橋のたもとに、宝永七（一七〇〇）年の庚申供養塔、文政元（一八一八）年の馬頭観世音がある。以前、仮坂には、「右 草津様名道 左山道」の道しるべがあつたそうだが、この林の中にころがっていると古者は言う。

この仮坂の旧道は、道筋がよく残っている。また、仮坂といわれるだけあり、この急傾斜地に、享保期の供養塔や文化三（一八〇六）年の馬頭観世音などがみられ、空沢の橋のたもとに、宝永七（一七〇〇）年の庚申供養塔、文政元（一八一八）年の馬頭観世音がある。以前、仮坂には、「右 草津様名道 左山道」の道しるべがあつたそうだが、この林の中にころがっていると古者は言う。



三原（羽根尾）馬頭尊道しるべ

津道と分岐している。

上の山一帯は、高原

状で、東に岩井堂と呼ぶところがあり、ここ

の煙の中の供養塚から

明治の末、享禄三（一五三〇）年の経筒が発見された。これは、石

筒に金属製の円筒を納

めたもので、現在、長野原町庵桑小宿の竜燈山常林寺に保管されている。

また、上の山の西には三原神社<sup>(3)</sup>が杉林の中にある。境内には、寛政年間・

文政年間の石燈籠をはじめ、年代不明の双体道祖神がある。

旧道は、上の山より仮坂と呼ぶ急坂を下り空沢にかかる県道の橋のたもとに出る。

この仮坂の旧道は、道筋がよく残っている。また、仮坂といわれるだけあり、この急傾斜地に、享保期の供養塔や文化三（一八〇六）年の馬頭観世音などがみられ、空沢の橋のたもとに、宝永七（一七〇〇）年の庚申供養塔、文政元（一八一八）年の馬頭観世音がある。以前、仮坂には、「右 草津様名道 左山道」の道しるべがあつたそうだが、この林の中にころがっていると古者は言う。

この石仏のある所より下の人家に入つて行くような細い道があるが、これが、後述する鎌通りの一筋である。

県道をこれより進むと三差路があり、村立東小学校入口の道がある。これが西窪へ向かう旧道である。

この三差路右側を見ると、水くみ場がありその上に石殿と石碑がある。石碑には、清淨法水<sup>(4)</sup>の梵字で描かれている。清淨法水は、この水くみ場、実は

思い川の泉である。そして、この小さな川、思い川が、赤羽根村（左岸）と中居村（右岸）との境であった。

現在、ここを三原と呼ぶが、この地名は、明治七（一八七四）年に赤羽根・中居兩村を合併した時につけた名である。しかし、三原という地名は、かな

り古くから使われ、その地域範囲も広く、嫗恋村はもとより、長野原町、草津町、六合村など、西吾妻全域をさしていたようである。

建久五（一一九四）年の下屋氏文書によると、「上野国くるまの郡吾妻庄三



現在の三原（表面の山一仮坂）



中居～西窪間の沼田～真田道

原村遊野下屋しゅうけん守護……略」とあり、吾妻庄三原村をみるとことができる。また、吾妻庄にある「治二（一七四〇）年の文書では、「上野國三原庄」と記している。

いずれにしても三原という地名はすでに使われていたことになる。

これより先、平安末期に信濃国海野氏の一族である下屋持監幸房が、ここに移り住み、居館を構え、三原庄の莊園領主としてこの一帯を開拓し、勢力をふるっていたようである。下屋一族の鎌原氏、その一族の赤羽氏、今井氏、西窪氏などは、その勢力下にあつたことを下屋文書は示している。〔編

窓門跡（参照）

この下屋持監屋敷は、旧道を東小学校方面へ進み、天神沢先にあり、乱づみの石垣が今も残っている。現在の下屋当主正一宅からは、最近、明治十五（一八八二）年に起きた草津白根山の大噴火の模様をした絵図や与謝蕪村の直筆と伝わる十八枚の絵が発見、発表された。

この中居村は、中居重兵衛の生まれた地でもある。重兵衛は、文政三（一八二〇）年に生れ、二十歳で江戸に上り、後に、白根山産出の硫黄を原料として優れた火薬を製造販売し、安政六（一八五九）年には、横浜で生糸商を営み、上州生糸を海外に輸出した。しかし、翌年、桜田門事件に水戸烈士の黒幕となつて活躍し、文久元（一八六一）年、江戸で四歳の生涯をとどめている。重兵衛の墓は、東小学校南西の丘の上にあり、県指定史跡となつている。

旧道は、天神沢で鎌原通りと分岐し、東小学校前を通り、吾妻川左岸の崖上を通り西窪へと向かう。この道は、最近、整備された村道だが、昭和五七年夏の台風でまた荒れてしまった。

門貝からの村道と合流した旧道は、万座川を渡り、村営アパート、給食センター横の小道を通って国道一四四号に出る。

東京電力西窪発電所の標高八七〇メートルの所には、西窪城跡があり、吾

妻川対岸、吾妻線西窪トンネル上の標高八八〇メートルには鎌原城跡がある。

旧道は、西窪集落内の国道をすすみ、右側に年代不明のかなり廢滅した双体道祖神<sup>(3)</sup>がある所より、裏山へ登る道となり、西窪の畠へと進む。

こより、吾妻川左岸の河岸段丘上を通り大前の旧役場前へ出るが、道筋はほとんど残っていない。

旧役場裏の石段を登ったところに、大前（諏訪）神社<sup>(4)</sup>がある。境内には、寛政七（一七九五）年の双体道祖神等がある。また、双体道祖神は、国道沿いにも、正徳四（一七一四）年のものがある。

旧道は、大前集落内の国道を通り、左側の駐在所より吾妻川河原へ下る道となる。

下る途中には、新しい大正二（一九一三）年の馬頭観世音や地蔵尊があり、最近まで道が使われていたことを物語っている。

しかし、現在は、河原の畠に通じる道で、対岸に渡る付近より道はない。とにかく対岸は、絶壁で、吾妻川と大堀沢<sup>(5)</sup>が合流する付近でないと道筋をたどることはできない。

旧道は、その後、大堀沢右岸を通り（ここは道筋がはつきり残っている）、沢を渡つて大笹神社横を通り、ふたたび国道に合流して大笹宿に入る。

大笹宿では、沓掛からの大笹通りが合流しており、その地点に、「沓掛海道 沼田草津道」の道しるべが残っている。

なお、大笹神社より鳥居前までの街道の現状と文化財については、歴史の

道調査報告書第五集「信州街道」を参照されたい。

## 5 羽根尾宿から大笹宿へ

No	名 称	年 号	備 考
10	今宮權現跡		百番供養塔（安永八（一七七九）） 馬頭観世音 他 道ばたに馬頭観世音あり



ば仕入品は、白米、餅米、酒類、乾物類、茶、調味料、わらじ、大小豆、卵、野菜等で、須賀尾、装倉、横壁からあげているのがわかる。これらの諸仕入品からみて、峠を往来する旅人に酒肴、膳飯を供し、乾魚、山菜類をその肴、副食としていたものだらう。又、餅米はうすで揚いて大福餅にでもして販売したのではないだらうか。わらじについては峠の道が特に長野原側ではきつく、長旅をしてきた者にとって損耗も激しく、ここで履き替えたり、予備に求めていったのではないかだらうか。人馬の往来は五月から漸次増加し、六月から八月に一日売上五貫文台の日が十一日もある。これからも、標高千メートルを越す峠では夏場が商売の勝負であったようである。当主金子一治郎氏に聞いた話では冬場や悪天候の時は閉店し、水などの重いものは勾配の緩やかな矢竹からあげたといふ。

峠の地蔵尊に送られて坂を下るところ道が大きく迂回している。ここからの景色は素晴らしい長野原はもとより目さす草津方面まで見渡せる。二三カ所県道を突きぬけるとあとは旧道が一路小倉まで続いている。右側を見ると峠よりも高い丸岩の奇峰が見える。戦国時代、ここに山城があり隣の柳沢城の要害城をなしていた。天正年間、相模の北条氏が吾妻郡に侵入しようとした時、湯本、西窓、横谷、鎌原の諸将がこの丸岩城を守って、岩橋、上田間の要路を保持したといふ。(『吾妻郡城史』)見るからに堅固な城跡で、横壁の方向の北面は円筒形の絶壁となつており、ここに登るには南の須賀尾方面から続く縦縫いにしか行けないといふ。

さて、草津への道は小倉沢をわたつて桐屋が見える所で分岐する。ここに道するべがある。「右江戸」「左かわら湯」と、もう一つ廻國供養塔に向じく「右江戸・左川原ゆ」を刻んである。これからもわかるように、草津・長野原から来た旅人に対して左折すると横壁の中村、東を通つて吾妻川の南岸を川原湯へと案内している。ここからすぐの所に桐屋の三体堂がある。本尊は大日如来で間口一間半の草葺の堂宇であり、堂内天井に風安斎為高藤原武啓

の筆になる極彩色花鳥が描かれている。又、古くから安産の祈願所として知られている。道するべはここから二〇メートルばかり下がった所に「右三体堂、左坂上道」を記しているが明治以降のものと思われる。更に横壁の中村には二キロ弱である。ここに横壁御防神社がある。まず目をひくのが享保十九年の大灯籠である。高さ四二メートルもあり、高さといい、形といい、均衡がとれていて美しい。又、本殿の北側に聳えている大塔は樹令約三百年といわれている。横壁中村から東には真っすぐに道が続き二百メートルで左側に宝篋印塔、庚申塔、供養塔などある墓地路傍に至る。

元の桐屋の地点にもどることにする。須賀尾峠を下つて左折して桐屋の前を通過していく。峠の上の茶屋に対し下の茶屋である。明治二十七年まで茶屋をしていたそうである。これからの草津は吾妻川の段丘上を行くが、対岸の尾坂から見ると一条の帶のよう道は並行に、そして階段状に統いでいる。洞沢を過ぎると道はほぼ北に向かい、琴橋に下つていく。琴橋は須川を通過していく。峠の上の茶屋に対し下の茶屋である。明治二十七年まで茶屋をしていたそうである。これからの草津は吾妻川の段丘上を行くが、対岸の尾坂から見ると一条の帶のよう道は並行に、そして階段状に統いでいる。洞沢を過ぎると道はほぼ北に向かい、琴橋に下つていく。琴橋は須川を通過していく。峠の上の茶屋に対し下の茶屋である。明治二十七年まで茶屋をしていたそうである。これからの草津は吾妻川の段丘上を行くが、



尾坂（長野原）から対岸、小倉方面を見る



長野原琴橋（これを渡ると長野原の町へ）

橋と共に長野原両橋といわれ、戦国時代には戦略上重視され、徳川時代に入つても交通上気のぬけない橋となつてゐた。そのため両橋は菅原西部二十九ヶ村の御普請所となり、架橋の時は、全村から仙職、木挽、木材伐採夫、持運人から人足にいたるまで割賦帳により出動をうけ、大がかりな勿橋式の架橋普請が行はれたのである。

現在の水量は少ないが当時は激流岩をかむばかりであったと思われる。両岸の相距は五メートル程度で、その点、架橋地には適してゐたのだろう。ここを渡ると路傍の石仏に見つめられて、須川橋を渡つてきた道と合して、長野原市街地に至る。

## 1 矢竹集落から長野原町へ

No	名 称	年 号	備 考
173	通しるべ 庚申塔	寛政十二年	矢竹「右くさづ道」「左志ん州道」 その他双体道祖神、馬頭観音、三夜
172	道しるべ 題園供養塔	文化十二年	標お堂 「右江戸」「左かわら湯」
171	道しるべ 横聖護防神社	文政四年	神仏西國父坂東四國納経供養塔 右江戸・左川原ゆ 大日如来、馬頭観世音、毘沙門天、
170	創建不詳	安産祈願 「右三体室」「左坂上道」	「左三体室」「左坂上道」 「右三体室」「左坂上道」
169	供養塔、大殿、拜殿	大殿、拜殿、権現造	呼ぶ熊野神社がある。境内には、双体道祖神が三基並んでいる。
168	庚申塔その他の石仏多し。	寛政八年	旧道は、ここよりすぐ草津有料道路に出てまた、二軒屋で、集落に向かう小道に入る。 なお、ここで、狩宿通り草津道と合流する。

現在、保護の為、円型の小屋が作られているからすべわかる。中には、長方形と梢円形の炉跡と一二コの柱穴を見る事ができる。

ここをさらに進むと、旧道より右にはずれた山麓に、地元では枳氏神社と呼ぶ熊野神社がある。境内には、双体道祖神が三基並んでいる。

旧道は、ここよりすぐ草津有料道路に出てまた、二軒屋で、集落に向かう小道に入る。

なお、ここで、狩宿通り草津道と合流する。

小道に入つてまもなく、旧道は小川を渡り三差路となる。

左は、集落内を通り、立石、洞口へと向かう草津道と言われている。右は、すぐ山道となり六合村湯久保へ向かう草津道である。どちらが本通りであったかは明らかでないが、ここでは、湯久保経由の道をあげて説明する。

山道となつた旧道は、未舗装で、開墾された畑へと向かっている。

先に述べた三差路と、この畑には、文化一四（一八一七）年の奉納百番供養塔道しるべ「みぎ くさつ ひだり いまい」と寛政八（一七九六）年の「右 入山 左 草津 道」の道しるべがある。

大津の交差点の石垣上に神明神社がある。この前で旧道は、沼田（真田道）と分岐する。

草津有料道路より石垣上の道が旧道で、すぐ三差路に大きな道祖神（年代

不明）がある。

三差路を右に自家用

車一台が通れる程の舗装された道を進むと勘



勘場木 (長野原) 熊野神社の道祖神

木である。集落に入つてまもなく右側の水田の中に、県指定史跡の勘場木石器時代住居跡がある。

天保三（一八三二）年、立石坂事件という村中大騒動となつた事件が起きた。

このことについて、「長野原町誌」より概要を引用すると、

「八月二五日、水戸藩士外岡竜三郎は、一人の供を従え草津温泉入浴の帰途、この立石坂において、折から荒地小検分御用のため、同朝、長野原の旅

館を出立して草津に向かう幕史旗本御勘定役、山田寿之助、家来御用二人

等一行に出あい、山田が下座触れて上つてきないので外岡は馬から降り道筋に

控えていた。ところが、家来が、どこの御家中か、下座致せと、たずねたの

で、水府家中と答え、下座致し兼ねると突ばねたため、家来は、外岡の笠を

ひつたり、暴行を加えた。このため外岡は、水戸藩面目にかけ死を覚悟し、

相手に抜刀し切り込んだが、後から槍でつっかけ悶死したのである。この事

件で、立石集落は大騒動となり、名主権平が中心に村人と共に外岡の遺骸を

地蔵堂に安置し、交代で見守つた」とある。

なお、現在、外岡竜三郎の墓は、長野原森林寺裏山の墓地にある。

立石坂を下つた旧道は、六合村の村道と合流し、湯久保へ向かう。

湯久保入口で道は二筋に分かれる。

地元の人の話では、共に旧道として利用していたようであり、右側の道は、

集落内より太子・小雨方面へ向かう沼田道と兼ねていたそうである。



伊勢宇橋の碑



泣き燈籠（運動茶屋）

碑がある。

旧道は、この先の酒屋前で、幕坂道と合流する。

二筋の旧道は、集落のはずれで合流し、道は、その先で三差路となる。こ

こには、年代不明の馬頭観世音<sup>(1)</sup>が二基ある。

この三差路を左へ行くと、ふたたび三差路で、これを右に行く。ここより

旧道は、山道となり直進する。

二・五キロ程進むと、高原の林をぬって通る草軽電鉄軌道路にてる。

旧道は、この軌道路にほぼ沿つて草津へと向かう。道の左側は高原状の地

帶だが、右側は水戸沢川とその支流がきざんだ渓谷となつてゐる。

五〇〇メートル程進むと、右側から小川のせせらぎの音が聞こえる。この

小川が流れる林の中に、宝暦三（一七六三）年の地蔵菩薩道しるべ<sup>(2)</sup>がある。

角柱で、正面に地蔵が刻まれ、側面に「右 志ん志う道 左ハ江戸道」とあ

る。

もとからここにあったものとすれば、須賀尾越え道と鎌原通りは、ここで

分岐していたことになるが、その道筋を確認することはできなかつた。

また、この道しるべの地点より二〇メートル程先の小川に、伊勢宇橋の碑<sup>(3)</sup>がある。

これは、天保の頃、江戸浅草花川戸町の油問屋伊勢屋宇兵衛が、草津の山本十右衛門<sup>(4)</sup>のところで湯浴を行い、病が全治したことを感謝して草津に入り

込む五つの道の小沢に土橋を架け、伊勢宇橋と名付け、その橋の畔に建てた碑である。その数は、百と

いわれるが、これはそのうちの一つで「八十七ヶ處

目」と刻まれている。

また、これより先、本白根農場を過ぎてまもなくの小川にも、「八十八ヶ處目」と刻まれた伊勢宇橋の碑<sup>(5)</sup>がある。

旧道は、この先の酒屋前で、幕坂道と合流する。

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

泉街へ入る。  
坂を下りきつた標高一一六〇メートルにあるのが湯畠（湯池）である。  
運動茶屋よりバスターミナル横通り、土産物店などが並ぶ坂を下り、温

た、山本十右衛門の名が刻やまれている。

當時、山本は、有名な宿の一つであったろう。

八一九年の百番供養塔がある。

なお、泣き燈籠、宝鏡印庚申塔の世話人には、伊勢宇橋の碑世話人でもあつ

た、有料道路をへだてた公園内には、明和六（一七六九）年、信州高遠の石工が

作つた立派な、宝鏡印庚申塔が目につく。また、そのわきには、文政二（一

八二五）年の百番供養塔がある。

右側面「江戸 高崎 川原湯 大戸 長ノ原 信州道」左側面「沢渡 中之

条 四万 伊香保 沼田 日光道」と刻まれている。

この他、ここには、伊勢宇橋の碑を復元したものや、旧道をへだてた喫茶

店の庭には、文化二（一八〇五）年「白根大明神」と刻んだ石燈籠<sup>（泣き燈籠）</sup>また、

州新田郡阿久津村の白石栄左衛門が

入浴四十度を記念し、また、草津湯

治の効能に感謝し、往きかえる旅人

のために寄進したもので、下の石に、

このわきに、有名な、泣き燈籠道

料道路と合流する地点に移された。

ここには、昭和七（一九三二）年

に建てた大にな運動茶屋の碑がある

からすぐわかる。

湯畠からは、現在でも六二・五度の湯が、毎分六千リットルも湧出し、棚

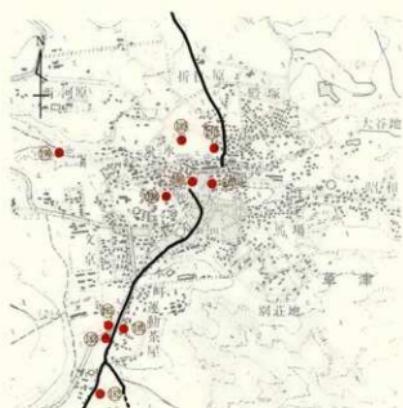
の中にある四〇メートル程のトイからは、年間一トンもの湯の花が採れる。

湯畠からは、現在でも六二・五度の湯が、毎分六千リットルも湧出し、棚  
の中にある四〇メートル程のトイからは、年間一トンもの湯の花が採れる。

温泉街は、この豊富な湯を湧出する湯畠を中心に形成されている。



湯畠



草津温泉

草津温泉部分図

2 長野原大津から草津温泉へ



上州草津温泉の全図

No	名 称	年 代 不 明	年 号	備 考
191	道祖神	明和七年	「みぎくさつひだりいまい」	県指定史跡 双体道祖神 年代不明 一基
190	勤塙木石器時代住居跡	文化四年	「右入山 左草津 道」	
189	双体道祖神	寛政八年	「一基」	
188 187	熊野神社	年代不明	「右志ん志う道 左ハ江戸道」	
186	百番供養塔	万延元年	「八十七ヶ处目」	
185 184	運動茶屋の碑	昭和九年	「江戸 高崎 川原湯 大戸 長ノ原 信州道」「沢渡 中之条 四万	
183	運動茶屋の碑	文政三年	「お波止の湯」	
182	石燈籠	明和二年	「白根大明神 伊香保 池田 日光道」	
181	湯流の燈籠	文政六年	「信州高遠石工作」	
180	芭蕉句碑	文化二年	「近衛龍山の和歌十首(一巻)」	
179	西の河原	享保十九年	「ワシの湯の碑、竹烟の松、平丸の化	
178	白根神社	天保一年	「仏石多數あり」	
177	芭蕉句碑	宝篋印塔	妙法水	ベルツ博士の碑昭和九(一九三四)
176	西の河原	地蔵堂	年	
175	白根神社	光泉寺	年	
174	芭蕉句碑	釈迦堂	年	

## (二) 鼻田峠道（六里ヶ原通り）

信州沓掛道と西吾妻地方を結ぶ道が三筋あることを先に述べたが、これらは道を一般には沓掛街道と呼ぶ。行く方向をさして名付ける当時の名としては当然のことであろう。

これらの道は、中世より信州と西吾妻を結ぶ重要な街道として位置づけられるが、ここでは、主として近世草津道として取り上げることにした。

となると、行く方向をさす、沓掛街道ではおかしいことになる。そこで、町村誌などをみると、『長野原町誌』には、沓掛街道と共に六里ヶ原通りと表現し、『櫛恋村誌』には、鼻田峠道と表現している。また、萩原進著の『草津温泉史』には、浅間腰道と表現されている。共に通過地域より取った名である。

そこで、本文では、これらを参考にし、鼻田峠道（六里ヶ原通り）と呼ぶことにし、三筋の通りを使い分けるため『草津温泉史』に表現された、狩宿通り、鎌原通りと呼んだ。

また、もう一筋を、大世通りと呼ぶことにする。この大世通りは後述するが、本来信州街道として近世において物資運搬の重要なルートであって、草津道とは性格を異にするが、鼻田峠道の一筋として取り上げた。

## 1 狩宿通り

信州中山道沓掛宿より分岐したこの道は、鼻田峠（花田とも書く）を上り、標高一四〇〇メートル、峰の茶屋につく。そこより国道一四六号で約二キロ、小浅間の腰を通って群馬県に入る。

県境より旧道は、国道の右わきを走っている。その跡をたどることはできないが、現在の国道沿いに間違いはない。今は、この一帯、松をはじめとする雜木林であるが、江戸時代もそうであつたろうか。

安永九（一七八〇）年、草津へ旅した京都の儒学者平沢旭山は、『漫遊文庫』

の中で、この道のことを、「路は浅間山の巒と咫尺す。北風凜烈、寒氣骨に徹す。騎可からず、乃ち馬を下りて歩す。」と書き、あまりの寒さで馬を降りて歩いたという。彼が歩いたのは夏というが、よほど寒かったのであろう。今日でもそんな日があるかも知れない。とにかく風をよけるもの一つない地であったのだ。

これに加えて、天明三（一七八三）年の浅間山大爆発後ともなれば、一面火山弾・火山礫となり、草木一本生えない不毛の六里ヶ原であつたに違いない。

こんな六里ヶ原を旅した人々の心と身体を暖めたのが、県境より一キロ程先にあった分去茶屋<sup>アリヤ</sup>であった。ここは、現在の片瀬川の空堀手前、左側の雑木林の中である。

そして、この茶屋前で狩宿通りと大世通りが分岐していた。

茶屋は、おそらく文化・文政期には成立していたと思われ、地元の人の話によると、昭和五（一九三〇）年の浅間爆発の頃まであったと言つる。

文化五（一八〇八）年、分去茶屋の助四郎は、旅人の安全を願つて、次のようない勧化を出している。

## 勧化帳

抑此浅間腰の道は六里の間砂障<sup>サジヤウ</sup>に出し、都焼<sup>ハラ</sup>にて木かけもなく、一面に海のおもてのことくなれ、雪中に至りぬれハ寒け、ものかけも往來の旅人東西を失ひふみまよ、こへ死するもの度々の事なりければ、見次<sup>シカシ</sup>に石をつみ、其上に西國三十三ヶ所の觀音の尊像を建置ハ、往来する人え結縁ともなり、今は雪吹の節道を知り、或はまた其方に寄て非業の難を避る、便りともならんと、多年心願するといへとも自力に叶ひかたく、依て近郷及び往来の人々助力し給ひて、大願成就なさしめ給ハ、末世長く人のたすけともならん事を希ふものなり

文化五（一八〇八）年六月

願主  
分去茶屋

一觀世音一体施主  
銀武拾五匁宛也

(焼恋村 山崎弘三郎氏所蔵)

この文中からも、当時の荒れはてた六里ヶ原と不安な気持で旅した人々の様子を知ることができる。そして、この勧化により建てられたのが、一般に六里ヶ原通しの観音である。

これは、この分去茶屋にあつた大きな観音像を起点とし、番掛方面・狩宿方面そして大笛方面の三方へ、

それぞれ一番より三番の観音像を

一町ごとに建て道しるべとしたものである。

合計一〇〇体の観音像は、今は道筋になくなつたが、分去茶屋にあつた大きな観音像は、現在、長野原町応桑栗平にある。これを見ると、分去茶屋は、現在、長野原町応桑栗平にある。

現在のところは、元禄一六年（一七〇三）年

の道しるべである。これは、「右ハくさき道」「左ハ大きさき道」とあり、

また、他の九九体の観音は、人に持ち去れたり、破損・土砂に埋められたりしたが、残つた二十数体の観音は、応桑の桜岩地藏堂の境内に安置されている。年代は、文化・文政期に集中し、観音の種類は、十一面観音、合掌観音、持蓮観音など様々であり、また施主は、狩宿・大笛・大前など地元の村々をはじめ上州高崎・信州各地の商人たちである。

この地藏堂境内には、この他、同じ分去茶屋にあつた元禄一六年（一七〇三）年の道しるべがある。これは、「右ハくさき道」「左ハ大きさき道」とあり、泉州郡の小西八兵衛という薬商人が建てたものである。

なお、これら文化財のある桜岩地藏堂に安置されている本尊は、寛政四年（一七九二）年建立で、六里ヶ原を旅する人々の平安鎮護に建てられたものである。

さて、分去茶屋からの旧道は、国道に沿つて右側の林内を通る。一・三キロ程進むと、別荘地へ向かう広い交差点があり、この左側に分去茶屋といふわらぶき屋根のそば屋がある。これが鎌原通りとの分岐点で、大正から昭和初期まで分去茶屋があった。

今も当時使用された井戸跡が残つてゐるが、この茶屋が江戸期にあつたかは定かでない。

現在のように西吾妻地域に鉄道が敷かれる以前は、この鼻田静道が、江戸・高崎方面との物資運搬ルートであり、草軽電鉄ができるまで、この道を駄馬や連絡馬車が行きかい、この分去茶屋も「増茶屋」と呼ばれ、利用されていた。

大正・昭和初期には、六里ヶ原に二つの分去茶屋があつたので、大笛通りの方を「上の分去茶屋」、鎌原通りの方を「下の分去茶屋」と呼んでいた。

桜岩地藏堂にある道しるべ

寛政四年（一七九二）年  
辰辰（月）二十九日（中央）  
寛政四年（一七九二）子  
十一月（月）十三日（左）



桜岩地藏堂

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

旧道は、この下の分岐茶屋で国道からしばらくはずれることになる。

国道左側の未舗装道がそれで、別荘地を直線的に通っている。三キロ程度むと桜岩地蔵堂の前の町道と交差し、さらに直進すると畠に出る。

旧道は、その左、地蔵川との間を通りこの部分は道筋がなくなっている、未舗装道に出る。そこで地蔵川を渡り、広大な牧草地内を通って、八〇〇メートル程先で国道に出る。

ここより、旧道は、国道として狩宿（現在の新田）へ向かう。狩宿手前の田口で、国道は、バイパスとなるが、旧道は、狩宿集落へ直進する道である。左手小高い丘の上に諏訪神社があり、それを過ぎると町立第二小学校である。

この小学校校庭に、昭和四五年に建てられた狩宿関所の碑がある。ちょうど旧道が、急カーブした所で、狩宿宿西はずれにあたる。

寛文二（一六六二）年より明治元（一八六八）年まで関所が設置されていなかった。（なお、創建時期は、寛文四年の説もある。）

狩宿宿は、草津道と信州街道とが合流しているが、信州街道は、関所を通らずその手前で曲っている。つまり、この関所は、草津・川原湯の湯治客、ことにその女を監視することに重点がおかれいたのである。

「一、女の儀草津河原湯へ入湯仕候女・江戸より龍越候節は、碓氷関所の書替証文を以相通す。但、信州・甲州・上州より草津へ湯治女隸組女・召抱候女は其所の名主・年寄並女の親類等の取りかわし証文を以通未候」とあり、江戸からの女は、碓氷の関所で手形を書替えた証明書で通し、帰りは、草津・川原湯の名主・年寄の手形で通し、信州・甲州・上州の女は、村の名主・年寄・親類の証文がなければ通れなかつたのだ。



狩宿関所跡

狩宿宿

と書いている。

明治三十年、当時の狩宿の様子を、草津温泉の帰りに通った田山花袋は『浅間横断記』の中で、

「……人屋大凡<sup>(一)</sup>百軒ばかりの小村にて、焼石を載せた板屋、雜草の生茂りたる貧其屋根など、極めて荒涼たる有様を呈したり」

旧道は、宿のはずれで急カーブし、そこで信州街道と分岐している。この角に、嘉永四（一八五一）年の双体道祖神道しるべがあり、「右ハはるな 左ハくさつ」と刻まれている。

また、旧道をこれより直進して萬原口のバス停三差路に、「是ち みぎによきやミチ、左草津海道」と刻んだ角柱の道しるべが横たわっている。

右折するこの道は、与喜屋を通る川原湯道であった。

旧道は、ここより先で国道となりしばらく進むが、當光原の手前、右に道



狩宿の双体道祖神道しるべ

が急カーブする所より山道となつて坂を下つて古森集落下  
でふたたび国道に出る。

古森の集落には、年代不明の双体道祖神三基があり、また、民家の庭先に明治三五年（一九〇二）年、「草津温泉

三里」と刻んだ角柱道しるべがある。

国道が古森の下でヘアピンカーブした所に出た旧道は、

ほぼ国道の道筋で、羽根尾に向かい、駅前で沼田—真田道と合流する。

駅前交差点東側の小道がそれである。

ここより羽根尾諏訪神社までは、沼田—真田道述べたので略す。

羽根尾諏訪神社前より旧道は北進し、国道一四五号が急カーブする所で、東京電力羽根尾発電所貯水池に向かって山側へ上る道となる。ここは、道筋がたいへんよく残っているが、貯水池を過ぎてから源川を渡り二軒屋で須賀尾越え道と合流するまでの間は、道筋がはつきりしない。このため合流地点も不明確である。

狩宿通りは、この二軒屋より、須賀尾越え道となつて草津へ向かっている。

No	名 称	年 号	備 考
192	分去茶屋跡		
193	分去茶屋跡	通称「上の分去茶屋」 基点觀音のあつた所 通称「下の分去茶屋」	通称「上の分去茶屋」 基点觀音のあつた所 通称「下の分去茶屋」

○ 狩宿通り

## 2 錦原通り

長野原町応桑、国道一四六号沿い、通称下の分去茶屋（増茶屋とも呼ぶ）で狩宿通りと分岐した旧道は、別荘地内を北北西に通つていて。

分岐点より八〇〇メートルは、道筋をたどることができず、現在の町當浅間町に通する道が、地蔵川の空堀を渡る付近より道筋が残っている。

この地域は、最近の急激な別荘地開発により旧道の道筋ばかりではなく、自然環境破壊も著しい。

天明三（一七八三）年の浅間焼以来、再生され続けた植物は、今や樹令百年以上の木として成長し天然林を形成してきたが、別荘地開発は、この自然を破壊し、さらに自生しない植物まで植え人工的自然を作り出している。このような状況の中での豊かな六里ヶ原の自然環境を守るために設けられたのが、旧道右側にある「王領寺の森・群馬県自然環境保全地域」であ

202	201	200	199	198	197	196	195	194
道しるべ	双体道祖神	道しるべ	嘉永四年	元禄六年	寛政四年	寛政五年	古井戸跡あり	六十数体あり文化、文政期
六里ヶ原基点觀音	諏訪神社	六里ヶ原道しるべ觀音	「右ハはるな 左ハくさつ」	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	関所の碑（昭和四年）	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	古井戸跡あり	二十数体あり文化、文政期
桜岩地蔵堂	狩宿関所跡	「黒源」	「是らみぎによきやミチ 左草津海道」	「右ハはるな 左ハくさつ」	関所の碑（昭和四年）	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	古井戸跡あり	二十数体あり文化、文政期
地蔵尊	双体道祖神道しるべ	「三基」	「左ハはるな 左ハくさつ」	「右ハはるな 左ハくさつ」	関所の碑（昭和四年）	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	古井戸跡あり	二十数体あり文化、文政期
六里ヶ原道しるべ觀音	道しるべ	三里	「左ハはるな 左ハくさつ」	「右ハはるな 左ハくさつ」	関所の碑（昭和四年）	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	古井戸跡あり	二十数体あり文化、文政期
六里ヶ原基点觀音	道しるべ	三里	「左ハはるな 左ハくさつ」	「右ハはるな 左ハくさつ」	関所の碑（昭和四年）	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	古井戸跡あり	二十数体あり文化、文政期
六里ヶ原道しるべ觀音	道しるべ	三里	「左ハはるな 左ハくさつ」	「右ハはるな 左ハくさつ」	関所の碑（昭和四年）	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	古井戸跡あり	二十数体あり文化、文政期
六里ヶ原基点觀音	道しるべ	三里	「左ハはるな 左ハくさつ」	「右ハはるな 左ハくさつ」	関所の碑（昭和四年）	「右ハくさつ道 左ハ大き々道」	古井戸跡あり	二十数体あり文化、文政期

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

ここで旧道は、左折し、村道を一路鎌原へ向かう。

この鎌原通りは、江戸以前よりの古道で、天正一〇（一五八二）年、武田勝頼が天目山の戦に敗れた時、人質の真田信幸、その母、弟信為らが上田城に帰ろうとして北国街道を通らず、この鎌原通りを通ったという。

鎌原へ向かう道には、大正一二（一九二三）、昭和二（一九二七）年の新しい馬頭観世音があり、今昔とわざ、鎌原通りは、鎌原方面と信州を結ぶ重要なルートの一つであったに違いない。

旧道は、鎌原宿へ南方より入る。

天明三（一七八三）年、春より活動を続けていた浅間山は、ついに七月八日巳刻（午前十時）頃、大爆発を起こし、一筋の熱泥流が鎌原を襲い、村を埋没させてしまった。

この様子は、大笛の無量院住職手記に生々しく表現されている。

当時百十数軒あつたと伝わる村もこの災害で、九三名の者だけ観音堂のある丘に登り難をのがれだと地元の古老は言う。

かつて、この鎌原観音堂の石段は、一五〇段と云えられてきたが、最近の調査で、実際には、五〇段前後と改められた。

日本のポンペイとして全国に知られてから境内は整理され、昭和五七年には、二百年前供養観世音像が建立された。そんな境内の中にも多くの古い文化財を見ることができる。

文化一二（一八一五）年に建立した供養碑には、四七七名の埋没者の戒名が刻まれ、隣村で災害を救済した富豪たちが施主として名をつらねている。

広大な六里ヶ原の中で、わずか一一・七ヘクタールの地域だが、ここには、ハルニレ・カツラ・ミスナラの三種を中心とした天然林と豊富な植物が保護され、小瀬川の水源も見ることができる。

別荘地開発で広げられた旧道を直進すると赤川で、北軽井沢・鎌原間の村道に出る。

ここで旧道は、左折し、村道を一路鎌原へ向かう。

この鎌原通りは、江戸以前よりの古道で、天正一〇（一五八二）年、武田

勝頼が天目山の戦に敗れた時、人質の真田信幸、その母、弟信為らが上田城

に帰ろうとして北国街道を通らず、この鎌原通りを通ったという。

鎌原へ向かう道には、大正一二（一九二三）、昭和二（一九二七）年の

新しい馬頭観世音があり、今昔とわざ、鎌原通りは、鎌原方面と信州を結ぶ

重要なルートの一つであったに違いない。

旧道は、鎌原宿へ南方より入る。

天明三（一七八三）年、春より活動を続けていた浅間山は、ついに七月八日巳刻（午前十時）頃、大爆発を起こし、一筋の熱泥流が鎌原を襲い、村を埋没させてしまった。

この様子は、大笛の無量院住職手記に生々しく表現されている。

当時百十数軒あつたと伝わる村もこの災害で、九三名の者だけ観音堂のある丘に登り難をのがれだと地元の古老は言う。

かつて、この鎌原観音堂の石段は、一五〇段と云えられてきたが、最近の

調査で、実際には、五〇段前後と改められた。

日本のポンペイとして全国に知られてから境内は整理され、昭和五七年には、二百年前供養観世音像が建立された。そんな境内の中にも多くの古い文化

財を見る能够である。

文化一二（一八一五）年に建立した供養碑には、四七七名の埋没者の戒名

が刻まれ、隣村で災害を救済した富豪たちが施主として名をつらねている。



鎌原については、歴史の道調査報告書第五集「信州街道」に述べられており重複をさけるためくわしく述べないが、見るべき文化財として、延命



鎌原宿

寺石標（觀音堂境内）、その破片で作られた道しるべとそのわきの双体道祖神

鎌原神社境内の郷倉、觀音堂入口の双体道祖神など数多い。

数年前、「十日ノ建」発掘調査で出土した物の中には、すずり、水さし、小判などがあり、鎌原が単に農村としてではなく宿場として茶屋・問屋・宿屋などが営まれていたことを物語っている。（『嬬恋村誌』より）

鎌原は、右圖が示すように、隣村への道が四方八方に伸び、その中で、草津道は、中居道と赤羽根道であった。つまり、現在の三原へ向かう道が二筋はつたのである。

赤羽根道は、蟹坂（吾妻川右岸の段丘崖）を下り、吾妻川を渡って村立東中学校付近を通り、国道一四号を横断し、この地点より高い所を通る県道（沼田—真田道）へ合流するが、蟹坂を下った所より国道付近までの道筋ははつきりしない。

これは、この間が吾妻川の氾濫原で、流路が現在より曲流していたからであろう。

一方、中居道は、赤羽根道より西方を通り現在の浅間有料道路の通称鎌原坂にある西武バス駐車場付近に出る。崖を下る道は廃道となっているが道筋はよく残っている。

その後、万座・鹿沢口駅西の交差点裏付近の吾妻川を渡り、三原集落内の小道となる。

道なりに進むと天神沢に出る。天神沢横の小道が旧道で、それを進み沼田—真田道と合流する。

三原の旧幼稚園裏には、大日如来堂（八坂神社）がある。ここには、寛政八（一七九六）年の双体道祖神や、文化未年（一八一一）の馬頭觀世音、享保一（一七二六）年の秋父・西国・坂東百番供養塔などがある。

このお堂はかつて、三原群馬銀行前交差点付近にあり、天明三年の浅間やけでうもれてしまつたものを、昭和初年、草電電鉄工事の際、発掘され、後

に現在へ移し安置したものである。

この交差点南には、大正一五（一九二六）年、全線開業された草軽電鉄上州三原駅があった。この軽便鉄道は、軽井沢（草津間、五五・五キロメートルを約三時間かけて走ったものだ。あくまでも草津温泉湯治客を輸送する目的であつたが、実際には、この地域一帯の物資運搬にも大きな役割を果たし、地元にも愛された鉄道であつたが、昭和三七（一九六二）年、残念ながら廃止されてしまった。

こうしてみると、草軽電鉄もそうだが、嬬恋地域の重要な交通ルートは、吾妻線開通前はこの沓掛（軽井沢）のルートがあつたと思われる。沼田—真田道と合流した旧道は、湯塗へ向かうが、この間、前述してあるのと略す。三原湯塗は、現在、畠だけで民家はないが昔は温泉もあり、人が住んでいた。

そして、この温泉にまつわる伝説があるので、『嬬恋村誌』より引用すると、

「湯塗には昔温泉が湧き出て繁昌を極めていたが、何時の頃かこの夫婦薬師の怒に触れたとかで、湧き出る湯を草に包んで、今の草津温泉の地へ投げられた。ために草津は温泉がこんこんと湧き出し、反対に湯塗は全く温泉が止まってしまった。住民も三原の方へ移り住む様になってしまった。草津の薬師は、この薬師（湯塗にあつた弘法大師作の夫婦薬師）の分霊であつて、草津の古い名は「草つづみ」で、この伝説から由来して、草津と変つたといふ」

である。こんなところにも、草津に関係する伝説があつたのだ。旧道は、ここから北進し、谷筋を通って、石津の高原地帯へ出る。現在は一面畠で、その中を旧道は通る。県道を横断した旧道は、石津へ入る急坂の小道を下る。

最初の三差路に、明治九（一八七六）年に建てた供養碑がある。これが道

III 吾妻の諸街道の現状と文化財

石津馬頭観音堂境内にある  
石津馬頭観音堂  
馬頭観音  
安徳されている。狭い境内には数多くの石仏が集められ、その中には、年代不明の双体道祖神、嘉永六年（一八五三）年の変った馬頭観世音などがある。

旧道は、このお堂に来る手前で右折し、今井川を渡る。その先の道左側に、文化二年（一八一六）年の庚申塔が目に入る。

その後、旧道は坂を上って広大な仙人の烟へ出る。ここは開拓地で、道筋をたどることはできない。

嬬恋村と草津町との境となる赤川を渡つた旧道は、まもなく県道に出る。道は、この先で二筋に分かれるが、右の道となつて前口・中村に入る。

小川を渡つたところに前口観音堂がある。境内には、双体道祖神、如意輪観音、馬頭観世音など数多くの石仏がある。

この前口や、この先の谷所は、六合村小雨と同様、草津の冬住みの場所であった。

冬住みとは、草津が、標高一二〇〇メートルもの高山にあり、冬期間は、寒さと雪のため温泉を閉鎖し、下つてこれらの村々に住んだのである。（なお前口、谷所は、およそ標高一一〇〇メートル、小雨は、七二〇メートルである。）

この冬住みの期間は、十月初旬より翌年の四月初旬までで、温泉は、四月八日より十月八日までの六ヵ月間しか開いていなかつた。



しるべを兼ねており「右信州 左高崎」と刻まれている。

また、この道を直進し

た右側に、石津馬頭観音堂があり、馬の頭のついた六手の木彫りの立像が

安置されている。狭い境

内には数多くの石仏が集められ、その中には、年代不明の双体道祖神、嘉永六年（一八五三）年の庚申塔が目に入る。

旧道は、このお堂に来る手前で右折し、今井川を渡る。その先の道左側に、

文化二年（一八一六）年の庚申塔が目に入る。

その後、旧道は坂を上つて広大な仙人の烟へ出る。ここは開拓地で、道筋をたどることはできない。

嬬恋村と草津町との境となる赤川を渡つた旧道は、まもなく県道に出る。

道は、この先で二筋に分かれるが、右の道となつて前口・中村に入る。

小川を渡つたところに前口観音堂がある。境内には、双体道祖神、如意輪観音、馬頭観世音など数多くの石仏がある。

この前口や、この先の谷所は、六合村小雨と同様、草津の冬住みの場所であつた。

冬住みとは、草津が、標高一二〇〇メートルもの高山にあり、冬期間は、

寒さと雪のため温泉を閉鎖し、下つてこれらの村々に住んだのである。（なお前口、谷所は、およそ標高一一〇〇メートル、小雨は、七二〇メートルである。）

この冬住みの期間は、十月初旬より翌年の四月初旬までで、温泉は、四月八日より十月八日までの六ヵ月間しか開いていなかつた。

冬住みの間、人々は、湯治客のため自炊用の薪取りや、土産物づくりをしていたようだが、この習慣も明治三〇（一八九七）年には完全になくなつたようである。

さて、旧道は、この冬住みの地、谷所より草軽電鉄軌道路にほば沿つて、須賀尾越え道と合流し、草津へ向かうのである。

最後に、ここでつけ加えておくが、この鎌原通りは、中居・赤羽根村より、鳥居越えの草津道としても使われていたようである。

つまり、信州仁礼方面より、菅原・鳥居崎・田代・大笛・大前・西羅・中居・赤羽根・前口・草津の道である。

十返舎一九や、清水浜臣（江戸の国学者）らは、この道を通つてるのである。

彼らの書いた文章からみると、二人とも、大世に泊り、翌日、草津へ来てゐる。また、二人とも、善光寺より草津へ來ていたのだ。

善光寺参詣と草津温泉湯治は、江戸時代の代表的な觀光であり、この二つの觀光地を結んだこの道は、多くの人々が利用したに違ひない。

○ 鎌原通り

No.	名 称	年 号	備 考
209	鎌原観音堂	大正一二年	群馬県自然環境保全地域
210	王領寺の森	昭和二年	群馬県自然環境保全地域
211	馬頭観世音	文化二年	石仏多數あり
212	延命寺石標	年代不明	四七七名の埋没者の戒名する
213	道するべ	延命寺石標破片	「右すがみ 左ぬまた 道」
214	双体道祖神	寛政九年	
215	鎌原神社	寛政九年	
216	双体道祖神	寛政九年	
217	郷倉		

214	213	212	211	210
大日如来堂 百番供養塔	草保一年 寛政八年	馬頭觀世音 供養碑	石津馬頭觀音堂 双体道祖神	石仏あり
双体道祖神 馬頭觀世音	文化末年 明治九年	供養碑 道しるべを兼ねる「右信州 左高崎」	年代不明 墓水六年	石仏多數あり
庚申塔 前口觀音堂	文化三年 年代不明	庚申塔 石仏多數あり	二基	原へは二里、それに対し柵掛へは五里と長く、それだけ駄賀が多く取れ、しかも帰りに薪木を取つて帰るので、柵掛へ多く荷の仲縫ぎをしたのである。
				この柵掛への道が、ここであげた大篠通りである。

### 3 大 篠 通 り

分去茶屋より狩宿通りと分岐するこの通りは、信州と江戸との物資運搬

ルートとして重要なものの一つであった。

このことについて、原沢文弥の研究で、「近世宿駅の歴史地理学的研究—大篠宿を中心として」、東京学芸大学研究報告、「脇往還「大戸通り」交通の歴史地理学的研究」、新地理第四卷第三号（一九五五）、「江戸時代における宿駅と脇道往還交通との関係について」、地理学評論第三一卷第五号（一九五八）にくわしく述べられている。

そこで、この内容から簡単に大篠通りを説明すると、信州（特に北信濃地方）と江戸との物資流通経路は、もともと、表道として北国街道・中山道を通さねばならなかった。しかし、距離的に短い信州街道（「礼一大篠一大戸一高崎」）は、北国街道の脇往還として多く利用されていた。

慶安三（一六五〇）年より松代から東方地域の物資は、幕府公認で信州街道を通った。

このため、大篠宿は、たいへん繁盛し、問屋、黒岩長左衛門は、その一人

であった。

さて、この大篠で、荷の仲縫ぎをし、その駄賀稼ぎをするのに信州街道鍊原へは二里、それに対し柵掛へは五里と長く、それだけ駄賀が多く取れ、しかも帰りに薪木を取つて帰るので、柵掛へ多く荷の仲縫ぎをしたのである。

これが原因で、信州街道の宿からは、いくたびも訴えを起している。それだけ、この道が利用されていたのである。

さて、この旧道は、分去茶屋より北西へ一路大篠へと向かう。

片蓋川の空堀を渡つてからしばらくの間道筋は残っているが、それ以降、

別在地開発が進み、道筋をたどることはできない。

浅間有料道路を越えて、まもなく、県道大篠—応桑線が旧道となつて大篠まで行く。

この大篠通りも、狩宿通り、鎌原通りと同様、天明三年の浅間焼けで、大被害を受けた。ことに、この大篠通りが一番火口に近い所を通つてるのである。

時の幕府は、この六里ヶ原の被害調査の為、勘定奉行吟味役、根岸九郎左衛門を現地に派遣した。地元の

古老の話によると、彼は、旧道の右側にある小高い岩山に登り、被害状況を見聞したという。

この岩山のすぐ先（ここは切り通しなっているが、その終つたところ、右側の岩に㊷の文字が入つている）。

国定忠治が、この六里ヶ原を通つ



六里ヶ原の大篠通り

III 吾妻の諸街道の現状と文化財

た時、休んだ岩で、キセルで、岩に<sup>(1)</sup>と刻み込んだのだと、先ほどの古老人は話した。

浅間焼けの跡は、今でもいたるところにみられる。<sup>(2)</sup>の伝説のある岩より、しばらく旧道を進むと、小高い山がある。

これが、この一帯の地名にもなった青山<sup>(3)</sup>（標高一一二九・八メートル）である。

浅間焼けの際、この山だけ焼けずに残り、青々としていたので、自然に青山と名付けられたと、これも先ほどの古老人が話してくれた。

たしかに、今でも道ばたは火山彈・火山礫だらけである。

ここより南方、別荘地内にある浅間山溶岩樹型（国特別天然記念物）は、溶岩流のすごさを物語るものである。

これは、流動性のある溶岩が森林地帯を流れ際、木をまわりから包み、木を燃えさせそのまま樹型が残ったものである。

この溶岩樹型のある地点より鬼押出し岩の裏側をみると、高さ數十メートルにおよぶ溶岩流の巨大会を再確認する。

旧道は、こんな荒れ果てた不毛の地を通っていたのだ。もちろん、浅間焼け直後に道筋などあるはずがない。

そこで、大笛の黒岩長左衛門らは、代官所へ植林の申請をしている。

こんな大被害をもたらした浅間焼けにも、一つだけ後になつて村人を喜ばせたことがある。

それは、温泉の出現であった。これを『嬬恋村誌』よりまとめて紹介する

鬼押出し溶岩流の下から流出した清水が熱湯となつて流れた。そこで、大笛の長左衛門が、これを大笛宿まで引いて大笛温泉を作つたのである。

引湯した距離は約六キロと長く、莫大な工事であった。彼らが出費した費用は、寛政元（一七八九）年より享和元（一八一一年）の間でも二十五両と、



滝の頭馬頭観世音堂



大笛無量院前の大笛通り



無量院道しるべ

莫大な投資である。

これも、被災者・飢人救済と大笛村繁栄のため

だった。

しかし、この温泉は、溶岩がさると同時に湯

もひえ、自然に廃止され

たらしい。

この引湯跡は、今でも一部残り、大笛宿上の高地に設けられた貯湯場も跡として残っている。

青山より、旧道を一キロ程進むと滝ノ頭観音堂が、左側にある。

滝屋のようで見落しがちであるが、中に安置されている天保一四（一八四三）年の馬頭観世音像は、馬頭尊としては大きく立派なものである。また、両わきに寛政五（一七九三）年と年代不明の地蔵尊がある。

この上にかかっている、馬頭観世音の懸額は、長左衛門の長男正澄の書である。

ここより、約二・五キロ進めば、大笛宿だが、宿に入る手前、右側にある寺が、長野原常林寺の末寺、無量院である。

境内には、多くの石仏があり、その中の一つに、馬頭観世音道するべがある。年代は不明だが、「右山道 左番掛」と刻まれている。

また、旧道左側には、室町時代に建立されたといわれる五輪塔がある。

ここより、目と鼻の先に、大笛宿がある。

### ○ 大笛通り

No	名 称	年 号	備 考
221	根岸九郎左衛門が見聞した岩山	天保四年	国定忠治が休んだ所
222	◎の岩山	寛政五年	浅間焼けで唯一焼けずに残った山
223	青 山	年代不明	国特別天然記念物
224	地 蔵 尊	室町時代	七軒並んでいたといふ
225	無量院		四万川べりの道で雜木が道の両側からおいかぶさるようになつていて、昔の街道の面影をよく残している。
226	五輪塔		高札場を過ぎ、四万川の崖の縁に沿つて、四万川の峡谷を所々臨みながら行くと、中折田へと入つてくる。ここで旧道はそのまま真すぐ行くけれども、左へ折れて四万川に架かる上妻橋を渡つていく道がある。その道を行くと対岸の山田へと連絡し、原町から沢渡への道につながる。その上妻橋の傍に石地蔵が置かれている。宝暦三(一七五三)年に造立されたもので川で水死した人の慰靈のための地蔵で、施主は山田村となつておらず、もと勝負瀬があたものをのちに現在地に移したものであるといふ。
227	馬頭観世音堂		旧道は中折田の先で再び国道三五三号線と合流し、そのままおよそ二キロ位進むと三差路になる。右へ行くのが国道三五三号線で四万温泉へと通する。この三差路の付近が下沢渡で、集落の北の方、

中之条町の通りを行くと三差路に出る。右へ行くと四万温泉に通ずる国道  
1 中之条町・原町から沢渡温泉へ



中之条町上妻橋傍の石地蔵

旧道は中折田の先で

再び国道三五三号線と合流し、そのままおよ

そ二キロ位進むと三差

路になる。右へ行くの

が国道三五三号線で四

万温泉へと通する。こ

の三差路の付近が下沢

三五三号線であるが、旧道は左の方へ行って、小川の橋を渡つてすぐに右に折れる。その近くに伊勢宮がある。旧道を七〇〇メートル行くと国道三五三号線に合流するが、それを一キロ程進むと下折田へと入る。この下折田の北側、山すそに滝沢の不動堂があり、中世の石仏が保存されている。またその裏の墓地には南北朝期の五輪塔数基が散乱しており、かなり損耗が著しい。

下折田から左の方へ行くと高札場といわれるゆるやかな坂がある。かつて旧道の右手に折田の高札場<sup>(三)</sup>があつた所からそのように言われるようになったものらしい。又、この通りを土地の人達は往還といい、大正頃まで茶店が六、七軒並んでいたといふ。四万川べりの道で雜木が道の両側からおいかぶさるようになつていて、昔の街道の面影をよく残している。

高札場を過ぎ、四万川の崖の縁に沿つて、四万川の峡谷を所々臨みながら行くと、中折田へと入つてくる。ここで旧道はそのまま真すぐ行くけれども、左へ折れて四万川に架かる上妻橋を渡つていく道がある。その道を行くと対岸の山田へと連絡し、原町から沢渡への道につながる。その上妻橋の傍に石地蔵が置かれている。宝暦三(一七五三)年に造立されたもので川で水死した人の慰靈のための地蔵で、施主は山田村となつておらず、もと勝負瀬があたものをのちに現在地に移したものであるといふ。

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

国道から右側に入つて行った所に宗本寺がある。この宗本寺の墓地に二基の勾欄付の宝篋印塔<sup>(1)</sup>がある。康永三（一三四四）年のものと康永四年のもので前者が県の重要文化財に指定されている。

旧道は三差路を左の方に折れ、渡戸橋<sup>(2)</sup>を渡ると間もなく左手に高渡橋<sup>(3)</sup>がある。高渡橋を渡るとやはり原町（下沢渡）の道に連絡する。旧道は高渡橋を渡らずに、そこを過ぎたあたりから左に入つていく。そして現在の道路とほぼ並行しながらも下沢渡の崖の縁を行き、菅田<sup>(4)</sup>で現在の道路と合流する。このあたりの旧道は道形は残つているものの、生活道路としての利用はほとんどなされていはず、廻道に近い感じである。菅田から蓮来橋を渡り、湯原の集落を通るが、湯原の先で道は二手に分かれる。右は古座部<sup>(5)</sup>に行く道であるが、その交点に道祖神<sup>(6)</sup>がある。寛保三（一七四三）年の銘があり、男女相抱擁した彫りの深い堂々とした道祖神である。旧道は左の方へ行くとやがて沢渡温泉に到達する。

沢渡温泉は皮膚病、痔疾などに効能があり、古来草津の湯治の仕上げの湯として利用されてきた。従つて現在でも長期逗留の湯治客が多く観光的な華やいだ雰囲気はなく、しつとりと落ち着いた昔ながらの風情を漂わせている。しかし、最近は温泉と医療を結びつけた近代的な病院や研究所などが建設され、古いものの中には近代的なものが顔をのぞかせていて。沢渡の温泉街の一角に福田宗楨の屋敷跡がある。福田宗楨は寛政三（一七九一）年に沢渡に生まれ、詩文を市河米庵に、医学を二宮洞庭に学んだのち旅館業を継いだ。のち高野長英と弟の交わりをなし洋学を志し、天保七（一八三六）年長英の来遊をうけて更に勉励し、吾妻洋学の基を開いた。今、そこには標識と説明板があるのみで、屋敷跡をうかがわせるものは何もない。

沢渡温泉を抜けると道は幕坂峠の方へと行く。

原町から沢渡へ行くには、原町の市街地を抜けて大宮<sup>(7)</sup>・嚴敷<sup>(8)</sup>神社の横の旧道を通っていく。大宮神社には社宝としての神鏡や摩手刀が伝えられ、また境



上沢渡湯原の道祖神



大宮神社裏道しるべ

内には櫛と杉の連理木が御神木として珍重されており、歴史の古い由緒ある神社である。大宮神社の裏の道の片隅に半ば埋もれるよう道しるべが置かれている。「右さハたり」とだけ刻まれている。

大宮神社を過ぎると間もなく左手の小高い丘の上に福荷大明神宮<sup>(9)</sup>がある。そこを過ぎたあたりから段々人家も途絶え、田畠の中を行く。往時の街道の雰囲気が漂つてくるようである。道はやがて山坂にかかり両側に山が迫ってきて狭い峠道を越えていくと、又視界が開けてくる。四万川が左に大きく蛇行し、そしてまた右にカーブしたたりが通称勝負瀬といい、幕末の嘉永年間に吾妻三河岸の一つである山田河岸が置かれ、吾妻川を通して物資の交易がおこなわれた。旧道からその勝負瀬に行く道の角に道しるべがある。半分程土中に埋もれてしまつて文字の判読が困難であるが、それでも「左中の糸、右はらまち」とある。沢渡方面から来る旅人達のための道しるべであつたのであろう。



清水の御神燈

清水の御神燈  
寺社原の集落の中の一段と高い所に觀音堂がある。その先は寺社原へと出る。寺社原の集落の中の一段と高い所に觀音堂がある。ほとんどの手入れがなされず、荒れるにまかせたままでは造物も散乱、倒壊しているといった状態である。

寺社原から更に前尻へと道は続くが、前尻の左側の山の斜面にたくさんの觀音像が見下ろすようにして建つてある。北向三十三番観世音といつて、明治三十四（一九〇一）年に飢餓等によって死んだ人達の慰靈のために造立されたものであるという。前尻を過ぎると間もなく沢渡温泉の先に出る。そしてここで中之条から旧道と合流し、左へ行くと暮坂峠へと続いていくことになる。

旧道を更に先に進むと左手へ行く道があるが、それを少し入ると右側に淨土宗善福寺、左側に吾嬬神社がある。善福寺には県重文指定の「善福寺金銅光寺三尊像」が安置されている。今度は右へ行く道があるが、これは上妻橋を渡つて中之条へ沢渡間の道と連絡する。旧道を真っすぐと右側に清水の敷石住居跡がある。それから少し行くと左側の道路端に大きな岩の上に御神燈が置かれている。台座に文化十二年とあるが、山田の勝負潮に行く途中にある御神燈（文化十一年）と形がそっくりである。御神燈から更に少しうくと、左側に清水の弁天様がある。清水の弁天様を横に見ながら進んで行くと、やがて高沼の集落になる。その集落を過ぎたあたりから旧道は昔の面影をとどめている。右の高瀬橋を渡ると中之条へ沢渡間の道とつながる。旧道は山が急に押し迫ってきている山すその道を繞うようにしていく。そしてその先は寺社原へと出る。寺社原の集落の中の一段と高い所に觀音堂がある。ほとんどの手入れがなされず、荒れるにまかせたままでは造物も散乱、倒壊しているといった状態である。

寺社原から更に前尻へと道は続くが、前尻の左側の山の斜面にたくさんの觀音像が見下ろすようにして建つてある。北向三十三番観世音といつて、明治三十四（一九〇一）年に飢餓等によって死んだ人達の慰靈のために造立されたものであるという。前尻を過ぎると間もなく沢渡温泉の先に出る。そしてここで中之条から旧道と合流し、左へ行くと暮坂峠へと続いていくことになる。

No.	名 称	年 号	備 考
249 248 247 246 245	244 243 242 241 240 239	238 237 236 235 234 233	232 231 230 229 228 227 226 225 224 223
寺社原観音堂石仏群 馬頭観音碑	清水の御神燈 善福寺金銅善光寺三尊像 清水敷石住居跡	双体道祖神 一万巻説教供養塔 山田の御神燈 道しるべ 吾嬬神社	折田の高札場址 双体道祖神 石地蔵 高瀬橋の碑 宗本寺宝鏡印塔 延訪神社道祖神群 道祖神 庚申供養塔 大宮嚴鼓神社 稻荷大明神宮 道しるべ 奉立庚申供養塔
天保十一年	文化十一年	寛保三年	安永九年 文化二年 元文五年 宝暦三年 康永三年 寛政八年 元禄四年 寛政八年 中世の石仏、五輪の塔数基あり 庚申供養塔（元禄八年）あり
勢至菩薩碑（文久二）もあり	左中の条 右はらまち 県指定重要文化財	奉手刀、神鏡等あり 右さへたり 奉手型 と奉幣型の双体道祖神一基 寛保十七年 享和元年 文化十一年 と奉幣型の双体道祖神一基 享和元年 文化十一年 左中の条 右はらまち 県指定重要文化財	奉造立庚申供養為二世安樂 四基あり、握手式（安永四年）のみ 年号判明 奉造立庚申供養為二世安樂 四基あり、握手式（安永四年）のみ と奉幣型の双体道祖神一基 享和元年 文化十一年 左中の条 右はらまち 県指定重要文化財

251	250
北向三十三番観世音	寛保三年 酒器持ち祝言型、他に庚申塔、馬頭観音あり

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

温泉を下った道は上沢渡川沿いに南を通っていたが、明治四三年、昭和二年にも被害を受けている。これを過ぎて正面に岩肌をさらして見える山が有笠山である。中腹に弥生文化時代の遺跡がある。昭和二八年、この山の洞窟内で石器(磨製石斧、打製石斧、はく片)、弥生式土器、獸骨等が多数出土した。又、三つの住居跡も発見され、それには炉があり焼けた土と灰の層、それに鉄平石の石が散かれているのも発見された。岩櫃山の鹿の巣遺跡と共に弥生遺跡の中では特異なものである。現在、この山下に老人福祉センターがある。

上沢渡川の北側(左岸)の白石沢の集落は先の洪水で流失してしまったと思われるが墓地が残り昔を偲ばせる。

ここから大岩までは上沢渡川沿いに道は進んでいく。大岩は草津街道の中では一つのポイントになつていて、これから墓坂を越えようとする人、峠を下つてきた旅人がここでも一息していったはずである。

不動沢に沿つて上つていくと大岩の不動尊がある。『中之条町誌』によれば、相模國大岩不動尊、伊賀國細瀬不動尊と共に日本三跡不動尊といわれ、この像を行基が作つたと伝えられ、大永三(一五六三)年不動堂が創建されたという。不動尊への参道には古い杉並木があつたが、このうち一本だけ残つたものが三叉杉と呼ばれ、昭和三十三年県の天然記念物に指定された。樹令八百年、根廻り十三・四メートル、樹高二十五メートル、台風の為現在の枝は二本となつてある。

温泉を下った道は上沢渡川沿いに南を通っていたが、明治四三年、昭和二年にも被害を受けている。これを過ぎて正面に岩肌をさらして見える山が有笠山である。中腹に弥生文化時代の遺跡がある。昭和二八年、この山の洞窟内で石器(磨製石斧、打製石斧、はく片)、弥生式土器、獸骨等が多数出土した。又、三つの住居跡も発見され、それには炉があり焼けた土と灰の層、それに鉄平石の石が散かれているのも発見された。岩櫃山の鹿の巣遺跡と共に弥生遺跡の中では特異なものである。現在、この山下に老人福祉センターがある。

### 2 沢渡温泉から生須集落へ

寛保三年 酒器持ち祝言型、他に庚申塔、馬頭観音あり

不動入口から三百メートル位旧道を行つた所に双体道祖神がある。

安永八(一七七九)年が刻まれているが、草津道の中では沢渡の道祖神と並んで有名である。

ほのぼのとした穏やかな顔に道行く人はどれ程か安らぎをおぼえたであろうか。すぐ隣の庚申塚。百庚申と呼ばれて多くの庚申塔が建てられているが、メインは文化二(一八〇五)年の二・五メートルのものである。大岩・細尾組中と刻んである。



大岩百庚申

百庚申を後にした草津道は麓橋の手前まで県道と川の間を通して進み、県道・沢・林道を通つてよいよ山へ。細尾への道しるべには「右ハ山みち」、「左ハさつみち」と刻まれている。現在ある位置の道は明治の道であるので当時はこれより百メートルばかり西の江戸道即ち草津道にあつたものと思われる。旧道は一たん左側にカーブしそうに右カーブで細尾の奥に上つていったのである。細尾集落(四戸)からこの旧道草津道に出る道は集落の西をゆづくり上り、右折して林の中を上つていく。途中、享保九(一七二四)

年の双体道祖神<sup>(1)</sup>を右に見、明治の古道を横切つて、合流する。この地点から尾根沿いに上っていくが、右の岩の上の文政二(一八一九)年の馬頭観音<sup>(2)</sup>が道上から下を見ている。道陸神峠のような危険な箇所はないので人馬の往来は充分可能である。ただ、県道が谷底のような所を走っているのを見ると、余計、往時の道が高い所を通っていたように思える。風倒木や笹をまたいで押しかけて峠につくが、現在の県道の峠には小さい山を越えて十五分位で出られる。峠の二軒の茶屋跡はほつきりしないが少し渋んだ所があるのでその辺りかと思われる。



細尾から幕坂へ（道から登った所より大岩方面。  
細尾集落の真裏の山）



草津道（鍊食堂から1時間15分、  
かなり高い所をうねって通っている）

「六合村誌」によれば、一軒は小雨から出た家、もう一軒は大岩から出た家。小雨の馬方は小雨から出た茶屋へ客を寄せ、そこでにしめを食べさせたが、一皿二錢で客によつては馬方にもくれだしい。大岩の人の茶屋は若い娘がいて見晴しも良かつたという。

古来、この峠を越えた人は多い。何か

旅の哀愁を感じさせることを考えたであらうか。古い所では

文明十八（一四八六）年連歌師堀恵法師がその著「北国紀行」の中で草津から山中を経へ伊香保に向かうと記しているが、これはこの幕坂峠ではないだろうか。永禄六（一五六三）年真田幸隆が軍兵をひきつれ岩櫃城を攻略したのも、高間山を越えて幕坂峠へ出たのではないだろうか。江戸時代に入つてからは多く旅人の往来があつたことは道陸神峠が危険なためもあってなお更であった。かの有名な十返舎一九もその一人である。

糸道にある幕坂峠の売店前を小道が分け入つて西に向かっているが、これ

は明治の道で、高間超幕坂の道と合流して県道に出る道である。一方、峠から東に向かって設置されている矢印にそつて下つていく道も明治の古道である。

茶屋を下りた旧道は県道を行く。やがて牧水詩碑前の「花敷」への分歧点に至る。ここは牧水大正十一年の旅でコースを変更して急に花敷へ行つた小

道である。その頃、それ以前の道の駅の駅は今はなく昭和の大典のものが設置されている。草津へはまっすぐ西進して駒ヶ沢川と離れる所で左に入つていく。この辺りから木間ごしに沼尾の集落や生須の総合運動場周辺が見える。

旧道は生須まで下りて乗である。牧水の「みんな紀行」では生須からの描写を「こんどはとろり／＼とわずかな傾斜を登つてゆくのである。日はほがらかに南からさして、路にうずたかい落葉はから／＼に乾いている。音を立ててふんでいく下からは、色美しい栗の実がいくつとなくあらわれてきた……」と情緒ある表現でこの旧道を描写している。坂を下ると生須である。生須の大庚申塔は文化十四丁丑年に建立された素晴らしいもので草津道中の逸品である。

## 2 沢渡温泉から生須集落へ

No.	名 称	年 号	備 考
25	有笠山遺跡		
26	弥生時代 昭和二十八年発見 弥生文化遺跡		

261	250	259	258	257	256	255	254	253	大岩不動尊	大岩道祖神	大岩庚申塚	日本三蘇不動	三叉杉
									道しるべ	細尾庚申塔	細尾道祖神	「右ハ山みち」「左ハくさつみち」	他馬頭観音(天明元年)
									草津道馬頭観音	草津道馬頭観音	草津道馬頭観音	文化六年	百葉申
									幕坂峠道祖神	幕坂峠道祖神	幕坂峠道祖神	享保九年	双体道祖神
									文政二年	文政二年	文政二年	文化九年	細尾から三十分位登つた所、欠けて
									不詳	牧水詩碑、枯野歌、舟後光型、合掌像	牧水詩碑、枯野歌、舟後光型、合掌像	文化十四年	高さ三メートル八三センチ自然石

## 3 生須集落から草津温泉へ

庚申塔から生須集落へは左手の石仏群を過ぎると目と鼻の先。石仏群の中の馬頭観音は小雨役場裏の馬頭観音と対になっている。この土手の上の石仏群の先が生須の茶屋、山市屋。下の茶屋である。江戸の文学者富田永世の「上毛温泉廻り」の一文にもこの茶屋のことが出てくる。又、十辯舎一九の文政二(八一九)の「金の草鞋」にも生須の茶屋の狂歌「ちばばのつぶりは白髪大根なり、さればなます(生須)」の茶屋のしるしか」と記し、ママのはに追われ茶屋で助かったことが記されている。「草津温泉史」この脇から集落の中を通って須川(白砂川)に降りていくと、小雨橋跡が七拾五間四尺、幅八尺である。(六合村誌より)橋を渡ると小雨である。現在の六合村役場の裏に旧道は通じている。(ここ)



六合村生須(旧道)山市屋前



生須山市屋、十辯舎一九のうた

に天保十二(八四一)年の三面馬頭観世音像塔が三段の石組の上に建つて生須方面を見ている。これは生須の馬頭と世話人・石工が同じであることが対になって建立され、往還の人馬の安全と災の阻止を願つたものであろう。この小雨は尾尾とともに草津の冬住みの場所であった。『草津温泉史』によれば、宝慶五(七五五)年の『草津薬泉之記』に冬住のことが記されている。又、室町時代の『塵壘物語』にも出てくることから、これは草津の村創り以来のしきたりであったと思われる。冬住み地はこの他、前口、八床、下間の各村があつたが、この小雨村との関係が一番深い。草津の標高が一二〇〇メートル、小雨は八〇〇メートル、この差が寒気きびしくなる秋から春めく三月末までの移住をさせた理由といわれる。今もその冬住み跡が石垣の切石や屋敷跡に残っていて、この期間の村の賑やかさが偲ばれる。その冬住みも明治に入つて段々行われなくなった。

大坂への入口で旅館兼茶屋を經營していた大村屋も夏場と冬場をそれぞれ

草津と小雨で過したという。大村屋さんのおばあさんが祖母（安政六年生）から聞いた話では、馬方が荷物を乗せて通ったことや、その馬方が地元の人が忙しさのあい間にやつて駄賀稼ぎをしたこと。駄賀は草津までは五十銭、沢渡まで一円十銭であった。坂の上でも腰かけ茶屋があつたこと。又、娘さんが幼少の頃、病気治療のため檜に乗つて草津まで行つたなど。記憶にあるそうである。

役場裏から国道を横切つて右折、次いで左折して坂にかかるしていく。この国道から左折する右角に石仏が四基ある。この中の欠けた道祖神の左側面に「左りくさつ」と刻まれている。簡易舗装された坂を少し上ると民間の間に古い石垣等が見え、やがて稻荷社跡・道祖神・庚申・馬頭観音等多く建っている。道は旧状をよく残し段々、生須方面の見晴しが開けてくる。右下の畑に宝曆十二年の地蔵尊を見て少しの所に道するべ「右さわたり」がある。国道沿いのものが、これから近づく草津を示しているのに対し、これは草津



小雨大坂入口の石仏



小雨～草津

での湯治を終えた旅人が、小雨、須川、生須そして幕坂の山なみを見渡しながら聞いた話では、馬方が荷物を乗せて通ったことや、その馬方が地元の人が忙しさのあい間にやつて駄賀稼ぎをしたこと。駄賀は草津までは五十銭、沢渡まで一円十銭であった。坂の上でも腰かけ茶屋があつたこと。又、娘さんが幼少の頃、病気治療のため檜に乗つて草津まで行つたなど。記憶にものであろう。

湯の香りが漂うと草津道も終わりに近く（多くは帰り道に利用されたが）草津は運動茶屋に到達するのである。

### 3 生須集落から草津温泉へ

No.	名 称	年 号	備 考
268 267	生須石仏群		
266 265	小雨三面馬頭觀世音		
264 263	諏訪神社		
262	大坂入口道祖神	天保十二年 創建不詳	大馬頭觀音は小雨のものと對、その他石仏多し
261	石仏群	明和二年 江戸後期	生須の馬頭觀世音と對 明治四十一年小雨、大子、生須の神社を合祀。 「左りくさつ」の道するべあり
260 不詳	道しるべ	馬頭觀音多數 道祖神 供養塔	（右さわり）
259 不詳	一里地蔵尊	小雨と草津の中間点	

### 四 法峠越え道

信州から草津へのこの道は、鳥居峠越えよりも近かつたため、湯治客と共に、作物の取れない草津へ穀物や硫黄等を運搬する道として利用されたようである。

このため、正式な道筋である鳥居峠越え道の仁礼宿や大笹宿は、経済的打

### III 妻妻の諸街道の現状と文化財

擊があり、文政八（一八二五）年より二年間、争訴を起している。

これにより、物資の運搬は認め、湯治客の通行は認められないこととなつた。

十返舎一九が、この道のことを、「しぶの湯へまはりてゆく道近けれども、いたつて難儀の道」と『善光寺草津道中金草鞋』で書いているように、たいへん険しい道で、難所もある道である。

ただし、今回の調査では、実際にこの道を歩くことができなかつたので、地図上で進路をたどり、概要を記すことにする。

現在、この道は、渋峠より登山道となつていて、芳ヶ平までは、比較的緩傾斜であるが、それを見ると、急傾斜の坂道となる。

萩原進著、みやま文庫 第一十九巻「道しるべ」には、この道沿いにいくつかの道しるべがあることを記しているのでそれをあげておくと、その一つが、芳ヶ平にある大日如来道しるべである。

建立は、嘉永七（一八五四）年で、「右ハくさつ 左ハ入山村・中の条・花しき湯 しれ明」と刻まれている。

この渋峠越えの分路として、入山へぬける道があつたのである。

また、香草温泉の少し下の道ばたには、角柱の「右やまみち 左ぜんこうじ」と刻んだ道しるべがある。

この香草温泉は、ベルツ博士発見によるもので、後に開拓し、温泉としたが、現在は休館となっている。（『上州路誌』より）

この香草温泉から下る道は、最大の難所で、大沢川と谷沢川がぎざんぐわんと渋峠の狭い間を通る。ここを、蟻の塔といふが、嘉永元（一八四八）年、佐久間象山が、この道を通り、草津まで次のように書いている。

「渋峠の戸渡りといふ所にかかる。路幅がわずか人馬の通するほどで、両側は幾百尺もの絶壁である。はるかその底に溪流の音がきこえる。一町ほどの所ではあるが通る人の胆を冷させる。」

漸く中の原（現在の谷沢原か）と

いう広い野にさしかかる。霧が深くなつて先が見えない。矢沢（谷沢川）をこして橋をわたれば、湯の原（折目ヶ原か）という処に出る。」

（『草津温泉誌』より）

ここより、旧道は、草津温泉まで、あとわずかである。妙立山日光寺には、妙法水という靈水がある。旧道は、この横を通り、温泉街へ入る。



日光寺

No	名 称	年 号	備 考
1	日光寺		妙法水という靈泉

### 三、三国裏街道

#### 1 杖ヶ橋から箱島集落へ

杖ヶ橋の関所跡については歴史の道第三集三国街道に詳述されているので省略する。関所跡をあとにして南側の吾妻線踏切を越え、比高四〇メートル程の段丘崖を、よく旧状をとどめる旧道を上りあげる。日影道に入る手前で西側の登沢川の沢を越える道があつたわけだが、今は消滅している。登沢川を越えて日影道に出たところで旧道は二手に分かれている。日影道の右手へ斜めに入る道が本来の旧道であった。天明三（一七八三）年の浅間押して、

吾妻川の右岸の低崖上を通っていた旧道は押し流されてしまった。現在、この道の北の方、吾妻川原の畠中に残る「金島の浅間石」はその時の名残である。道は金島駅のあたりより吾妻線の北側を、比較的旧状をとどめながら、上川島の北部を走り、大輪沢川を吾妻線が渡るあたりで、斜めに吾妻線を越え、線路の南側に沿って国鉄祖母島駅前へ出る。駅の手前二〇〇メートル程のところに「祖母島番所」跡がある。この番所は三国街道の至ヶ橋の間が川止めとなつた時、北牧側から上流を迂回して渋川方面へ向かう旅人が改めを受けたところである。

一方登沢川を渡つたところから左手に入つて山際を通る道がある。この道は、天明の浅間押し流された前述の旧道に代つて使われた道と考えられる。川島の上・中・下の三集落はこの道沿いに発達しており、日影道が開かれる迄はこの道が主要道であつたと考えられる。これから見ていく三国裏街道はおおむね吾妻川右岸の崖際を通つてゐたが、前述の天明の浅間押しや寛保二(一七四二)年のいわゆる戊の大荒れなどに代表される洪水で、崖際の道は欠け落ち、その都度、より高みの山際の道が利用されたようと思われる。

さてこの山際の道を下川島、中川島の集落を通り過ぎると、左手にかなり急な石段がみえる。これが上野宮四の宮甲波宿祢神社<sup>(三)</sup>である。本社は箱島、行幸田のと並んで三つある甲波宿祢神社の一つであるが、この社が中心的存在と考えられる。社殿はもと吾妻川沿いにあつたが、天明三(一七八三年)年の浅間押しで流失してしまつたので、天明五(一七八五年)に現在地に移されたものである。ちなみに、甲波宿祢とは川の本流の意であり、吾妻川を神格化して祭つたものが甲波宿祢神社である。当社には、渋川市指定の鹿島流一人立ち獅子舞が伝えられている。

甲波宿祢神社を後にして四〇〇メートル程進むと伊香保より下つてくる道と交差する。交差点の右角のところに小さな双体道祖神がある。風化がはげしく二神の形も定かでない。



柏原の道祖神



川島の甲波宿祢神社

道祖神の交差点を二〇〇メートル程西へ進んだところで旧道の影は消えてしまう。日影道が大輪沢川を渡る境橋の手前で旧道は現われ、境橋の北側約五〇メートルのところで大輪沢川を越え、上川島の集落北に残る細道を祖母島番所跡の方へ下つて行く。

国鉄祖母島駅前に残る旧道も、その先沼尾川を渡り、沼尾川の岸段丘上まで約一三〇〇メートル程は消滅している。

沼尾川が吾妻川に合流する左岸崖

上は、戦国時代に武田方に属した柏原城<sup>(四)</sup>の跡である。道は城跡の東側を通り南下して日影道とぶつかる。南方の様名山中腹、伊香保、湯中子、岡崎と下つてきた道と日影道が交差する信号機のある三差路のすぐ東である。旧道は日影道を横切り、伊香保、柏原線も横切つて柏原の集落に入れる。一二〇メートル程進むと右に入る小道があり、その右角のちょっと高いところに大きな石があり、その大石を台座とする。

入る。表面を苔が覆つており、神像の表情もさだかでなく、銘もない。が江戸期のものであろ

III 吾妻の諸街道の現状と文化財

No.	名 称	年 号	備
222 271 270 269	金島の浅間石 祖母島番所跡 甲波宿祢神社	天明 三年	浅間押しによる湊石 李ヶ橋の闇の副道のおさえ 天明五年に現在地に移す
道 祖 神	1 李ヶ橋から箱島集落へ		

柏原の集落を抜けると道は次第に下り坂となり、再び日影道を越えて八幡宮の手前へ出る。この八幡社は、前記の柏原城の守護神として勧請され崇拝されたものと伝えられるが由緒は不明である。いずれにしても、戦国の昔までさかのぼるものであろうか。

八幡社の前から西側の金沢川を越え箱島の東詰めまでの間旧道は消滅している。

箱島宿は結構賑わった宿であった。「諸業高名録」には舍の下に商人宿、吾妻箱島、田丸屋旅館門とある「広告」が載っている。田丸屋は表向きは御休所であり、お茶漬「よしむらんちう」を振舞つたらしいことが、この広告から読みとれる。宿中の今の箱島郵便局のところを右へ入る道が旧道である。約二五〇メートル進んだ右手に社がみえる。箱島の甲波宿祢神社である。川島の甲波宿祢神社と並ぶ、吾妻川筋の双壁をなす社である。川島の御神体を延暦四(七八五)年に勧請したものとされる。戦国期には白井城主長尾氏の崇敬があつかった。長尾伊玄入道春は神宝として太刀一振を献じ社殿を修築したと伝える。寛文四(一六六四)年には大明神免として田一反三畝余、畠一反七畝余計三反一畝程の社領を有した。なお鳥居には享保一九(一七三四)年の銘がある。

甲波宿祢神社を後にして道は下り坂となり、東電箱島発電所下まで下ると前面に田んぼが広がり、その中を群道の如き旧道が西方へのびている。

う。

柏原の集落を抜けると道は次第に下り坂となり、再び日影道を越えて八幡宮の手前へ出る。この八幡社は、前記の柏原城の守護神として勧請され崇拝されたものと伝えられるが由緒は不明である。いずれにしても、戦国の昔までさかのぼるものであろうか。

八幡社の前から西側の金沢川を越え箱島の東詰めまでの間旧道は消滅している。

箱島宿は結構賑わった宿であった。「諸業高名録」には舍の下に商人宿、吾

妻

箱島

田丸屋

旅館

門

とある「広告」が載っている。田丸屋は表向きは御休所であり、お茶漬「よしむらんちう」を振舞つたらしいことが、この広告から読みとれる。宿中の今のが箱島郵便局のところを右へ入る道が旧道である。約二五〇メートル進んだ右手に社がみえる。箱島の甲波宿祢神社である。川島の甲波宿祢神社と並ぶ、吾妻川筋の双壁をなす社である。川島の御神体を延暦四(七八五)年に勧請したものとされる。戦国期には白井城主長尾氏の崇敬があつかった。長尾伊玄入道春は神宝として太刀一振を献じ社殿を修築したと伝える。寛文四(一六六四)年には大明神免として田一反三畝余、畠一反七畝余計三反一畝程の社領を有した。なお鳥居には享保一九(一七三四)年の銘がある。

甲波宿祢神社を後にして道は下り坂となり、東電箱島発電所下まで下ると前面に田んぼが広がり、その中を群道の如き旧道が西方へのびている。

2 箱島集落から五町田・奥田・新巻集落へ

276 275 274 273

柏原城跡 双体道祖神 八幡宮

甲波宿祢神社 不 明

柏原城の守護神と伝う。六脚鳥居あり

鳥居に享保一九年の銘あり

道祖神(本文)は明和二年のもの

箱島発電所西の田んぼ中の旧道を五〇〇メートル程進むと、箱島から小野上へ渡る中央橋への道にぶつかる。吾妻川右岸の段丘崖の中途である。これから西が通称「なべっこわし」と呼ばれるところで、吾妻川が標名の北山裾におかかるところである。漫食は現在でも続いている。当然のことながら旧道は何度となく欠け落ちてしまった。現在の道は旧道のはるか上部に山を削つてつけられているが、大雨に弱いところである。なべっこわしの難所から斜めに上つてきた旧道は、日影道を横切り五町田へと入っていく。

五町田宿は、伊香保より下つてきた道と三国裏街道が交差するところであり、江戸時代には「一夜千両」の繁昌を誇つたところという。「諸業高名録」には、新沢屋、小松屋、和泉屋、叶屋等が広告を載せている。伊香保から下つてきた道が旧道に合流するところに一基の道標がある。右ハ山道と統める。伊香保方面へ向かう旅人が山道に迷いこまぬ為の道標と思われる。

現在の五町田宿は静かである。かつての賣糞屋根の家並はほとんど建て替えられてしまつた。宿中の旧小松屋幸三郎家(現在佐藤鳳一氏宅)の南側の石垣下に馬頭尊等の石造仏が五六基まとめられており、文化元(一八〇五)年銘の馬頭尊が小さながらもすぐれた作のように見える。

五町田の宿をはずれて奥田川にぶつかるところ、現在の奥田橋の東橋詰北側に旧村社三島神社がある。当社の本社は伊豆の三島大社であるという。興



五町田の道しるべ



五町田三島神社

に鎌倉公方足利基氏の執事上杉憲頼は伊豆・上野・越後の守護職であった。憲頼の臣長尾藤景は白井城を治め、白井城治下の五町田にその尊崇する伊豆三島の一宮を勧請したといふのである。以後白井長尾氏は代々当社を厚く崇拝したと伝える。社殿宝物等は明治十七（一八八四）年に火災にあい焼失してしまった。境内に文化六（一八〇九）年の銘のある立派な文字道祖神がある。

前述した伊香保から下つてくる道であるが、五町田の宿を北へ抜け、途中を五町田の船渡へと通じている。

吾妻川の対岸村上へ渡る渡船のあつたところである。般渡への道の途中、

畠中には墓地がある。

墓地中央部に一

対の灯籠を有する立派な石殿があ

る。これが古来眼病治療のお地蔵様として村民の信仰のあつた「子育て地蔵」である。境内には文永一二（一二七五）年の阿弥陀三尊板碑と応永一六（一四〇九）年の五輪塔がある。ここには文永年中創建の南沢寺という寺があつたと伝えられる。

奥田に至った旧道は、現在の奥田橋の南側、数軒の家が建てこんでいる中を南へ進み奥田橋の上流（南方）一二〇メートル程のところで奥田川を渡る。対岸に旧道の痕跡がわずかに残っている。奥田小学校の南の道端に石造物群がある。「奉納四国西國（坂東）供養塔」宝曆六（一七五六）年の銘がある。又、享保二年三月（一七二三）の銘のある青面金剛等數基の石造物が草の中にひっそりとたたずんでいる。この石造物群のところを西へ折れ前方の高台へと上る。現在の奥田への東入口にたどり着いたわけだ。奥田宿は坂の多い宿である。宿に入つて間もなくの右側に、道からややひつこんで大きな「くず屋根」の家が見える。往時丸（山九）と称された、奥田の名主飯塚九郎兵衛宅である。「諸業高名錄」には、「太物小間物阿良もの、吾妻郡奥田村、御泊宿、飯塚九郎兵衛」とあり、店先の様子を絵で紹介している。

山道をたどつて上り下りする旧道を進み、山根集落に至る。道の左手に一本の道祖神像が見える。無銘である。

旧道は間もなく下り坂になり、坂を下りきつたところで交差点となる。新巻である。

交差点の左前方に見える寺が長徳寺である。本寺は日照山長徳寺と号し、曹洞宗双林寺の末寺である。寛永年中（一六三〇年代）に双林寺四世雪峰闡悦大和尚によって開かれたが、文政七（一八二四）年の火災で焼失のため詳細は不明である。なお、当寺の欄間及び錦杖は東村指定の文化財となつてゐる。

長徳寺より南へ四〇〇メートル程上つたところに池の薬師の御堂がある。この薬師堂は急な山の西ふところに湧出する泉水の傍らに建つてゐる。薬師は諸病から人々を救済してくれる仏であるが、この薬師は特に眼病に驗ありときれ、昔はこの湧水をくみとつて眼につけたといふ。又、薬師堂の右側の山下に古池の跡がある。これが有名な真田伊賀守時代の水牢の跡だといふ。現在はコンクリートで改修されているが、往時は一~二尺の水深があり、年

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

御園觀音は吾妻三十三番觀音札所の第三番であり、白木造りの聖觀音である。「春は花夏は橋秋は葉」いつも御園でながめけるかな」とあり、往古より養蚕神として崇拜されてきた。春蚕掃立の頃四月十八日の祭日には、東吾妻は勿論西部諸村の養蚕農家の参詣者で賑う。

境内には庚申塔や道祖神等の石造物も多い。

旧道は前記新道とぶつかったところで消えている。現在の泉沢橋のやや南で泉沢川を渡り、急崖を上り吾妻町大字泉沢から下つてくる道が、日之出集落に出る手前で合流して、日之出で日影道に合流する。

貴未納者は容赦なくこの水牢に投じられたと言う。

道を交差点までもどり更に西へ進む。二〇〇メートル程進むと新しくなった道が右へと折れている。この新道が日影道に出る右角に大正の道標がある。日影道の北側にある御園觀音の右側にみえる細道が、市城の船渡への道である。



池の薬師と水牢跡



御園觀音境内の双体道祖神

2 箱島集落から五町田・奥田・新巻集落へ

No.	名 称	年 号	備 考
285	道しるべ	不 文化元年	馬頭観音 「右ハ山道」
286	五町田の石造物群	嘉永三年	念仏塔「南無阿弥陀仏」
287	三島神社	文化六年	伊豆三島大社を勧請 文字道祖神
288	子育て地蔵	文永二年	石殿、旧南沢寺跡と伝える。 阿弥陀三尊板碑
289	板 碑	応永一六年	伊豆三島大社を勧請
290	長徳寺	宝暦六年	文字道祖神
291	五輪塔	享保二〇三月	石殿、旧南沢寺跡と伝える。 阿弥陀三尊板碑
292	奥田の石造物群	文永二年	伊豆三島大社を勧請
293	水牢跡	応永一六年	文字道祖神
294	池の薬師	宝暦六年	石殿、旧南沢寺跡と伝える。 阿弥陀三尊板碑
295	御園觀音	享保二〇三月	伊豆三島大社を勧請
296	道祖神	無銘	伊豆三島大社を勧請
297	長徳寺	無銘	伊豆三島大社を勧請
298	五輪塔	無銘	伊豆三島大社を勧請
299	奥田の石造物群	無銘	伊豆三島大社を勧請
300	水牢跡	無銘	伊豆三島大社を勧請
301	池の薬師	無銘	伊豆三島大社を勧請
302	御園觀音	無銘	伊豆三島大社を勧請

### 3 新巻集落から植栗・岩井集落へ

吾妻町に入った旧道は日之出から漸く日影道上を進み約一キロ新興に至る。

日影道が西沢川という小流を渡る小泉橋の手前一〇〇メートル程のところで、旧道は二手に分かれている。右手に入る道をたどろう。小泉橋の下流一〇〇メートル程のところで西沢川を渡り集落の裏手を通っていたと思われるが、消滅している。更に太田小学校の北側中原の裏手に続く細道をたどり、北方へ進み植栗城跡の南部を通り、大きく輪を描くように北組の集落を回つ

て南下して田長の觀音堂の東へ出てくる。

植栗城は、山崎一氏によれば、現在明らかな東西一〇〇メートル、南北八〇メートルの城域よりも広大であるらしい。植栗安芸守の本城。築城は応仁二(一四六八)年以前にさかのぼり、以後、吾妻(岩下)の斎藤氏と対抗したりしたが、戦国期には岩櫻方に属して武田と対したらしい。

田長の觀音堂は、吾妻三十三番觀音所の第一番である。本尊は千手觀音である。境内にある桜の古木は周囲三メートル余もあり、その樹勢の盛んであった文化七(一八一〇)年秋七月に、村の俳人達が芭蕉の句碑を建立した。年々や、桜をこやす 花の塵 はせを

筆者は側面の銘より年々坊其堂という人であったことがわかる。

句碑の裏面には主催者八人の句が一句づつ刻まれている。

文化の廻はこのような田舎ま

で文化の波がおしよせ、村の旦那衆も折々に俳句をひねり、連歌を書いたの

である。

境内には石地蔵、馬頭尊等の石造物も多い。

旧道は觀音堂のすぐ北のところを西に入り字上組の北側を通り、吾妻川の崖際を西へとのびていた。白山神社の東側のところまでは消滅している。

白山神社の東側のところまでは消滅している。

白山神社の東側のところまでは消滅している。

白山神社の東側のところまでは消滅している。



田長觀音



岩井の背高地藏



背高地藏

南へのびる道と合流して背高地藏の脇に出で来る。

背高地藏はその名の如く、像高だけで二・五メートル、台座まで含めると四メートルのノッポ地蔵なのである。正徳五(一七一五)年岩井村山根の田中八兵衛、田中十兵衛が中心となり、村人の援助のもとに建立されたものである。また、地蔵尊の左脇に建つ道標には「右 江戸 左 ゼンカウ寺道」とある。この地蔵尊及び道標は元の位置より大分移動されており、地元の人たちは、もっと南の方にあったものを、道の改修にともなって何回か移動したものという。文化財の保護のあり方について考えさせられる話である。

背高地藏の十字路を西へたとすれば、東橋を経て原町の「楓の木」のところへ出るが、この道は新しい道である。旧道は十字路を更に南へ字山根方面へとのびる。

一方、新興より日影道から分かれて左手へ入り、南側の山裾を通る道も旧道である。西沢川、大泉寺川と二本の沢を越えて山麓を走る旧道は、ところどころ消滅してはまた出現するといつたり返りしてある。字山根の集落を左手へ上り上げる細道をたどると、吾妻太郎の墓と伝える五輪塔で有名な長福寺である。

長福寺は真言宗豈山派に属し、碓氷郡後閑村北野寺の末寺である。現在は無住で、本堂は明治一八(一八八五)年に倒壊したので、庫裡を充當している。開基は吾妻太郎行盛と伝えられるが相当の荒れようである。

開基は吾妻太郎行盛と伝えられており、境内にはその墓と称する五輪塔を含めて、三基の五輪塔がある。中央の五輪塔の地輪に「吾妻太郎藤原行盛、貞和五(一三四九)年五月二十五日子の刻」と刻まれて

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

いる。

また、境内の觀音堂は、吾妻三十三番觀音堂の第六番長福寺觀音<sup>(3)</sup>で、本尊は千手觀音である。

長福寺から元にもどり山根の南山際を西へ進めば前述の背高地藏から南下する道と合流する。

#### 3 新巻集落から植栗・岩井集落へ

No	名 称	年 号	備 考
290 287 288	植栗城跡 田長の觀音堂 芭蕉句碑	文化 七年	植栗安芸守の築城? 吾妻三十三番觀音の一番、古桜あり
289 290	石灯笼 地蔵等	正徳 八年	「右戸戸、左せんかう寺道」 吾妻太郎行盛開基と伝える。
291 292	馬頭尊 背高地藏 及び道標	天明 三年	「右戸戸、左せんかう寺道」 吾妻太郎の墓と伝えられる
293 294	長福寺 五輪塔三基	正徳 五年	吾妻三十三番觀音六番
295 296	長福寺觀音	貞和 五年	総高四メートル

#### 4 岩井集落から金井・川戸・長須橋へ

一本の旧道が合流して寺沢川を渡ると金井である。道の右手は一宮神社<sup>(8)</sup>である。

一宮神社は貞觀三（八六一）年に甘樂郡の抜鉢大明神の分靈を勧請したものとえられ、郡内屈指の古社である。境内には元文挿殿の外に明治五（一八七二）年の算額が掲げられている。境内には元文四（一七三九）年の道祖神と紀年銘はないが文字道祖神があり、石鳥居は、延宝六（一六七八）年に沼田真田家の吾妻郡代官一場権左衛門、早川安左衛

門、林理右衛門、伊能十三郎の四氏と郡中の人民が寄進したものである。

神社のすぐ西の一带は金井廃寺跡<sup>(9)</sup>である。金井廃寺については文献的裏づけは皆無といつてよく、村人は「光明寺」の跡と伝承しているのみである。かつて、松井氏の畠中より多数の布瓦瓦が採集されたというが、今は地表採集はほとんど不可能である。昭和初期に地元の金沢佐平氏所蔵の本地採集越瓦四個について、故相川重雄氏<sup>(10)</sup>が鑑定したところ、奈良朝前期は下らないものであろうとされた。

恐らく白鳳期（西暦七〇〇年前後）に、この地に造営された大伽藍の跡であろう。なお礎石は二六個現存しており、そのほとんどが直径四五センチ程の造り出しを有する立派なものである。

一宮神社を後にして西へ進もう。右後方の東橋方面よりきた道と合流した旧道が更に五〇メートル程進んだ左手の高いところに立派な石造庚申塔<sup>(11)</sup>がある。文化一四（一八一七）年のものである。道は更に進んで下郷の集落にかかる。左手にある社が浅間神社<sup>(12)</sup>である。こ



金井の双体道祖神



金井の庚申塔

の辺は大字川戸字七沢<sup>しちざわ</sup>という。

徳治年間（一三〇六頃）に岩櫃城主吾妻太郎行光により甲斐の国から勤請されたと伝えるこの神社は、戦国の雄武田氏とその配下の真田氏に崇敬されたという。参道を進むと石鳥居が二つある。一番古い銘文は延宝七（一六七九）年であり、真田伊賀守時代に相当する。

道が下郷から田中へ至るあたり一帯は、下郷古墳群である。川戸地区には計四一基の古墳が存したというが、この古墳群には計〇基記録されている。

旧道が田辺橋の方へゆるくカーブしようとする辺の左端に美しい双体道祖神がある。残念ながら無鉢であるが、その精巧な作りからして文化頃の作かと思われる。

この道祖神の辺からまっすぐ北へ進むと江戸時代に架せられた田辺橋のあつたところに出る。この橋を渡り原町側の崖を登れば善導寺参道入口あたりに出る。

旧道は西へと続き、大戸から原町への道を横切り、内出の集落へと入つて行く。

内出の集落はそのほとんどが内出城の遺構である。旧道は旧城の外堀跡を走り、途中に安政五年の立派な常夜灯（台座が道標になっている）があり、これが櫻名山道との追分になつていている。内出城は、南北朝時代の延文二（一三五七）年に、父吾妻太郎行盛を失つた遺児の千王丸（兼藤惠行と名乗る）が、宿敵里見氏を滅ぼして吾妻を復した時に築城されたという。城は吾妻太郎行盛の腹臣秋間刑部貞勝の子泰則に与えられた。

内出城跡を抜けた旧道は日影道に出て二〇〇メートル程進む。右手に見え  
る森が川戸神社である。川戸神社はもと首宮明神と号した。これは、吾妻太郎行盛の首級を祭つたためであり、当社の祭神の筆頭には太郎行盛があげられている。創建は延文年間（一三五〇年代）で太郎行盛の子千王丸兼藤惠行の建立にかかるとされる。慶応二（一八六六）年の火災で社殿神宝境内の森

林をことごとく焼失してしまった。

旧道は日影道上を一キロ程進む。田中の集落で右折すれば長須の橋である。

この辺はすっかり道が改修され昔日の面影はほとんどない。現在の長須橋（万年橋）は立派な鉄筋コンクリート橋で、車で越えると昔の長須橋跡には全く気がつかないで通り過ぎてしまう。

長須橋は一名万年橋と呼ばれる。これは、いかなる増水でも決して流されることのない橋の意である。吾妻川の断崖が两岸からせまつたこの場所に橋が架せられたのは戦国の昔にさかのぼるらしい。江戸時代に入つて、幕府は、三国街道空ヶ橋不通の際の迂回路としてこの橋を重視した。近辺では原町、中之条を結ぶ山田川橋とならんで、郡内三五カ村組合による公儀橋とされた。

長さ一六間（約一九メートル）、幅二間

（約三・六メートル）、

高さ五丈三尺

高さは流水面より五丈三尺（約一六メー

トル）もある。木造

の勿橋であった。万

年補とはいえ木造で

あったので、およそ

一〇〇年にかけ替

えられたようだ。矢

倉の渡家文書によれ

ば、寛永三（一六二六年から天明四（一七八四年）までの一五八

年間に一七回の架け

長須橋見取図



長須橋見取図（岩島村誌より）

替え普請が行なわれている。また、この間に寛保の戌荒れと天明の浅間押しの二度にわたり、「万年橋」は流失している。

長須橋を北側へ渡れば郷原である。

#### 4 岩井集落から金井・川戸・長須橋へ

No.	名 称	年 号	備 考
291	一高神社 道祖神 石鳥居 金井庵跡	貞觀三年? 元文四年 延宝六年	甘樂郡抜鉢大神を勧請と伝う 文字道祖神もあり 右脚の台石は金井庵寺の礎石の一、 二六個の礎石現存、白鳳期の伽藍跡?
292	文字庚申塔 浅間神社 下郷古墳群 双体道祖神 旧田辺橋跡 内出城跡	文化一四年 延宝七年 不 明 安政五年 万延元年 延文年間	鎌倉末期に甲州より勧請 真田伊賀守時代 一〇基の円墳からなる。 真田伊賀守没後落の架橋 道標になつてゐる常夜灯 文字庚申塔 もと首善といい、吾妻太郎の首を祭 神とする。慶応二年焼失 三五ヶ村組合による普請、公儀橋
293	川戸神社		
294	長須橋		
300	中之条町から蟻川・須川宿へ		

中之条町、中之条合同庁舎の前の五本辻と云うか、六本の辻を北の方向に進み、すぐ東へ行く、橋を渡り林昌寺に向かう。今は、ほとんど忘れられた近所の人の大散歩道ぐらいになっているこの道も、かつては、江戸からの旅人や、多くの人々が行きかい賑わつた通りで、三国裏街道、または、大道幹越道、あるいは、越後道と呼ぶ。當時、三国街道の渋川宿の北に李ヶ橋関所があつた。その下の吾妻川が満

水のときは川止めとなる。同時に関所は閉鎖され不通になつてしまふ。そこで川上の祖母島番所に廻らせられる。しかし、そこも渡河出来ないとなると、さらにも上流の厚田、御原に架かる万年橋まで行き吾妻川を渡らなければならぬ。万年橋は相当な水深でも流失することは少なかつたという。そして原町から中之条町に入り、須川宿あるいは中山宿、沼田町へと向かつたのである。出水の多い年では、北国大名でも例外ではなかつた。江戸からの旅人達は、今迄坦地を旅して来て、この中之条から山道にさしかかる。その為の身支度や心構が大変であつたと言ふ。とくに荷物のある者には難儀であつたろう。

林昌寺は、山号を宝満山といい、本尊は釈迦如来仏である。(沼田・真田参照)寺の裏は基地になつておらず、細い道をへだてた西に小高い丘、開山やまだり、この寺の僧侶の墓、無縫塔が數多く整然と並べられ、そのかたわらに瑞徳院殿前伊州大守報山青陽大居士神紙、貞享五(一六八八)年正月十六日他二基の墓がある。この墓は旗本保科氏のもので淡路守正純の墓には岩井村、伊勢村、大塚村、赤坂村、金井村、横尾村、七ヶ村惣百姓と刻されており、その徳を慕い旗本の墓を村人達が建てたもので珍しい。

さて寺の前を東に進み、つき当たりを左折し、北に向かう。このあたりは古き頃の名残をとどめ、赤松の庭木や白壁の土蔵と寺の深い屋根が、美しい影の対比を見せる。さらに北に向かう。県立中之条高校を左に見て、登りの山道にかかる。峰を越え坂を下り、桃瀬川を渡つた所で左に道をとり急坂をのぼる。高津である。

この村は、びっくりする程の傾斜地にへりつくようによつて家々が点在している。公民館と子供の広場の手前、右方はるかの所に、吾妻三十番札所高津観音堂跡がある。

高津觀音堂跡には夏草が生い茂り、石造物が散乱していた。大きなさるすべりの木のもとに觀音様が祭られており、近くの梅の古木の下に馬頭觀音様

があつた。そして旧道は左手に入ったのであろうか、土手の所に白衣觀音菩薩、安政六（一八五九）年八月日がある。さらに坂をのぼると道が二つに分かれる所に道祖神<sup>ミサンカミ</sup>が建つており、車の運転をしていてもはつきりわかる。旧道は左手の方から来て、今の道をなめに横切り、道祖神の前を通り右に行く。

旧道は、右方に進み上りつめてから、坂を下り始める。蟻川である。右側農家の庭に藤棚があり、その下にチョットした腰掛けがおかれていた。昔はこのような所で一休みしている老人を良く見かけたが、昨今はトント見られなくなった。この腰掛けもしばらく人のすわった様子はないようだ。そつと腰を下すと急に小鳥のさえずりが耳に入った。と眼の前の藤の木のもとに道祖神と庚申塔<sup>キミンタ</sup>がみえた。

さらに歩を進めると眼下に川の見える所で道が二手に分かれる。道のすみに、右半分がななめに欠けた、いたいたしい姿の馬頭塼<sup>マヒヅル</sup>が建つてある。右側農家の庭に藤棚があり、その下にチョットした腰掛けがおかれていた。昔はこのような所で一休みしている老人を良く見かけたが、昨今はトント見られなくなった。この腰掛けもしばらく人のすわった様子はないようだ。そつと腰を下すと急に小鳥のさえずりが耳に入った。と眼の前の藤の木のもとに道祖神と庚申塔<sup>キミンタ</sup>がみえた。



蟻川の庚申塔と道祖神



吾妻三十一番札所洗板觀音堂

道は良く見ると、  
舗装されていない

道が一本あり、都  
合四つ辻である。

左に行く道もか  
なり古い道で、新  
田を通りお茶講で  
有名な白久保へと



蟻川熊野神社

続いている。道程  
はそれほど長くはないが、道の端にはいくつかの石造物<sup>せきぞうぶつ</sup>が点々と建てられて

いる。右の道は急な坂を下ると足もとの悪い道がつづき堂の前につく。こんな所にお堂があるとは思えない場所である。また堂の前に立ちおどろいた。身のたけを越すカヤの茂みで近よる事が出来ない。寺も荒れている。

御本尊聖観音様、吾妻三十一番札所洗板觀音堂である。御詠歌（願礼歌）

分入りて 浮身の惡を あらいたの

大悲の誓 深く有川

カヤにおおわれて、二十三基の石造物が、しづかに寄りそつていてる。

堂の右下はすぐ蟻川が流れおり、以前には橋がかけられていたのである。その名残が見える。静かである。

さて、ものとの道四つ辻に戻り、旧道はそのまま直進し橋を渡る。正面左高台に、熊野神社<sup>カミナリジ</sup>がある。

熊野神社は、平安後期に朝廷と貴族社会を中心に、熊野三山の神仰を集めたもので、鎌倉期以後一般庶民に広まつたと云う。境内には、大変感じの良い石灯籠が建てられている。奉納御神灯、寛政十一年（一七九九）年八月吉日 信州伊奈郡千良村 石匠白鳥要蔵、一对。奉

納御神灯、年号同じ、町田清興書、一基。都合三基がある。

神社の前は辻になつており、右手の方に広い道が出来てゐる。この道を東に向かうと大塚を経て、中山で三国本街道に入る。さらに歩を進めれば、北上州における經濟・文化の重要な拠点として栄えた沼田城下町へとづいている。

旧道は直進し、おくまんさまの裏をまわり込むように坂を上る。左手に庚申塔<sup>(1)</sup>が見えて来る。そして坂を上り切つて、すぐ、「一刀工」・蟻川波右衛門屋敷<sup>(2)</sup>がある。

杉木立に囲まれた広い屋敷跡は、畑になつており、古井戸や長屋門が残されている。

当時屋敷の広さはおおむね二千坪にも及んでいたと言われば、入門する者も多くの、村民の信望も厚かつたといい、大変な努力を誇つてゐる。

蟻川家の祖は神保姓を名乗る郷士の分家であり神保孫<sup>(3)</sup>を祖とし、その子、吉左衛門は群馬郡櫛田村の刀匠櫛田伝左衛門に師事し、享保二十一(一七三五)年、齡四十一歳のとき刀工となり、元文五(一七四〇)年、郷里蟻川において、京都の日本鍛冶宗匠、四代伊賀守金道から「上州我妻郡、蟻川波右衛門

・耐藤原政吉<sup>(4)</sup>」の称を許され鍛冶した。

二代政吉は、幼少から父について技術を練り、三十七歳の時、父の死亡によって二代を襲名、明和四(一七六七)年、齡四十四歳のとき、京に参内して「上野住蟻川若狭守・耐藤原政吉」と「守」の宣旨を受けた。

作風は小李目よく詰んだ中直刃が多く上手である。ともあれ、辺地上州在に「守」を名乗る刀工がいた事は喜ばしい。五代につづく。

屋敷の西に墓所がある「源海龍泉居士・蟻川波右衛門耐藤原政吉 宝曆十一年(一七六一)年十一月四日歿」若岸本州居士・若狭守政吉 安永三(一七七四年正月四日歿)他の蟻川家代々の墓が並び、掃除もゆきとどいている。

刀工の屋敷跡より、また下り坂をこぢらげるよう下る。なから急である。



蟻川家の墓所

左の辻に庚申塔<sup>(5)</sup>や、櫻の下に道祖神<sup>(6)</sup>があった。さらに蛇行をして広い道に出る。赤坂川である。川を渡つて右に行くと、先ほどの蟻川の所からの道と一緒になり大塚を経て沼田の方に行ける。

辻の所には、年代の新しい道標があり、高台にちょっとと広い所がある、薬師塚<sup>(7)</sup>といつており、石造物が沢山ある。なかでも、宝鏡印塔、安永二年(一七七三)年初四月八日、は遠

の方からも良く見えて、なかなか良い雰囲気を持つてゐる。そして、この塔の屋根の垂木の彫刻も良く、軒先の部分に釣金具が付いてゐる。この釣金具(写真)、今迄他の塔では気がつかなかつたが、これから見ると、四隅のすみ木の所には、風鐸(風鈴様のもの)でも釣下げたものであろうか。風鐸が風にゆれる様子が目に浮かび、音がおごそかに聞こえるようだ。

また、大変出来の良い、聖観音像があり、背の部分に、享保六年(一七二一年三月廿日透茎元身禪定門と刻んである。形は小さいが未開蓮を抱きかかえるように持つた姿は良い。

また対岸の高台には、石殿や、享保十一年の双体道祖神や天明四(一七八四年)年の馬頭觀音像、秋葉神社塔などの石造物が建てられ、近くの、赤松の岩の上には梵字のみの塔や歌碑が建つてゐる。

旧道は、辻を曲らずに直進する。つまり川を渡らないで北に向かう。しばらく行くと左道邊に、二十センチ位であろうか、石仏が河原石の上にチヨコ

ンとすわっていた。こんなに小さい石仏を野天で見たのは初めてであるし、先ほどの聖観音像と共に、心ないものに持ち去られるのではないかと心配である。

この道は静かでとても気持ちが良い。そのまま直進。道はほしい。左には五十段ほどの小さな石段の上にお宮があり、右に百番塔<sup>(百)</sup>が建てられている。眼を対岸に転すれば家々が並び庭木の緑が陽にかがやいて赤松の朱色も美しく映える。正面に大きな家が見えて来る。この庭にある老赤松は一見に値する程大変大きくて力強い。ここで橋を渡り左に進む。道はほそくやや上ると民家があり左にそれで右に曲り込んだ所に、道祖神<sup>(道祖)</sup>がある。双体像のものと文字塔であるが、文字塔の方は土手に斜めに埋め込まれている。この道祖神は字を刻つてからここに建てたものが埋つたものか、あるいはここに自然にあった岩石にそのまま字だけを刻つたものかは興味が起きる。



20cmにも満たぬ石仏



轍石手前の木橋

この道祖神の所から右に入る山道があるが古い頃はここから長坂へ向かったと思われる。

道なりに歩を進める。右から山がせまり美しい流れの赤坂川は、道よりも左やや下の方を流れおり、ゴゴゴウと言う滝の音が聞える。弁天測<sup>(弁天)</sup>と呼んでいる。右手の道上に石仏<sup>(石)</sup>があった。昔はもちろん人目にふれる所にあったのであるが、今では忘れ去られている。ちょうど地元の五十がらまりのおばさんが通つたので聞いて見たら、初めて見た……という。そして私の姿をけげんな顔付きて見て去つていった。

ここは行沢<sup>(行沢)</sup>と言う所であるが、ここを赤坂のなめつざわ、対岸を鶴川のなめつざわと呼んでいる。やや先に進むと左下に下る道があり、ちょっと入つ所に、百番供養塔<sup>(百)</sup>があった。もとに戻りさらうに進むと、左に大きな杉が見えて来る。相当な老杉であるがとくに太いのは立枯れしている。そのもとに、大黒天<sup>(大黒)</sup>他の石造物が立ち並んでいる。

少し行くと左に古い木の橋が見える。轍石<sup>(轍石)</sup>に行く古い道であるが、今はまったく使われていない。現在はほんの少し上流の所に新しい橋と道が通じている。

古い橋は板張りで作られており、いかにも古めかしい。時代劇に出てきそうな代物で、今しも刀を差した武士や、振り分けの荷をかついだ旅人が現われてくるようである。

橋の向こうには、それこそ平で大きな一枚岩の上に水が流れ、そして滝となつてお、紅葉の時期など景色は抜群である。そして橋のたもとに、水車小屋<sup>(水車小屋)</sup>があつたのであろう、石ウス<sup>(石臼)</sup>がボツンと草叢の中に置かれたままになつてている。

さてここからは山道に差しかかる。心細くなるほどである。しばらく進むと左に入る細い道があり、人家がわずかに見える。長坂<sup>(長坂)</sup>である。ここから昔の道は一気に、轍荷穴<sup>(轍荷穴)</sup>と言う所迄上つて行く。車は通れない人馬のみである。

車道は相当蛇行し、遠回りして柄塚と言ふ集落を通る。集落の真中あたりの

「アービン」を曲り込んだ所に、ひどくやれた寄合所みたいな建物があり、石造物が群をなしている。双体道祖神や宝鏡印塔、元禄七（一六九四）紀年の

庚申塔などがある。道の左下には石灯籠と非常に大きくな黒天<sup>(1)</sup>があり、共に、文化元（一八〇四）年と元治元（一八六四）年の干支「甲子」の年に建てら

れている。

さらに進むと、稲荷穴<sup>(2)</sup>と言う所で旧道と一緒になる。

右の小高い所に馬頭観音<sup>(3)</sup>他が立ち並んでいる。左方の畠の中には、手前

古い五輪塔と墓石<sup>(4)</sup>、遠くには笠付塔と如意輪觀音像が置かれており、誠に雰囲気が良い。

ここを過ぎると、崖をなした岩の山がせまり、いやに、ひょろつとした背の高い赤松が見えたりする。車道は左の方に行くが、旧道は直進し山の中に入り、そのまま上りつめて大道幹に行きつく。

大道幹は、現在吾妻、利根、兩郡の境であるが、その昔（江戸時代）はさらにも先の須川宿（赤谷川境）まで、吾妻郡であった。

旧道は幹の所へななめに上って来て、すぐ県道を横断し自動車道とは分かれで坂を下り、入須川の分岐点に出る。そして真っすぐに進むのであるが、

左に進むと奥平<sup>(5)</sup>というへんびな村に行く。坂を上り切る手前に道標があり、

上り切った所には、沼田横堂三十三番札所の内三番奥平觀音堂がある。御詠歌、「迷來て うきめ深山の奥平かかる里にも 月照らすらん」。近くには奥

平温泉もあり、さらに進むと、川手山<sup>(6)</sup>、県天然記念物「入須川ヒカリゴケ自生地」があり、大黒爺や妙名洞、石門など名所も多い。また、馬鳴洞には

お蚕の神様の馬鳴菩薩の大石像が祭られている。さらに進むと八キロで四万温泉へと行ける。  
もとの入須川の辻から、県道にそいまつすぐにだらだら坂を下つて行く。

右手に学校を見て進むと右手高台に、お堂<sup>(7)</sup>が見え、左手ちょっと低くなつた



入須川大庚申塔

所には、石殿と大庚申塔<sup>(8)</sup>がある。この庚申塔、塔<sup>(9)</sup>は町田延慶（中之条・山田）の書になり、延

陵は儒学徳行を以つて遠近に聞え、殊に書道においては角田無幻（勢多郡、

津久田）と並び称された人物である。

この庚申塔のすぐ下の農家の庭には、またまた大きな、一位の木がある。

一位は名称も良く、神主など東帝のときに持つ「しゃく」に用いる木と聞く。

一般には天井板、床柱、細工物、鉛筆などにし、葉は糖尿病の薬に用いるところ。

云う。さらに進むと右側の農家と家の間に石仏<sup>(10)</sup>があるが、ちょっとわかりにくく。さらに進むと、左に雨宮神社<sup>(11)</sup>が見えて来る。社は荒れしており、境内に石造物などがある。

右山手には、子育不動<sup>(12)</sup>がある。昔の家には、居間の真中に開戸裏があつた。火をかこんでの団欒が生活の中心であり、子供たちの火傷は日常茶飯事であり大事に至ることもあった。このお不動様は、子供をヤケドから守る神様といわれ、七つの子になると、おがんじょをして火伏せ剣（金とか木で剣の形を作る）を上げ、これからも丈夫に育つようにと拌む、昔は大いに賑わつたという。道の右には庚申塔<sup>(13)</sup>があり、すぐ先を左に入る道があつて恋越と言ふ集落に行く。いかにも名前が良い。橋を渡つた右にお堂があり、さるすべりの大きな木の下に宝鏡印塔<sup>(14)</sup>などが並んでいる。坂の上には、大変大きな「吾妻太郎の桜」があったと言うが今は枯れてない。

恋越観音堂のところには石造物がいくつかあり、山手の方には、子育鬼子母神の小さな社がある。山の上には、恋越神社があり石殿が並んでいる。これからは恋越の村が望のもと、ながめは良い。もとの県道に廻り旧道は、さらに直進する。小さな橋があり、たもとに大きく立派な、石地蔵が、赤いヨダレ掛けをして立つておわす。お地蔵さんから少し進むと、正面に石切山が見えて来る。ここから切り出される青石は、建築材に相当切り出された事もあつたが、凍みに弱くそれ易い欠点がありひとこぼ出ない。旧道はこの所で右に入る。川添いに下ると、左の柿の木の下に、いかにも雰囲気の良い、庚申塔、双体道祖神が建っている。庚申塔の字も美しい。また近くには、鶴ヶ瀬の童神様の石宮が祭られている。庚申様より、やや左に坂を上り始めると田んぼの端に、大悲百番供養塔と道するべがある。是より右沼田、左越後道とあり、右に進むと、布施宿から三国本街道に入り、塚原宿を通り江戸へ、あるいは月夜野町を通って、利根川を舟で渡って、沼田城あるいは城下町に行けた。

道するべの近くに、沼田横堂三十三番札所の内一番塙原の岩渕観音堂があり、石造物もある。なかに、二重の塔で、全体荒い彫りの作りであるが屋根の垂木を細かく彫り込んだ塔身の正面上段に、十字が刻つてある塔があった。



岩渕観音堂境内二重塔

底より深き  
ちかいなるもの  
岩渕の  
あだにはいわく、  
の御詠歌は、  
あらとうと、  
キリシタンに関係があ  
るのか、あるいは單な  
る模様なのか。觀音様

No	名 称	年 号	備 考
301	庚申塔	元禄 四年	吾妻三十番札所高津觀音堂跡、他に 石造物あり
302	白衣觀音菩薩	天明 三年	
303	道祖神	文化 六年	藤棚の下
304	道祖神	寛政 八年	江戸 戸
305	道祖神	寛政 八年	右半分欠 文字が良い
306	庚申塔	天保 十四年	
307	馬頭尊(像)	寛保 三年	
庚申塔		他あり	

須川宿及び秦寺、大庄屋役宅は歴史の道第三集「三国街道」に詳細、参考照の事。

この近くには立派な石地蔵があり、そこに県指定天然記念物「東峯須川地蔵像」があつたが惜しくも今は枯れてしまった。道するべの所から左に進むと県道に出る。左手山手には、名利曹洞宗・秦寺寺があり、「本堂の須弥壇及び欄間の彫刻」と、「山門」が県重要文化財に指定されている。県道を東に進むと、まもなく三国街道、須川宿に入る。

堂の先には、赤い鳥居のある神社があり、道祖神が多数建てられている。旧道は、道するべに、左越後道とあるように左に進む、急坂を上り県道を横断して山越えをして、青木というバス停の所で、また県道を越えて田んぼの方に向かう。左手県道の端には道祖神や庚申塔がある。

その先には、県重文の「旧大庄屋役宅書院」がある。役宅の東の辻には石造物がキチンと並んでいる。

旧道は、青木バス停の所を東に向かい田んぼの中を通ると辻に出る。柳の木があり、お庚申さまと、道するべがある。右ぬまた、左ゑちご道とある。

III 吾妻の諸街道の現状と文化財

324	223		321	320	319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308	
五 石 輪 塔	大 黒 天	庚 申 塔	大 乘 妙 六 十 六 部 回 国	百 番 塔	三 宝 布 依 庚 申 供 養 之 塔	日本 回 国	馬 頭 尊 (像)	金 剛 明 王 (像)	猪 田 彦 大 神	大 黑 天	双 体 道 祖 神	宝 印 塔	奉 納 百 番 供 養 塔	石 佛	石 佛	石 佛	洗 板 觀 音 堂
元 文	天 正	延 享	元 文	光 明 真 言 供 養	熊 野 神 社	刀 工 錫 川 家 代々 之 墓	庚 申 塔	刀 工 若 狹 守 政 吉 鐵 刀 跡	馬 頭 觀 音 (像)	道 祖 神	宝 印 塔	念 供 義 塔	度 申 塔	度 申 塔	度 申 塔	度 申 塔	光明 真言 供養
文 化	江 戸 中 期	江 戸 中 期	元 文	文 政 十 二 年	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	江 戸 中 期	宝 印 塔
安政	正 德	正 德	元 文	文 政 十 二 年	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德	正 德
元 治	嘉 水	嘉 水	天 正	文 政 十 二 年	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水	嘉 水
元 年	萬 延	萬 延	延 享	文 政 十 二 年	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延
文 化	江 戸 戸 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戸 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶	江 戸 戶 戶
安 政	幕 水	幕 水	元 文	文 政 十 二 年	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水	幕 水
元 治	萬 延	萬 延	天 正	文 政 十 二 年	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延	萬 延
元 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	延 享	文 政 十 二 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年	甲 子 の 年
文 化	享 保	享 保	江 戸 戸 戶	江 戸 戸 戶	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保	享 保
安 政	寛 政	寛 政	江 戸 戸 戶	江 戸 戸 戶	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政	寛 政
元 治	明 和	明 和	江 戸 戸 戶	江 戸 戸 戶	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和	明 和
元 年	九 年	九 年	江 戸 戸 戶	江 戸 戸 戶	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年	九 年
古い、他如意輪觀音像などあり	書家 の 銘あり		武 州 江 戸 青 山		開 四 月 二十一 日	他 有り		石 仏 と 石 の 台 座	双 体 像 と 文 字 塔		姿 が 小 さ い	來 出 良 い	他 石 造 物 多 數				吾妻三十三番札所ノ内三一番

365	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	332	331	330	329	328	327	326	325	
秦 寮 寺 山 門	桃 山 時 代	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	
寛 水	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保	天 保
十 年	三 年	三 年	四 年	五 年	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸	江 戸 戸 戸
					庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	
県 指 定 重 要 文 化 财	八 基 並 て いる	右 ぬまた	左 あらひの道	道 しるべ	泰 寮 寺 須 弥 墓 間 影 刻	道 祖 神 あ り	神 社 境 内	道 祖 神 多 数 あ り	是 より 右 沼 田	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	沼 田 横 堂	
沼 田 横 堂 三十三番札所之内三一番	中 之 采 町 田 延 裝 書、純 高 三 米 宗	農 家 軒 下	お 堂 あ り	石 造 物 あ り	子 供 の 火 傷 に 効 あ り	古 宝 印 塔、石 殿、馬 頭 觀 音 他	石 殿 あ り	字 が と て も 良 い	道 祖 神 あ り	地 藏 尊 石 像	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔
奥 平 觀 音 堂	お 堂 あ り	石 造 物 あ り	子 供 の 火 傷 に 効 あ り	古 宝 印 塔、石 殿、馬 頭 觀 音 他	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	恋 愛 神 塔	
馬 頭 觀 音	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	

## 中之条町から岩本・大道跡へ

中之条町、おおくにじょうまち 大国魂神社<sup>(おほくにじんじゃ)</sup>を左に見て、右に廣盛酒造の前を北に向かう。(大國魂神社、他の項参照)

四つ辻の所に年代の新しい道標がある。そのまま直進するのであるが、右に入った所に、まことに小さな、金毘羅神社<sup>(こんびらじんじゃ)</sup>があり、まことに大きな大黒様がある。安政五年(一八五八年)孟冬吉旦、神祇御霊像石工匠、越後国魚沼郡高島佐野文藏英栄<sup>(おとしやさ)</sup>作。中之条石工、町田文五郎元弘<sup>(もとひろ)</sup>作。

左には、柴宮神社<sup>(しばみやじんじゃ)</sup>がある。赤い鳥居をくぐり、石段を登ると、石灯籠<sup>(せきとうろう)</sup>が目に入る。灯籠の脚部、竹の簡のように節を彫り出して、竹の葉を切りつけていておもしろい。

境内には、石殿が十一基並んでおり、道祖神などもある。

また、神社の左下には、教智院と言ふ権名神社の別当寺の跡もある。さら



柴宮神社



嵩山

に裏山は、「城峯城」の跡で、本城は東西八〇メートル、南北七〇メートル、西側は細切られ、その余土は内側に盛られて、高さ三メートル長さ五〇メートル程の土居となっている。

西側は細切られ、その余土は内側に盛られて、高さ三メートル長さ五〇メートル程の土居となっている。多くの四つ辻に戻り、そのまま直進する。右に中之条役場が見え、すぐわきに、泥流丘と呼ぶ小高い丘がある。火山により、二万四千年前に出来たと言う。

その先つき当たりを右に、そして四つ角を左に直角に曲つて県道にそつて進む。胡桃沢川を越えて直進左手に石灯籠<sup>(せきとうろう)</sup>が見える。脚部には三峯山と書いてある。山がせまって来る。旧道は車道から右に入り、少し先で左に入つて、大きく曲り込んだ所で県道を横断する。そして、白久保へと向かって行く。

親都神社を回る道もあったであろう。

ここから、嵩山の岩塊が戦慄<sup>(せんりき)</sup>をおぼえるように迫る。里はまだ昔風の家並が多々、時代がさかのぼるような感じがする。



白久保村道祖神

旧道を上つて行くと、桃源川のほとりに元禄九(一六九六)年十月十五日という、大変に古い、双体道祖神<sup>(ふくたいどうそじん)</sup>がある。白久保の道祖神と云つて形もちよつと變つていい。すぐ近くに道祖神橋も架かっている。

坂を上りつめると、お茶講<sup>(おちゃこう)</sup>で有名な白久保のお天神<sup>(おあめ)</sup>につく。一八五の石段を登った所に、ガランとしたいかにも質素なお社がある。石段が長く急であつただけに拍子抜けしてしまう。

「お茶講」は、県重要無形民俗文化財で、白久保の氏神天満宮の宵祭りと

して一月二十四日、二月二十四日の夕食後に行なわれる。お茶は、珍皮(みかんの皮)、天茶、渋茶を各々ホールで煎つて茶臼(みを)でひく。そしてきめられた割合にませ合せ、天神様に供える。そして部屋に塩をまき清めてから、茶をたてる。お茶は口でふくんで味を見る。四、五人のまわし飲みで、老の茶、式の茶、参の茶、客の茶の四種類のものを七回飲んで銘を当てるものである。ちなみに巷の茶の割合は、チンピ(一)、シブ茶(二)、アマ茶(三)、式の茶はチンピ(二)、シブ茶(三)、アマ茶(一)である。実際には相当複雑で厳格な仕事たりがある。

旧道は、ここから左の山をまわり込み、ゴルフ場の中を通り、しばらくして、切り通しの所から県道に出る。さらに進み曲り込んだ所(上の台)バス停がある。その右に道が拡幅されるとき集められたのである、お地蔵さん、双体道祖神、馬頭尊などがキチンと並べられている。ここから左に入る、大岩本から寺社平、四万の方に行ける。そして、この道筋には、岩本の神保家という大変大きな民家がある。通称ヤマセといい、岩本の有力名主神保彦左衛門から分家し、吾妻郡内の山林から木材を伐採し、イカダを組んで吾妻川から利根川を流して江戸へ送り、主に江戸で商売をした。一時は本家をもじのぐほどの勢いを誇ったという。今は本家も家系が絶え、この家の最後の当主、あささんも昭和四十九年、九十二歳で既に亡く、屋敷と家屋だけがとり残されている。

神保家は、安政元(一八五四)年建立されたといわれ、桁行十五間半、梁間八間、唐破風の式台(玄関)を設け、兎毛通し(破風板の中央の装飾)に龜を懸げ、立派に床、棚、書院を有し、はなれ、長屋門という大規模な構えである。

農家(農)の庭に庚申塔がまつられている。これはちよつと珍しい例であろう。

そのまま進む。道より右下に、やや荒れた感じのお寺、青竜寺(せいりゆうじ)が見える。岩本である。

旧道は、県道と分かれ左に入り、せまい坂道を上る。左手に、庚申塔と馬頭さんがある。そのまま上ると、赤い鳥居が見えてくる。

鳥居をくぐり、やや平らな人のやつと通る細い道をしばらく進む。いきなり、キジが三羽ほんの近くを、羽音はげしく飛び立ちびっくりしたが、なるほど大きな鳥の自然な飛び立つ姿は良いものだと思った。するとカヤ墓(カヤツツキ)の大きな門が見え、やがて静かな山の中から水音が聞こえて来た。滝である。十メートル以上あるか、山の上から一段に水が落ちて来る。大変素晴らしい所であるって、しばし時を忘れる程である。老松も美しく、赤い橋を渡ると、お不動様の社殿(しゃでん)である。こんな良いところがあるとは思いもよらなかつた。

一方、車道の方は回り道をして進む。途中蟻川の方からの道と一緒にになる三差路の小高い丘の上に、双体道祖神や、とてつもなく大きな庚申塔などがあつた(写真)。

県道はそのまま進み、鳴石がやがてまもなくと言う所、八幡神社の手前で、旧道が県道に出る。ここには清水が湧いている。当時の人々が旅の途中で、水にありつける事は、四季を問わず大変な喜びであったと思う。さらに旧道は県道を横断して、右の山道に入り、八幡様の所に出る。右の小高い山のとつたんに、石造物群がある。十二、三基程あってながら、宝塔は大きくて力強い、まだ、お地蔵さん、安永三年(一七七四)年卯月七日鳴石邑中の台座が道標になつており、右志ま、さあたり、くさつ 左中之条とある。

さてともに戻りお地蔵さんの所からさらに先に行くと、ちよつと道が広くなつて左に、天狗(あまご)さんを、小さな社でまつっている。すぐその先では、八幡神社(はちまんじんじゃ)は、坂の途中にあり、小さな社が建てられており赤い鳥居のものと、双体道祖神がある。この神社からさらに右に進み、坂をのぼると、鳴石(なづか)

につく。鳴石は、大きな岩塊で、岩そのものが神様になつてゐるという。石殿や宝篋印塔、石灯籠などがある。

鳴石のあたりは道がせまい。くねくねと蛇行する事しばし、やがて広くなる。



鳴石の巨岩



道祖神



富沢家住宅

しばらく進むと、右手から入って来る道がありその角に、石造物が並んでゐる。すこし行くと左に上の道が見えて来る。それを上つて行くと、馬頭観音様が岩の上にあり、

その先右に下つた所に、

「中之条町から、岩本・大道跡へ」がある。  
富沢家は、代々名主を勤め、現当主で二十四代目と伝えられている。建築は、寛政四（一七九二）年の建立で、桁行十三間半、梁間七間、草葺前兜造り、床、檼、書院を付けている。  
当家は大名主を勤めた家柄で、建物も上級民家に属し、中之条地方を代表する養蚕農家として屋根に前兜造りの特色ある外觀を呈し、保存も良く建築年代も明らか故、昭和四十五年国指定を受けたのである。

この村の名は大道である。  
もとの県道にとり、そのまま直進すると間もなく大道跡につく。

大道跡から須川宿迄は前文を参照のこと。

No.	名 称	年 号	備 考
355 354	大國魂神社	安政 五年	近くに「中之条天王石」あり
533	金毘羅神社	享保十四年	神祇御靈像 石工越後佐野文藏他
352 351	大黒天	寛政 七年	二対四基、灯籠の脚竹の模様彫り
350	柴宮神社	天明 六年	十一基(道祖神などあり)
349	石燈籠	宝曆 九年	寛政七年と嘉永六年
347 348	石燈籠	江戸 戸	灯籠の脚部に三峯山と書いてある。
(傳)	奉納百番供養塔	元禄 九年	年代特に古い
庚申塔	双体道祖神	江戸 戸	お茶請（白久保）県重要民俗文化財
庚申塔	天満宮	享保 四年	石殿の途中にあり
庚申塔	猿田彦大神	延享 五年	他石仏あり
庚申塔	地蔵菩薩念仏供養塔	享保 五年	天狗様を祀る
庚申塔	双体道祖神	延享 五年	農家の庭にあり

### III 吾妻の諸街道の現状と文化財

四万温泉道  
中之条町から四万温泉へ  
四万温泉は、草津温泉に次いで吾妻を代表する、歴史の多い温泉地である。したがつてそれに通ずる道も早くから発達していたと思われる、道の通つた場所や、道の本数も時代により変つて來た事と思う。

よつて、道の確定の中之条町から、四万温泉への道定で述べた如く、特に利用されたと思われる道に沿う文化財をたどつてみる。

中之条町の大國魂神社を左に見て、右に廣盛齋造の前の道を北に向かう。大國魂神社の社は、神社一般に見かける建築とは、大変に異なり、珍しい。そして、お宮に施した彫刻も素晴らしいものである。

この神社の近く鍋屋旅館の庭には、町指定重要文化財「中之条の天王石」

364	363	362	360	359	358	357	356
青竜寺 庚申供養塔	馬頭尊(像)	不動尊 塔	宝塔	地蔵尊(道標)	馬頭尊(像)	不動尊 塔	青竜寺 庚申供養塔
嘉永四年 名瀬あり、松も良	江戸 右志ま、さあたり、くさつ 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良
宝印塔 石灯籠	石造物群あり 馬頭観音	双体道祖神 大安了道津定門	大黒天 馬頭觀音(像)	江戸 宝曆七年 元治元年 寛政五年 嘉永二年 文政四年 江戸 甲子建之他、馬頭尊(像) 岩の上	江戸 右志ま、さあたり、くさつ 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良	江戸 左中之 名瀬あり、松も良
富沢家住宅	宝印塔 石灯籠 馬頭観音	双体道祖神 大安了道津定門	大黒天 馬頭觀音(像)	甲子建之他、馬頭尊(像) 岩の上	八幡神社 石燈一基 国指定重要文化財	八幡神社 庚申塔	八幡神社 庚申塔

がある。沼田城主真田伊賀守が、市場の市神様、天王宮を創建した、そのときのお宮の台石が天王石である。

北に進み、つき当たりを右に曲る。泥流丘、大国魂神社、柴宮神社等この辺の文化財は、沼田、真田道や他の頃で述べられているので省略し道を急ぐ。まもなく進むと信号機のある四つ角、ここを左に曲り、やや進むと胡桃沢川に至る。この川に架かる吉池橋を渡つて、すぐの所を左に入るさせまい道がある。

この道が、当時四万への道として、湯を浴びに向かう人々や、土地の人達に広く利用され駆けた道である。今は、見る影もなくびれ果て、粗末な鋪装がされてはいるが、せまい道の真ん中で、日さなかだと言うのに、放し飼いの大犬が寝ている仕未である。

道にそつて、少し進むと、右に上る道がある。この右山手の所に、百八十番供養塔(三基)、少し上った所に、元禄元(一六八八)年と見える庚申塔がある。ここは柴本である。

道は静かで、鳥の声も耳に近い。少し進み、沢を渡つた左にも奉納百八十番供養塔がある。また少し行くと、左道下に双体道祖神が土手に倒れかかっている。右山の奥にも双体道祖神がある。また少し進んだ左側にも、やはり、双体道祖神があり、やわらかい日ざしを受け、株の先にトンボが止つていた。わずかの道のりの間に双体道祖神が四つ程あつたが出来はみんな良くない。

柴本をすぎ、大久保に入る。

ここには、県天然記念物、「大久保のナツグミ」がある。樹高十メートル、太さ目通り二・五メートル、樹令三百年以上という。

昭和五十七年九月に襲つた台風は、各地に大きな被害をもたらした。ところ吾妻地方は、強風による樹木の倒壊が各地で見られ、この大久保のナツグミも、風により倒れてしまい枯死が心配されたが、その後、保護処置が施され現在樹勢は旺盛である。

まもなく正面の高台に、石垣を高く積み上げ、屋根に千木を乗せた大きな母屋に、白壁の土蔵、はなれ、物置小屋と松などの庭木と言った感じの良い家が見えてくる。旧道はこの四つ角を左折して、川の方に向かうのであるが、まっすぐに行くと社の所に、男女が両の肩を抱き寄せ、煙草を吸っている大変微笑ましい姿の、双体道祖神がある。肉も厚くどつりしている。

右の坂を少し上った所には、中世時代の五輪塔、宝鏡印塔の物と思われる石片が積み上げられており、千庚申供養塔、十六夜塔など石造物がある。

との辻にもどり、胡桃沢川の大久保橋を渡り、広い道を横切り、急坂を上り成田から裏原に向かう。

このあたりは、見晴らしが誠によく、最近道路も広くなり良い所である。

大きく右に曲り込んだ道の上には、ものすごく大きな、そして立派な赤松がある。

ここでも台風のときに、残念ながら太い枝が折れてしまい痛々しい。松の根外側の所に、左に入るせまい道がある。道は砂利道で、今度はこれまたびっくりする程の急坂を下る貢湯平に出る。そして、寺ヶ平に向かう。

貢湯平には、町指定重要文化財「稻裏神社の懸仏」がある。懸仏は、鏡や円版などに仏像を線書きや鋳出して、柱や鶴居にかけて拝するもので、平安中期の神仏習合の信仰により生れたもので、從来神社の御靈代として祭られていた。この神社はもと、熊野神社と言つたが、明治十年七月、稻裏神を合祀して稻裏神社と呼ぶようになった。そしてこの社に二面の青銅製の懸仏が伝つてゐる。(一)径三十一・一センチ、虚空藏外二体を半肉に鋳出す、鎌倉期のものと推定される。(二)、径十九・五センチ、中央に像がある。鍍金の痕跡あり、室町期と推定され、両面とも無銘である。



裏原の田園風景と榛名山



寺社平観音堂二十一番札所



四万山口温泉街

ものの中にもどり、寺ヶ平に行く。ここには、吾妻三十三番札所の内二十一番、寺社平観音堂がある。御本

尊、聖觀音様。御詠歌、

神仏 み並びたりし

寺社平

此の世あの世を 守り給へや。

境内には、石地蔵さんや供養塔が並んでいたが、奉納大乘妙典や六十六部回国供養の碑面に刻されている天下和順、日月清明と云う葉が心になぜかさわやかに感じられた。また、その左の方には、中世の頃の五輪や宝篋印塔が草の中のあちこちに、うずもれている。

地名の寺社平、御詠歌にもあるように神様、仏様……誠にもって、ありがたい思いがする。

急な坂を下り、橋のたもとの桺の所から、四万川を左に見て、上流に向かつて進む。

現在は、ほとんど道形は残っていない。秋麗の辺り他に一部わかる程度である。中之条四万保育所の手前から、わずか進んだ所で坂を下り国道に出る。ここから、ニタ井を通った道もあったと言われている。国道へ出るとまもなく四万山口の温泉街に入る。

さすが温泉町は他とは違つて、何となくなまめかしさが感じられる。いつも真っ昼間の風景は、けだるい思いがしないでもない。しかし、灯ともし頃ともなれば、街中の表情はもちろん、道行く人々も生々として来るようである。

道はせまい、どこの温泉地もせまいようだ。少し進むと、右側がちょっとした廣場みたいになった所に、書体の変った、庚申供養塔と石仏が並んでいる。さらに、歩を進めるとき見櫛に至る。

この橋を渡りやや行くと左方に、高野細菊の新しい小さなお宮が建てられていた。

そして橋を渡ると四万温泉の新湯である。ここまで来ると、さすがに厭やかであつて、人が溢れていると言う形容がぴたりとする。



稻裏神社の里宮

四万温泉は、四方を高い山にとりかこまれており、稻裏山より流れ出る清冽な四万川の流れに沿つて、日向村、新湯、山口の三源泉群がある。最近は温泉口を加え、渓谷に沿つて四つの温泉街が作られている。

四万温泉の標高は約七百メートル、古い頃から、人が住み、文化が発達していた。すでに縄文時代の石器や土器は四万各地で発見され、住居跡も見つかり、四万遺跡と呼ばれている。

四万はまた、越後に近いため、木の根宿を越えて、遠い昔から文化的な交流が行なわれており、越とを結ぶ重要な交易路であったという。

そして、四万の湯は古い頃より広く知られていたが、とくに三百余年前から蒸湯といふ日本古来より行なっていた入浴法があった。小屋部を密閉して四十〜五十度の水蒸気を充満して発汗療法を行うものである。

昔の温泉は、湯治と云つて療法としての利用が主であったのである。さてもの月見橋にもどり、右の方の道に歩を進める。せまい上り坂をしばらく行くと道は広くなり、

譲葉<sup>譲葉</sup>に出る。

稻裏山は標高一、五九八メートル、四万川の源流でもある。また、夏にはこの峰からあらわれる雷雲は必ず驟雨をもたらすといわれ、この高峰の頂に稻裏神社が祭られたのは、おそらく千数百年以前という。この地譲葉に、文化三(一八〇六)年四月、里宮として小祠を建立し稻裏神社とし、「上野国稻裏地神之碑」

を建てた。碑文は町田延陵が撰文で

書いている。なお前述の貢湯平の熊野神社に明治十年に遷座、稻裏神社と改称したと言。

ここから、左に大きく回り込み、橋を渡り坂を上ると、日向見のお薬師さんに着く。

### 1 中之条町から四万温泉へ



日向見薬師堂(国重文)

ここは辺境の地、山はせまり、谷は深く、いくつかの滝が名所となつていて。日向見の温泉があり、旅館もある。浴客もいるはずなのに、いかにも静かである。

そしてここに、国指定重要文化財、

「薬師堂<sup>(国)</sup>」が建立されている。

薬師堂は、慶長三(一五九八)年に建造され、本願主となつたのは、伊勢国山田の住人で鹿目喜左衛門藤原朝臣家貞と云われており、真伊豆守信幸の武軍長久をも折つて建てたものと云う。

薬師堂とは、薬師瑠璃光如来といい、仏經に「如來の名、東方淨瑠璃國(瑠璃光土)」の教主にして日光菩薩、月光菩薩を脇侍とし、これを薬師三尊といふ。この如來は十二の誓願を發し、人間、天上有漏の苦を医すという。また医王、薬師佛、藥王、善逝ともいいう。

建築の特徴としては、この建物の構造が非常に簡素な点である。必要最小限という言葉がこれほどに適切な建物は類稀れだといえよう。一つの横架部材を外してもカラカラとくずれるであろうと言。

當前に、文化四(一八〇七)年の常夜灯が建つてある。

薬師堂 手前右に山道がある。木の根宿通り、越後の浅貝に出る道であ

No	名 称	年 号	備 考
355	奉納百八十八番供養塔	文政十三年 万延元年	元年と見える。二重
356	馬頭尊 (像)	天明六年 万延元年	西中之条村芝本 倒れかけている
357	庚申塔	天保十年	
358	大聖不動尊	天保十年	
359	双体道祖神	江 戸	両の肩を抱き寄せ焼すり
360	双体道祖神	江 戸	他、中世の五輪塔などの石片あり
361	庚申供養塔	江 戸	大きな赤松がある
362	寺社本尊堂	江 戸	中之条町重要文化財
363	石地蔵	江 戸	百妻三十三番札所ノ内二十一番
364	奉造立念供養塔	江 戸	中世時代の五輪塔、宝鏡印塔あり
365	大聖妙法十六六部回国	江 戸	天下和顕 日月清明
366	庚申供養塔	江 戸	変った書体で書かれている
367	石 仏	江 戸	町田延陵撰並書
368	四万温泉	江 戸	日向見、新湯、山口、温泉口
369	上野国稻裏地神之碑	江 戸	
370	稻裏神社の里宮	江 戸	
371	慶長三年	寶曆二年	
372	文化三年	江 戸	
373	文化三年	江 戸	
374	文化三年	江 戸	
375	常夜灯	江 戸	
376	日向見温泉	江 戸	
377	薬師堂	江 戸	
378	文化四年	江 戸	

親都神社の東端に江戸時代の道標がある。右しま、さたり、左中之条と書かれている。

この道標のあるこの地から、四万に向かつて文化財をたどって行く。  
五反田親都神社は、赤い大きな鳥居があり、参道も長く、石段も切石を敷き、本殿も大きくて雰囲気は良い。道標のところには、道祖神などもある。  
県指定天然記念物「親都神社の大けやき」がある。御神木とされており、樹齢七百年、樹高約十五メートル、目通り径九・七メートル、根元周り十五・一メートル、県下第二位の巨木である。茎圍に三十六センチ程の乳状突起があり、婦人の乳の出ない時に乳型を納めると乳が出るという俗説がある。

桺、さすがに大きい、圧倒されてしまう。右を見れば、これまた、天にとどくばかりの岩山がそびえ立っている。吾妻八景の一つ、嵩山である。ここには、町指定史跡、「嵩山城跡」がある。室町時代中期、白井の長尾氏の支城として開かれ、戦国時代、岩槻城の支城となり、斎藤城虎丸が居城、永禄八年は下つて、元禄十五（一七〇二）年、僧空閑は、村役人と多くの人達によつて、この嵩山に石造觀音像（坂東三十三番）を建立、享保十四（一七二九）年、経塚を作った。これは、嵩山城で悲壮な最後をとげた城虎丸ほかの靈を慰めるため建てたもので、「嵩山百体觀音と経塚」である。

嵩山の麓には、「親都の天王石」がある。ここは、嵩山城の根古屋集落で、親都千軒といわれる頗るいを見せた所であつて、中世に市場が開かれ、その市神天王宮の台石である。  
親都神社から西に向かう。道がせまくなつて、まもなく右側にお堂が見えて来る。「石薬師」である。



親都神社の大ケヤキ



石薬師

お薬師さんは、万病を治療して人の寿命を延ばすことを本願とする仏として信仰されている。この信仰は宗派に関係なく、強く民間に生きつづけており、特に眼病に効験があると信ぜられ、祈願がかなうと絵馬を納める風習が残っている。石造物も沢山並んでいる。

さらに進むと、工事中ではあるが広い道に出る。その右側に「産石」という大きな岩がある。そして産石の左に双体道祖神が見える。道路工事が終った今は、道祖神は左から右側に移り鎮座している。近くには、六十六部供養塔等が立ち並び、道左にも双体道祖神がある。

さらに坂を下つて行くと、左側土手の上にお地蔵さんと馬頭さんがあり、菊の花が手向けてあつた。

すぐ先右側には、「明暦三年の庚申塔」がある。明暦三（一六五七）年十一月、五反田村二十九人の信者が建てた庚申塔だ。大変古いものである。庚申塔には猿がえがかれているが江戸初期のものは、一猿、二猿が多く、この塔

のものは二猿である。(時代が下がると三猿となる。)

庚申塔のところから一、三歩ほど進むと右山手の堂が目に入る。吾妻三十

三番札所の内二十三番、和利堂觀音堂である。御本尊、千手觀音様、御詠歌

にこりしな  
清き沢辺の くわんぜおん

わりの御山の  
誓い願もし

石造物も沢山あり、元禄四(一六九一)年奉供養大日如來講請願成就供、

元禄七(一六九四)年石灯籠、元禄八(一六九五)年、庚申塔(像)等と、

立派なものが多い。

この觀音堂の近くには、「空闊の墓」がある。元禄頃(一六八八)一七〇三年)五反田に住んだ僧で、嵩山百体觀音と經塲の造立や村人の教導に努力された。この功績を讃え、五反田村中、百十八人によつて石塔(墓)が建てられたものである。

四つ辻を右に曲り、小さな沢を渡る。

ここで車の通る道から分かれて左に入れる。人の通るのがやつとの細い道

がある。今ではもちろん人通りもない静かなところである。六百メート

ルでもとの道に出る。十二平である。

左手に石造物がある。大勢至菩薩供養の塔や、中世の五輪塔の宝珠と屋根の部分、それに六角形のつくば

い等がある。右手の方には道祖神があり、辻の角に、年代の新しい道標がある。角柱の右面に中之条、正面、岩本左面に四万と書かれている。四

万と書かれている方には進む。

ここを真っすぐ進むと、やがて五



吾妻三十三番札所和利堂觀音堂

領、ここで義原からの道と一緒になり、寺社平を通り四万へ行く。以下、前文、中之条町から四万温泉へ、で書き記したので以下略す。

## 2 観音堂から五領へ

No.	名 称	江 戸	右しま、さあたり、左中之条
379	道 標	江 戸	御神木 県天然記念物、樹齡七百年
	親都神社		奉納御神前
	親都神社大けやき		
380	富藏觀世音	江 戸	
381	嵩山城址	江 戸	
382	嵩山百体觀音と經塲	江 戸	
383	親都の天王名	江 戸	
384	石業節	江 戸	
385	庚申塔	江 戸	
386	如意輪觀音	江 戸	
	馬頭観音(像)	江 戸	
	日月薬師像	江 戸	
	石燈籠	江 戸	
	如意輪觀音	江 戶	
	馬頭観音(像)	江 戸	
	石地蔵	江 戸	
	馬頭觀世音	江 戸	
	明暦三年の庚申塔	江 戸	
	和利堂觀音堂	江 戸	
	辨才天	江 戸	
	大日如來講請願成就修	江 戸	
元禄	弘化	江 戸	
元禄	三年	江 戸	
元禄	四年	江 戸	
	供養	江 戸	
	町重要文化財 二猿	江 戸	
	吾妻三十三番ノ内二十三番	江 戸	

奉造立地蔵念仏供養塔	享保三年
石灯籠	元禄七年
如意輪觀音(像)	十六夜念仏供養
石灯籠	無盡灯
空闊の墓	常蓮社印塔与空闊比丘
道祖神	寛政十二年
大勢至菩薩供養	寛永二年
双体道祖神	寛保三年
	中世五輪塔片などあり

### 3 菩原集落から君ノ尾・渡戸集落へ

四万への道に、菩原から四万湖の所に出て四万川に沿って上流に向かう、四万への道があるので文化財をたどってみよう。

すでに、中之条町から四万へ、の項で、菩原までは述べてあるので、菩原から歩を進めて行く。菩原は一面田んぼの広い台地であり、一望のもとにまわりが見渡せる。よくに榛名山の連なりは青く、遠景はキラキラと光り、素晴らしいながめである。広い道の中程には農家が数軒寄りそっている。他人は人家はない。前述の旧道菩原から四万へは、この家の所で東に向かったのであるが、ここでは曲らずにそのまま一五〇メートル程、真っすぐに北へ進み左に曲る。そして細い道を行く。つき当たりを右に曲り急坂を下る。まもなく、国道三五三に入る。ここからはほとんど国道に沿って、旧道は進んで行く。

ここよりやや南の方に、県指定重要文化財「宗本寺宝印塔」がある。

先ず、お寺への参道も長く、石段を登り、本堂に至る雰囲気、誠に良い感じである。そして、本堂が視野に飛び込んだトタンにおどろいた。唐破風の向拝上面の装飾彫刻、波乗り龍の緻密な彫り、紅葉に施された若葉に菊の彫りは建立年代の判定に役立つと言わぬ、十九世紀に入ると菊の花の彫りが表れて来るという。そして格天井の絵は、惜し気もなく吹放しの天井に描



宗本寺本堂

かれている。なんとも素晴らしい、息を呑む思いで、しばしうつとりとしまった。

本堂の左側に、宝印塔があつた。さすが県指定重要文化財、まことに堂々としている。

宝印塔は、石造仏教建築遺物として中世に五輪塔、板碑など、ともに多く建てられるようになった。

宝印塔は、二基の勾欄付のもので、勾欄の付いているものは数少ないであろう。

一基は、康永三(一三四四)年の銘あり、父母の追善供養の為建てたもので、塔身には四方仏の梵字が刻られている。他の一基は、康永二年とあり、康永四(一三四五)年の事である。四を二年と書くのは、四が死につながると考えられたためか、日本刀などの年紀にも二年と刻られる事が多い。

国道三五三を、四万温泉に向かつて進む。旧道、いまの道と多少異なるが、ほとんどこの国道にそつていて、

殿界戸の自動車修理屋の前の土手上に、奉納大乘妙典六十六部日本回国供養塔がボツンとあった。そして菩原から国道三五三に入った角には、お天神様の小さな社があった。

しばらく進むと、黄湯平に行く道が右に見えて来るが、その道の所には、

○道祖神がありおもしろい。

四万川に架かる湯原橋を渡ると、まもなく、お堂が右道上に見えて来る。

いかにも荒れた感じではあるが、道祖神などもある。近くには消防の半鐘が

風にゆれていた。

さらには進むと、道の右側には、道祖神や、供養塔などが、ボツンボツンと並んでいるのが目に入る。駒岩に入ると、左の山がやや低くなり、視野が広がった道のわきに、大黒天と道祖神<sup>(1)</sup>が行儀よく並べられている。少し先には、左側山の斜面に、お地蔵さんや百番供養塔などが並んでいる。さらに、しばらく進むと右下に見える四万川、岩が多くなり水のはげしい音が、ときおり聞こえてくる。秋鹿である。新四万温泉へ行く橋の下流、約一三〇メートルの間に、川の水流と石との働きによってつくられる陥穴が、大小八個ある。

県指定天然記念物「四万の陥穴群」である。四万の急流を流れる強い水の力が、川底で転石をまわし、岩盤（凝灰岩）の接触部に凹みを生じ、数万年と言う長い年月にわたって侵蝕したもので、陥穴の大きさは、径二十三センチ×二十一センチ、深さ三十五センチ、大きなものは、三メートル×三メートル深さ五メートルに及ぶ。さらに大きなものも作られるが、それが壊れたのであろう深くえぐれていたり、溝になっているものもある。

さらに進むと渡戸である。右にやや曲りながら橋が見えてくる、渡戸橋であり、南道になつた道と古い橋もかかつっている。

前に使われた橋のものには、元禄七（一六九四）年の庚申塔<sup>(2)</sup>が建てら  
れている。  
この橋から、わずかのところ寺社平からの四万川のやや東を通つて来た道と一緒になる。そして、ほんの一足で温泉街に入る。四万温泉から日向見送は、「四・四万道、1・中之条町から四万温泉へ」を参照のこと。

### 3 裏原集落から君ノ尾・渡戸集落へ

No.	名 称	年 号	備 考
394	宗本寺宝蓋印塔 奉納大乘妙典六十六部	康永 三年	県重要文化財 二基 彫物が素晴らしい

403	日本回国供養塔	天満宮
402	○道祖神	お堂
398	大黒天	大黒
397	双体道祖神	百番供養塔
396	四万の陥穴群	庚申塔
403	元治元年	丸がおもしろい
398	文化十三年	線刻
397	他二基	他二基
396	元禄七年	他二基
403	県指定天然記念物	他二基

## あとがき

群馬県歴史の道調査は、昭和五十三年度より五年計画で実施され、本年度の調査はその最終年度であり、ここに、全十七集の報告書を計画どおり発刊するはこびとなつた。

調査開始当初、調査方法も定まらず摸索の内に始められたが、課内の内容検討あるいは調査員の方々の意見等も取り入れ、群馬県としての歴史の道報告書を編集できたと考へている。

最終年度である今年度の調査は、鎌倉街道・東山道と、これまでの近世の街道と異なる中世以前の道を調査対象としたため、これまでの調査方法では十分でなく、伝承あるいは地図を基に、現地調査を実施するという調査方法をとらざるを得なかつた。その上、鎌倉街道・東山道とも街道そのものの距離が長く、特に鎌倉街道は県内全域に伝承が分布し、各五名ずつの調査員では、県全域を調査するには手が及ばず、県南中心の調査にとどまつてしまひました。また、文献調査等も十分出来なかつたのは残念であった。しかし、これまで鎌倉街道についての調査は、各地域の個々の調査であり、県全域を対象とした調査は本調査が最初と思われる。今後、この調査を基にさらに各地で詳細な調査がなされることを期待したい。

また、東山道については伝承も少なく調査員間でも推定路線の分かれれる所もみられたが、地図等で路線を推定し、それに基づき現地調査を実施し、より確かな推定路線を設定した。さらには、東山道は時代的にも変化していくものと思われ、官道以前、作道したもの、中世にはいつから東山道と三時代に大別して、それぞれのルートを推定し記述した。しかし、これらはあくまで推定ルートであり、確定したルートではない。今後の研究により、さらに確実なルートが設定できれば幸いである。

これまでの調査で最も調査の手が行届かなかつた吾妻の諸街道については、当初計画した範囲、ルートよりさらに拡大し、しかも旧道がほとんど廃道同様の山道であり、そのため、調査員の方々は沢の様な廃道を地道に明瞭に明らかにされ、多大の苦労をおかけしたが、現在道と並行する旧道を詳細に明瞭に記録できることができた。これまで未調査であつた多くの文化財も記録できることは一つの成果であった。

日光の駕往還については、すでに日光への主要街道は調査済みであり、今回の調査はいわばその支道的なものであった。そのため、調査対象は大きく三街道に分かれ、その調整に苦労した。特に根利道は、県内でも豪雪地帯の一つに挙げられる地域で調査も容易ではなかつた。この道は近世においては利根郡と東毛を結ぶ重要な交通路であったが、現在は道幅も狭く、悪路の連続で交通量もわずかである。近世の街道は、現在の道よりも高所にわざかに道形を残すのみで、これまで未調査の街道であり、今回調査できたことは幸いであった。

以上の様に、それぞれ街道の性質も相違し困難点も異なつてゐたが、調査員のご努力により、それらの困難点を一つずつ克服し、各街道ともある程度明確にでき、それぞれの報告書にその成果をもり込んだと考えている。

本年度の調査で、群馬県歴史の道調査は完了するが、その成果を十七集の報告書に収録し、それぞれの街道の保存状況、文化財の存在、街道の特色等記録保存することができ、当初の調査の目的を達することができた。これも調査に携わつていただいた多くの調査員の方々、また、調査に協力いただいた方々、さらに各市町村教育委員会の御陰であり、改めて感謝を申し上げたい。

今後、この歴史の道調査が、ただ単に調査のみ終わるとどまらず、歴史の道整備の基礎資料として各地で活用していただきたいと考えている。

## 吾妻の諸街道

---

印刷 昭和58年3月25日

発行 昭和58年3月31日

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

Tel 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社

---